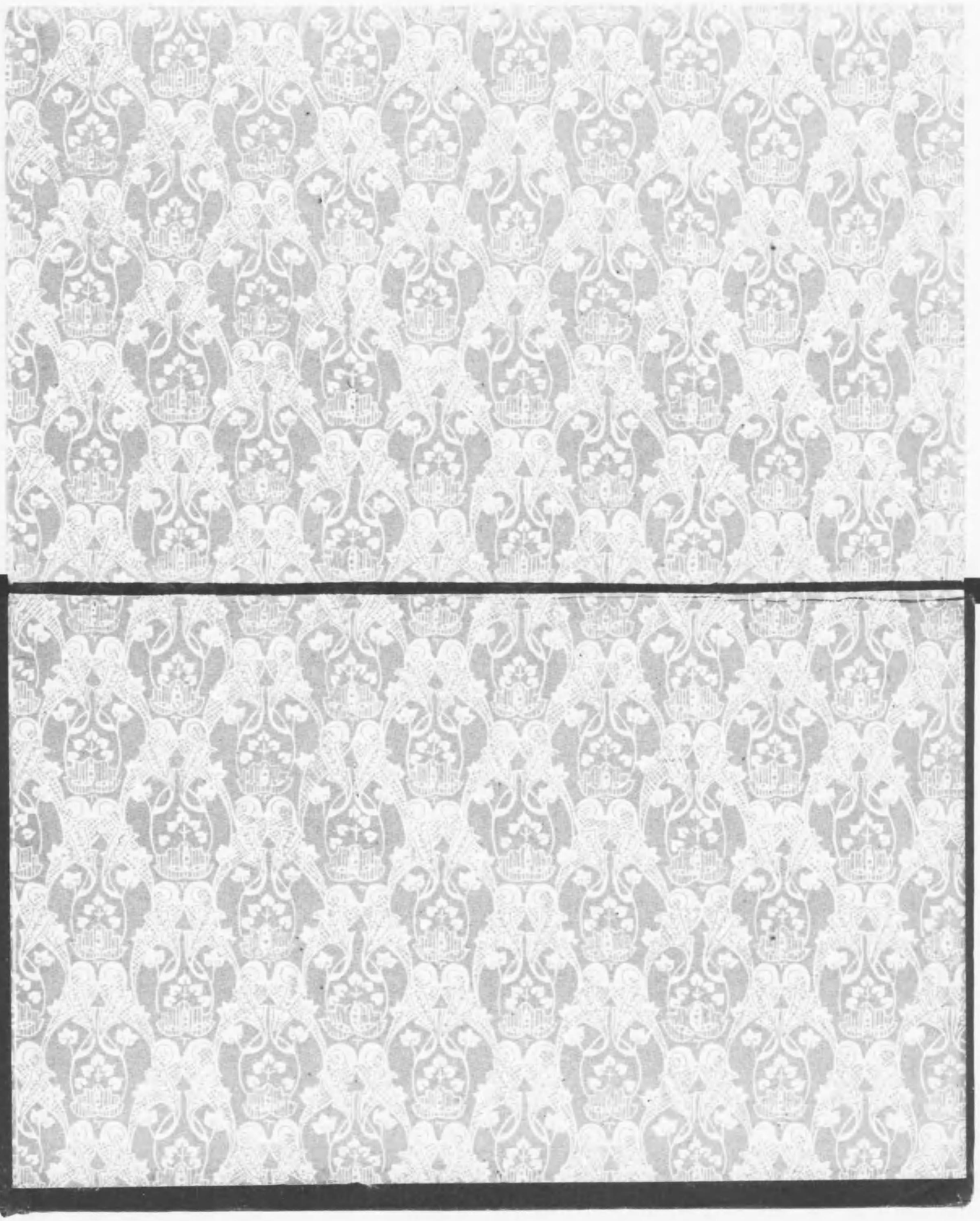
271-80
1209002755 61
271
80

部



271.5
80
271
80

文學博士 小西重直 閲
脇田良吉 著

異常兒教育乃實際

東京 金港堂書籍株式會社

大正
4. 5. 21
内交

序

脇田良吉氏は數年前より洛北百萬遍の白河學園に於て低能兒の教育を經營實施されて居る、日本で低能兒の教育を實施して居る場所は今日尙甚少く余の寡聞を以てすれば東京高等師範學校其他僅かに數ヶ所に過ぎざる樣に思ふ、殊に自ら經營し獨立の教育場として實施されて居るのは一層稀れであると信ずるのである、教育事業は元來決して容易のものではない、殊に低能兒教育の如き特殊教育は難事中の難事であつて眞に教育を樂み眞に犧牲の精神がなくては到底實行が出來るものではない、脇田氏の如きは實に日本に於ける特殊教育の發達に關して大なる貢献者であると言はねばならぬ

而して氏は單に經營實施の事業に當るのみではなく其研究の結果を發表して教育界を益することに力めて居らるゝのであつて實際の事業と研究と兩方面に於て大なる効勞者であることは何人も感謝する所である、先年其實際的經驗に基き『低能兒教育の實際的研究』を著はされたのであるが其中の教育日誌の如きは實に容易に得難い有益な材料である、然るに今又『異常兒教育の實際』を脱稿された、本書も亦氏が實際の經驗に基き低能兒教育及一般に成績不良兒等の教育法を懇切に説述されたものである殊に單に知識的の詮索のみではなく異常兒の教育に因みて教育の精神教育者の天職及家庭社會の任務等を説き異常兒教育の精神的事業を鼓吹し恰かも一編の修養訓の如き感がするのである、固より其所論中には尚將來の研究を待つて決せらるべき學術上の問題もあるのであるけれども凡て平易に記述されてあるを以て教育者以外に尚家庭の父母其他一般の人にも理解され易く通俗的にも有益なる研究であると思ふのである、尚將來に於ても益研究を積まれ此方面の中心とならるゝことを望むのである、本書を拜讀し喜の餘り感想を其儘に記し本書の成效を祈る次第である。

大正三年九月十日

文學博士　小西重直

自序

此書は異常兒中の成績不良兒と低能兒(中間兒)の救濟教育を記述したものである、而して記載する所は古今東西の學者教育家の研究になつたものが多い、故に余は著者として何等貢献する所はないのであります。

されど余が成績不良兒や中間兒の同情者たる一人であり、弱者の味方である事が、賢明なる讀者諸彦に了解され、大に批正の光榮を得て、他日教育界に何等かの光明を放つ者となる事を得ば、望外の幸福であります。

尙本書を公にするに當りて、小西先生が御同情深き序文を與

へられ、京都府教育會の幹部諸師が、多大の好意を表せられた事は、感謝の至りに堪へないのであります。

大正四年三月十五日

庭前の梅花雪中に馥郁たる朝

著者しるす

異常兒教育の實際　目次

緒論

學校で捨てられる異常兒はどうしたらよいでせうか

一　斯の問題は國家の一大事件にして一家の最大不幸……一

捨てられた子供と捨てられる子供　國家の平安何をしても人の問題　人見て法說け　個人教育と成績不良兒　小學校で捨てられる子供は窮民の卵　巧みな教育家と眞の救濟家　人種改良問題　人種改良問題の條件　人種改良事業と各種の事業　子屑　歐米の異常兒教育　異常兒教育の賜　古聖の歎聲　異常兒の數子を持つ親心

二　余は斯の問題のために十五ヶ年の苦心をなし尙將來も永く盡瘁する覺悟……一五

最初の動機　放課後の研究　春風倶樂部　文部省の報告書　樂石社　白川學園の創立　教育萬能論

三　根本的救濟策……二一三
人種改良問題　眞の人層　結婚問題　人格的結婚　ガルトンの研究　聾啞の遺傳　異常兒の原因　教育者と禁酒　原因は複雜
四　治療的救濟……八三
完全無缺な兒童ありや　智力ある異常兒　普通兒と治療學　教育亡國論　學校教師は醫師をもかねたい　校醫の改良
五　教育的救濟……四六
醫師の力と教師の力　露香の小說

本論

異常兒はどうして判るでせうか

一　父母の見方……六四
トリューベル氏調査表　生れながらの健康なる特徴　嬰兒の感覺　行步と言語
二　學校教師の調べ方……七八
三　醫師の觀察……八九
四　余の見方……九一
正常兒と異常兒　普通兒の定義　優等生及天才　天才の保護　兒童の分類　異常兒の認定

どうしたら救濟が出來ませう

一　家庭での救濟法……一〇七
親が子を救濟する　積極的方法　一睡眠　寢冷をさせぬ事　睡眠中の姿勢　二食物　化學的食養會食量　食量と異常兒　食物の性質　產前產後の養生　學齡時代の食養　食物の取り方　食事と作法　三遊戲　惡戲　遊戲と玩具　四訓練　三ッ子の魂百まで　消極的方法　一社會の惡風より遠ざける事　病氣負傷
二　學校での救濟法……一六四
異常兒の三種　甲種成績不良兒の教育法　京都市の成績不良兒數　家庭と連絡の實をあげる　校醫の改善　特別級　夏季休暇の利用　寄宿舍　乙種中間兒の教育法　一　能力遲鈍性の教育例　二　精神異常性の教育例　三　機關障碍性の教育例　四　心性不良性の教育例　五　先天性盜癖兒の教育例　異

常兒教育の一般　其一　人　其二　教育法
(一)養護　睡眠　入浴　體溫と體重　飲食物　運動　治療
(二)教授　讀方教授　讀本教授　綴方教授　書方教授　數へ方教授　事實算の教授　誤算の訂正　手藝の教授　唱歌教授　修身教授
(三)訓練　教師自身を訓練する事　兒童の活動的性質を看破する事　個人的訓練より一般的訓練に及ぶ　兒童の向上的傾向を利用すべき事　一旦興味を起したる善良なる行爲は一の習慣となるまで忍耐すべき事　身心上の病氣及び缺陷に同情を表する事　訓練には苦痛を感ぜしめざる事　罰　賞
教師の言行一致　教育の三大方法……三四八
三　社會的救濟……偽善家の横行
公娼問題　暗黑の倫敦
四　尙救濟し得ないものはどうするか……三五五
家庭教師　委託教育　特殊教育所

餘論

一　正食正養……三六二
二　丹田の修養……三六二
三　靈道の修行……三七八

捨てられた子供と捨てられる子供

異常兒教育の實際

脇田良吉著

緒論

學校で捨てられる異常兒はどうしたらよいでせうか

一　斯の問題は國家の一大事件にして一家の最大不幸

學校で捨てられる異常兒はどんなのでせうか、又茲にいふ學校とはどんな學校をいふのでせうか、私は茲にいふ學校を普通の小學校と見たいと思ふ。感化院や孤兒院などに小學校程度の教育をする所があるけれども、それは特殊の小學校でありまして、普通の小學校ではない。それで學校から捨てられた子供といふのは、感化院などにゐる子供で、捨てられる子供といふのは落第する子供、おつきあひで進級させて貰つてゐる子供であります。斯ういふ風に感化院にゐたり、孤兒院にゐ

たり、小學校で成績の惡いもの又其他種々なる事情で小學校教員が捨てたいと思ふやうな子供の處置は隨分大きな問題で、國家といふ立場からは容易ならぬ重大問題である。かゝる落第する子供や不良少年に近い子供を持つ親の身になつて見るならば、かゝる子を持たないものゝ想像し得ぬ不幸である。尙此の國家には重大問題であり、親の身になりては最大不幸である事を詳細にのべて見るならば、先づ如何なるが國家の平安を保ち得るかを考へて見ると、僞善家、危險思想家、犯罪者、惰民、病人、不具者、痴愚者等の少い國家であらうと思ふ。かゝる不良分子が少い國家であるならば、國の富は獨り增進する、國民の健康は期せずして保たれる、國民の道德は自然に向上して行くのである。

國家の平安

今や我國運の發展するに從つて當局者は各種の方面に於いて奮勵努力されてゐるが、如何なる問題も人の問題に歸する。自治の訓練、矯風の奬善、農事改良、町村の經營、貯蓄奬勵といふやうに盡力されるが、何をやつても人を改良しなければ其効果は割合に少い。幾ら監獄法が美事に出來ても、人を改善しなければ犯罪者や、不良少年は少くならない、又孤兒院だとか、養育院だとかいふ救濟機關が澤山に出來

何をしても人の問題

ても、根本的救濟事業が出來なければ却て國民に惰氣を催させるばかりである。如何に教育を奬勵した所で、形式的に外國に後れないやうにとあせつた所で、教育の眞意義を解せずにゐてはえらい人を作る事は出來ないのである。それは現代の教育に考えて見るがよい、人見て法說けとは子供の時に耳にした警句であるが、今の教育は人見て法を說いてゐるであらうか、個人教育とは隨分古い教育說であるが、今果して行はれてゐるであらうか甚だ疑はしい。されども此の個人教育といふ事は誤解されると妙なものになつて方法に於いては一人でなければ教育が出來ないといふやうな考を起し、德義に於いては天上天下唯我獨尊で手にも足にも始末のつかないものが出來て來る。されども個人教育といふ事は一の眞理であつて教育の眞髓は此の邊から出て來るのである。かゝる思想が向上して來た結果として小學校などで成績の惡い子供はどうするかといふやうな問題が起つたのであるが、我國では斯ういふバットしない問題は餘り注意されない、注意されない問題であるけれども專門に從事してゐるものから考へて見れば却々の重大問題で、彼の日本最大の東京市養育院にゐる窮民の零落した自招的原因を調べて

人見て法說け

個人教育と成績不良兒

小學校で捨てられる子供は窮民の卵

見るならば飲酒、遊惰、意志薄弱、博奕といふやうになつてゐるが、小學校で捨てられる多くの子供は、此の窮民の卵である。又行旅病人の自招的原因を調べて見るならば、飲酒、浮浪、女色、職業の厭忌、浪費、遊惰、不良自ら賤業に投じたるものなどといふ事である。さうして驚く事には富有の家に育つたものが隨分多いといふ事であるが、何故であらうか、其はいふ迄もなく學校で捨てられやうとする素因のあるものであつたに違ひない。之れを考へて見ると金錢は人生に最も必要にして有益なものであるが、又人によりては不必要であるばかりか、害をなすものがある。經世家が口を開けば富の事を論ずるが、もつと必要なものがある筈である。是等の事が判からないと折角苦心して人を救濟した所で無駄である。孤兒院で養育されたものが、種々なる空想を抱いて却つて國家に害をなすやうな事がありはしないかと疑はれるやうなものである。故に眞に國家を泰山の安きにおかうと思ふならば、どうしても教育によらなければならぬ。表面の教育や形式的の教育ばかりでくなて、裏面の教育をしなくてはならぬ。それは恰も一家の平和を計るのに主人ばかりの改善を促した所で主婦の改善を計らねば其目的が達せられないと同じ

巧みな教育家と眞の救濟家

人種改良問題

事で、巧みな商人は奥さんを取り入れるといふ事であるが、巧みな教育家や、眞の救濟家もさうである。表面ばかり見て仕事をしたり、人に目立つやうな方面ばかりに注意して教育したり、救濟したり、傳道をしても、堂奥に入る事は出來ないのである。眞の教育家は餘り目立たない人にあり、眞の救濟家は人知れぬ所にあり、眞の傳道家は世に超越してあるやうなものである。最近學術の進歩と共に人種改良問題などいふ問題が出て餘程勢力を認める事が出來るやうになつた。余も斯の問題には双手を擧げて賛成する。併し賛成しても條件付でなければ直ちに賛成する事は出來ない。其理由は人間が完全になるといふ事、又人間を完全にして行くといふ事は、宇宙の眞理であるから、余は此の問題に賛成する。されども其方法が理窟ばかりに走せて血のない涙のないどちらかといふと人格を無視した、動物や植物の種子でも改善するやうに法律を以てするなどの事は賛成する事は出來ない。又出來るものでない。そんなにしなくても誰が不良な子孫を造りたからう、誰が精神病者の子を產みたからう、誰が低能兒が出來てよろこぶものがあらう、完全なる子を產み、完全なる孫を產ませたいといふのは萬人の希望である。吾人

人種改良問題の條件

人種改良事業と各種の事業

が此の希望を有するは世の終はりまで繼續するのである。其間は人種改良問題は繼續するのである。故に余は此の問題の繼續する間は斯の條件をつけて贊成し助けたいと思ふ。然らば何故に余が斯の問題に條件をつけるかといへば、善種必らずしも善い子ばかりを造り出さないといふ事實があるからである、又遺傳は事實であるが、人が善くなる、えらくなるといふ事は、境遇や教育の力も加はるからである。それで眞に人種を改良するには、所謂人種改良論者が稱へたり實行するだけでは、十分の目的を達する事は出來ない、それには各種の事業が手傳をなして始めて實現されるものである。故に最近の人種改良論者は、「人間の本性中には未だ祖先の踏み來つた水中の生活や、野獸の群に交つた時代の血が混つて居る、故に人間の根本を如何にかしない內は何日迄經つても此通りの人間である」と斯ういふ事をいつてゐるが、余も此感想を痛切に浮べる。人間位尊いものはないが、又人間位變なものはない、實に人類は未製品である、甚だしき未製品である、驚く程の未製品である。よく沈思默考して御覽なさい、ほんとうの人が幾人ありませう、自己をよくし子孫をよくする人が幾人ありませう、讀者諸君の先祖から子孫の事をよく考へて御覽なさい、又五人や六人も子供のある人が揃ひも揃ふて完全無缺であるものが幾人ありませう、子孫といふ事はよく耳にしますが、何申分のない子孫を造るといふ事は容易ならぬ事である。お釋迦樣の子にても低能兒があり、孔子の子孫が今尙人類の指導者となつてゐるといふ事でもないから、人種改良問題は必要てはあるが、先づ學校で捨てねばならぬ樣な子供をどうしたらよいかといふやうな眞面目な問題に、文部省や內務省はもつと注意を拂つて貰ひたいと思ふ。斯ういふ問題の解決をつけて國に不生產的の人間と、不良少年や不良壯年乃至老年を少くしたら地方改善問題とか矯風奬善問題とかいふやうな問題は、獨り解決がついてくる。是は余の預言である今は了解する人が少い、五十年の後にも知る人が少からう、自分は時々さう思ふ余が斯の教育に對する趣味と、眞面目は神のみ知り給ふ所であると故に此の捨てられた又捨てられやうとする者のために同情者となり、友となり、親となり、師となりて教育する積りである。是は以上述べた如く國家のために大なる利益を認めるからである。大きな堤も蟻の穴から崩れるといふてはないか、小さい問題だからといつて打捨てる事は出來ぬ、一人の兒童て

子孫

歐米の異常兒教育

異常兒教育の歸

も大事に出來るだけの教育をしてやらねばならぬ。以上論じたがさて此の問題が歐米の先進國ではどうなつてゐるかを調べて見ると、獨逸が千九百五年一月十一日に調査したものによつて見ると、かゝる兒童のために設けた補助學校といふものゝ市町村が百八十個所もあつて、學校が四百九十二、兒童數が男が五千八百六十八人、女が四千七百五十三人であつたさうであるが、其他澳匈、瑞西國、伊太利、佛國、露國、瑞典國、及び諾威國、丁抹國、和蘭國、白耳義國等何れも盛に斯の教育が行はれ、英國は獨逸に倣つて斯の教育を盛にし、千九百三年の調査によると全ロンドン市に於いて六十の補助學校があつて、三千六十三人を收容したといふ事である。米國では獨逸と前後して此の施設があつて北米合衆國マサチユーセッツ州の州立學校は最も古きもので目下千餘人の兒童を收容して手工品の如きは普通人以上によく出來てゐるといふ事である。さうして此の捨てられやうとする比較的劣等な兒童の教育が歐米の思想界でどういふやうに注意されてゐるかといふと非常に重きをおかれて、教育上これ位重要な問題はなからうといはれてゐる、故に斯る教育によつて種々なる發見や教育說が行はれる、近くはモンテッソリー女史の

古聖の歎聲

異常兒の數

教育說の如きは低能兒教育より體得された點が多い。余の如き淺學な經驗の少いものでもさう思ふ。佛者が緣なき衆生は度し難しとか、キリストが犬に清きものを與ふるなかれとか、孔子が小人は養ひ難しとかいつたのは、かゝる教育をしなかつた結果としての歎聲である。而して此の歎聲は又科學の進歩した今日に於いても、前述した人種改良論者をしてどうかしなければ人間は何日までも此の通りであると歎息せしむるのである。斯の問題は特殊教育を以て最善の方法とするのである、多年監獄の教誨師をしてゐた留岡幸助氏が、不良少年を感化するは不良兒童の教育であると悟り、監獄法に精通した小河法學博士が人心改善の要義は教育的救濟事業にありと自覺せられたのも同樣である。然らば此の學校で捨てやうとする兒童又は捨てられた兒童は何程あるであらうかといふ事を調べて見ると、京都市六十二ヶ校の尋常小學の四萬人の就學兒童の中に、三百人はある、嚴密に調べたならば、三百人が四百人も五百人もある事を證明し得る。尙之れに學校に出ないものを加へると千人はある見込みである。然らば全國ではどうであらうか、文部省が明治四十五年に調査したものによると低能兒が十三萬九百人、白痴

が四千七百七十一人、癲癇二千三百四十三人、其他不具者が二萬七百二十五人、總計十五萬八千四十三人といふ事であるが、是等も實數ではないが概算し得る事が出來る。其他に內務省で調査する不良少年の十幾萬人といふものを加へると、二十五萬といふ多數で、兎に角も何十萬といふ此の多數が不生產的の人となり不良少年になるのと、生產的の人となり道德上向上し得る人になるのと、國家の利益問題から考えて如何に有益にして趣味ある事業であらうか、況んや一人の亡ぶにも悲しむものゝ立場から考へて幾十萬の多數をどうして對岸の火災視し得る事が出來やう。先天下之憂而憂て余は文務省の命令や法令を待つて仕事をするやうな事はしてをれないのである。以上論じたる如く國家に取りては重要問題であるが、一家にかゝる不健全なる兒童があるとすればどうであらうか、子を持つた親の心は皆一つ、自分の子が國のために害をなすやうなものになりはしないかとの心配の起つた時にどういふ感想が浮ぶであらう、自分の可愛孫が只食ふ事より知らない犬か猫のやうな生涯を送らねばならぬてはなからうかとの憂が出來た時にどういふ悲しみに打沈むであらうか。

子を持つ親心

白金も黃金も玉も何かせん
　まされる寶子にしかめやも

と人情の奧底をうがつた寶の瑕を見出した時にどんなに失望落膽するであらうか、余の筆では盡し得ないから、余に或る婦人の送りたる手紙を記載して、如何に捨てらるゝ子を持つた親が人知らぬ涙にむせびつゝあるかを示さう。此婦人は不幸な子供を一人前のものにしたいが、家庭の新舊思想相違の結果姑は教育するに及ばずといひ、母親は何を捨てゝも教育したいと主張し、遂に姑の承諾を得るは不可能と認めて主人が商用のため他行中に余を訪ねて來られるに當りて主人に當てられたる書面である。

拜啓先日の御手紙有難拜見致し候
急ぎ亂筆御免ん突然ながら○○事教育上に付皆々樣かね〳〵御配意下され私も始終忘るゝ隙無之御主人樣も御承知之通り一昨年榊博士の說にも教育が遲れて居るから一日の猶豫も無く充分教育成さねば人となる事出來ない一番適當は東京補助校に入學させ充分教育すれば生活上差支なき位の者となる樣申

され候○○に卒業を待ち直樣入學させて下さい舛樣御兩親樣や御主人樣に御相談申上舛積にてそれのみ樂みに日を送り居り候處生憎と○○には徵兵合格致し且又補助校取調申候へば年令も十四歳以下にて最早滿員にて到底入學出來不申私も失望の餘り仕事も手につき不申ぼんやり日を送り居候折柄京都に(白川學園)とて補助校同樣の學校有る事聞き及び申候間御主人樣御歸宅次第御許しを受けて是非共入學させて頂く筈に考へ居候へども御歸りを待ち居候て若し又此れに手遲とも致し候ては終生人となる事出來ず本人の不幸は申に及ばず御互に老後悲境に陷り申候事目前に付餘り勝手に候へ共兎に角規則書取寄せ調べ丈致置き申候所果して年令十四歳以上は入學出來ず依て今年中途に入學出來ずやと學園宛照會致候所九月廿八日迄に兒童を連れ來園する樣申參り候間御主人樣は御不在中なり心はせくし實に進退極り遂に口實を以て保護者病氣につき暫く延期願ひ候所十月十五日迄には必らず來園する樣返事參り候間私も氣を失ふ程心配致し種々工面も致し候へども御主人樣は御不在中なり工面もつき不申依て母上樣にお連れ下さい舛樣御願ひ申さんと幾度も思ひ申候へども御老體の父上樣に御不自由御見せ申のが厭ひのみ遂に申上かね○○母に上京致呉れ候樣賴みにわざ〳〵遣し候へ共此れも○○の退營迄は出來ず候間俄に心機一轉致し御主人樣御在京中に急ぎ上京致御拜眉の上篤と御相談申上せひ御許し受升心組にて自分に連れて上京致升事に決心致候今日出發致し候間何卒〳〵○○人となるとならんの境に付やさしき耳もて御聞き入是非とも御許下され御目にかゝり委しき事は可申上候へ共兎に角一寸以前御相談申上候先京都學校近邊の旅館につき早速電話にて御報申上升から御出を願ひ上候

都門の學校に入學致させ候上は隨分學費も費し申事とは存候へども○○事更に見込無き白痴者と認め候へば私もいさぎよく斷念致し何も彼も前世よりの因緣と諦め天に任せ申候へども敎育次第にては人となる見込あるものを親の義務として此儘捨置くに忍び不申もう〳〵私は○○さゑ人となり候へば我身は犧牲にしても少しも厭ひ不申候

假令百萬の財寶をつみ榮華を極め申候とも○○何の辨へも無く人に輕蔑のみ

受けんには何の樂しみも無く御互に悲しき境遇に陷り一日も安き思ひは致し不申候間御兩親に濟まないとか○○○等が可愛いとか思ふ位ては迚も○○を完全の者となす事六ヶ敷樣存じ申候間○○可愛いと云ふ點より義理も愛情も忘れ重い任務を捨て御老體の御兩親樣を跡にし可愛い子供を殘し懷しい故鄉を振捨て上京致升私が心の內御推察下され候

一時は學資を費し且皆樣に御不自由御見せ申御互に厭ひ思ひ致し候へども○○完全の者となり候上は其時こそ眞の快樂を得苦樂を共にして圓滿の家庭を作り幸福の身となり共に樂しき月日を送り可申之れのみ樂しみに苦を前に樂しみを跡にする主義を以て決心致候何卒〳〵御察しの上御贊成下されたく手を合せて願ひ上度候

申上たき事山々なれども無學性なる私且又心急き思ふ半分も書き盡しかね候間御拜眉の上と申殘度候

燒野のきゞす夜の鶴誰か我子の行末を思はないものがあらう、まして缺點ある子には一層のふびんかゝり人知らぬ涙にむせぶのである讀者は此の手紙を讀まれて如何に思ひ給ふらん、余の如き涙多きものには茲に書き出すさへいたしき心地す、事茲に至りては理窟にあらず、國家のためなどいふ餘地もなし、只涙なり、只慈悲なり、只矜恤なり、讀者よ諸君が五本の指の中一本を負傷されたら如何に感じ給ふや、無神經にあらざる上は治療策を講ぜらるゝならん、此の心を押し擴めて世の缺點ある幾十萬の不幸兒に想到する事が出來やう、其幾十萬の親心は皆これである、教育により境遇により口にするか筆にするか、心に思ふかの違ひこそあれ、皆これである。余は此の悲慘なる有樣を見て默視し得ぬ一人である、否余は此の不幸兒達の救濟者である、而して余の救濟は必らずしも余の住むあばらやに於いて救濟するとの意味のみでない、あらゆる手段方法を以て斯の目的を達したいと思ふのである、本書を著述する動機の眞相も茲にあるのである。

二　余は斯の問題のために十五ヶ年の苦心をなし尙將來も永く盡瘁する覺悟

前章に余は學校で捨てられる兒童の救濟者であるといつたが、さて余にそれざけの資格があるかどうか、殊に近世の如く萬事ハイカラでなければ世渡りが出來な

最初の動機

い時節に何所にそれだけの資格があるかといふ事は自分免許でも一通りは讀者に知つて貰つておく必要がある。それには先づ何故にこんな問題に趣味を有するに至つたか、此の最初の動機は余が京都市の某小學校の先生をしてゐた時に、或る寺に寄寓してゐたが、そこのお小僧が成績の不良兒であつた。併し成績の不良兒であつても全部の不良兒といふのではない本を讀むとか作文を作るとかいふ事は相當に出來たが、算術がどうしても出來なかつた。さうして此の子供が余の擔任の子供であつたから、余も一層同情を寄せて學校から歸ると復習をしたが、却々思ふ樣に進まない、又校長も近くてゐたので骨を折つて見たがそれでも進まない又此の小僧には教育上の三大衝突があつた、それは校長の教育方針と余の教育方針とお寺の教育方針とであつた、これは小僧のためには非常に不利益であつたそれで余は此小僧をして溫い家庭において、一定した教育主義によつて教育したら、よい結果を見る事が出來るがと思ふた。又同じく余の擔任で之れ亦或る寺の小僧で、非常に成績の惡いものがあつたが、其原因を調べて見ると小僧になる迄に或る家に養子に行つてゐたが非常に虐待されて食物も食べさせなかつたといふ

放課後の研究

やうな目にあつた爲めに、頭をこはして仕舞つたと見える。それで此の子供には復習有害を說いたのであつた、尙茲に特に記すべき事は余の奉職してゐた學校は貧民窟も澤山あり又遊廓などもあつて、それは〳〵種々なる兒童があつた。此の種々なる兒童は余の教育好きなものに恰好の地であつた、先づ家庭改良問題、遊廓分離問題特殊教育問題は重なものであつた。就中特殊教育問題は余が最も趣味を有した問題で、成績不良兒をどうするかといふ問題が、余の今日ある所以で、最初は成績不良兒がどうなるか、寧ろ傍觀して見やうといふやうな考で放任した、無論無責任に放任したのでなかつた、どうもよくない、殊に社會も家庭もメチャ〳〵な所であるから、成績不良兒の惡い方面に向つて行く事は常識のあるものならば誰でも考へられる所で、實際目の前に見てゐる余には種々なる研究問題の種を得た。要するに成績不良兒殊に落第さすべき兒童は捨てるべきものでない、同情を以て教育すべきものであるといふ事に決定した。さうして明治三十七年より放課後に成績不良兒のみを集めて教育する事にしたが、却々に面白い結果を見た。又そればかりでない余が平素やつてゐた事が間違つてゐた事が發見された、故に此の

事を外部に向つて贊成を求め京都府教育會へ特殊の學校を設けたらどうかといふやうな問題を出して見たが時の事務官などはまだそんな學校は外國にもなからうといふやうな世間狹い考で問題にしなかつた。故に余は余の奉職してゐる學校を中心にして、附近の學校の成績不良兒を集めて、公務の傍ら實驗して見た、此の集つた兒童には一二の白痴もあつたが、余の此所謂中間兒もあつた、さうして此の研究機關を春風倶樂部といつた所が、此の春風倶樂部の成績が又却々よい成績であつた。故に予の好奇心は益々增長して大に發展したいといふ野心が盛んになつた。故に明治三十九年十月に東京市に於ける特殊教育を參觀した、其場所は瀧野川學園、家庭學校、萬年尋常小學校、盲唖院、養育院等であつたが、何れも余が目的とせる兒童を教育してゐる所がなかつた。故に文部省に行つて參考となるべき書類の閲覽を乞ふたが、其時に獨逸のマンハイムの新學級組織になる報告書が來てゐた、それが余には大なる刺戟を與へ思はず案を打つた。さうして又茲に始めて理想の教育機關になるのであると思ふた。余多年の宿望が既に獨逸に實行されてゐる事を知て、余の希望が空想でない事を知り、大に快感にうたれた。少くとも京都市に此の制を取りたいと思つた。今日でも此の希望に向つて進んでゐる積りである。それから又伊澤修二先生が低能兒教育をやられるといふ事を聞いて訪問すると元良先生創見の練心機について研究されるといふ事であつたので、余は又元良先生を訪問して心理學上よりの御指導を受けて歸京した。それから春風倶樂部の改善發達を試みたいと思ふた、時恰も好し伊澤先生が京都に來られ京都市教育會の席上に於いて樂石社にて低能兒教育をやるから誰か來る者はないかといふ事であつたから、余は此の事業が公務の傍らに遂行し得べき簡單な仕事でない事を知つたから、伊澤先生の下で勞働する事を乞ふたが、幸に快諾された。又そればかりでなしに伊澤先生は余の授業を參觀された、そこで愈々明治四十年三月末から伊澤元良兩先生指導の下に練心機の實驗をしたが、三ヶ月で一通りの研究をした其時の研究報告書ともいふべきものは、注意の心理と低能兒教育である。次に此の研究を東京帝國大學の臨時研究所として九段坂下の富士見小學校で七ヶ月ばかり實驗した。尙其他余に最も力ある指導をうけたのは、瀧野川學園にて石井先生より低能兒教育に必要なる講話をきゝ、又海軍大學教官吉河爲

春風倶樂部

文部省の報告書

樂石社

白川學園の創立

久藏氏よりは精神病學の立場から時々指導を受けた事であつた其他文部省の講習だとか內務省の講習だとか又は帝國教育會の講習だとかいふやうに事業のためになる事は東奔西走して調べた。其間二ヶ年であつたが墨堤の櫻が何時咲いたやら、淺草公園にどんな興業があつたやら知らずに過した。此の間に京都府教育會では低能兒研究をやらうといふやうな話が出來て、余が東京にゐる間から教育會の囑託といふやうな事になつて、遂に低能兒教育の實驗をなす事になつた。それは明治四十二年七月に、今の住所白川學園を創立したのである。屈指すれば學園創設以來五ヶ年の星霜を閱したが、其間には又余には種々なる實驗をなし感想を浮べつゝある譯である。先年小僧に特殊教育を試みた時、浮べた感想を今實驗した、小學校の先生や世の父母達が匙をなげた、ワンパクモノでも人にする事が出來るといふ確信を得た。小學校の先生や父母達が糞造器と失望してゐる遲鈍兒でも、手を盡しさえすれば人らしいものになれるといふ信念が起つた。余が茲に記述した十五ヶ年の經驗と感想は世界の教育界がたどり來た徑路と少しの相違はない。其筈である眞理は平凡にして一つである、バイカラ必らずしも眞理を說くに限らない、之れ余が机上の空論を避け書物の奴隸にならずして、出來得るだけ實際的でありたいと思ふ所である。以上十五ヶ年の經驗より得たる此の捨てられやうとする兒童を救濟するには種々なる方法があらうと思ふ。白川學園のやうな所で教育するのも妙であるが、余は出來るならば、もつと早く白川學園のやうな所へ來ない中に救濟したいと思ふ。それには根本的の救濟策もあり、又枝葉の方法もあらうが、本書は特殊教育所へ送るまでに救ふ一助にもと思ふて、筆を執つたものである。何ぜかといふと入園する兒童も可愛想であるが、又教育する人にも氣の毒に思ふ、大體低能兒教育に從事する人、又は從事の出來る人は、相當の人でなければならぬ、此の相當の人を澤山にかゝる事業に從事させる事は、大に考へねばならぬ事である、余は今日余と共に働いて貰つてゐる主婦や青年が夜も安眠せずに、努力するのを見て、は人生の悲慘事だと思ふからである。それよりもかゝる問題は子を持つた親が出來るだけの方法を講ずるのが親も安心であらうし、國家からいつて經濟であらうと思ふから、どうかして家庭で救濟が出來るならば、さうした方が上策であらうと思ふからである。斯ういふ目的であるから、本書が學校

教育萬能論

の先生の手に入つて何か利する所があると思はれたら、かゝる不幸兒を持つ親達に讀む事を勸めて貰ひたい、余は衷心から不幸兒の救濟を思ふからである、國家の發展を希ふからである、人類の向上を期待するからである。此の國家の發展とか、人類の向上は教育でなければならぬ、余は教育萬能論者である、國の富も、道德も、教育によつて出來る、斯ういふと教育の眞意を知らない人は、教育は萬能でないといふげれども、其は眞の教育者が少いからである。今眞の教育者が幾人あらうか、大きな自叙傳を書いたり、何か具體的記念物を殘さうと弟子に勸める教育者はあるが、眞の教育者は幾人あらう、ペスタロッチーを紹介し、ペスタロッチーの學說を稱揚する人は澤山あるが、ペスタロッチーを實行する人が幾人あらうか、斯ういふ一向利益のない隱れたる問題に注意される讀者諸君には釋迦に說法でありませうが、多數の教育者はどうてせう、さうしておいて教育は効果が少いとか、教育は有害無益だとかいつた所で駄目である。此の意は大學教授より幼稚園の保姆までが教育の眞意を悟つて活動すれば判る。余は教育萬能論の唱導者であり、實行者でありたいと思ふ。されど余は教育學者ではない、教育學者にならうとは思はない美事な國民を作り出す見識も腕も持たない只學校で捨てた兒童の救濟者である、同情者である。又白川學園といふ特殊教育所の事業家でもない、唯世に捨てられたる兒童が救濟されたらよいのである、本書は此の意志の一端を知つて貰ふ事が出來れば望外の幸福である。余は斯の問題のために永遠に働く積りである。

人類改良問題

三　根本的救濟策

余は學校で捨てられやうとする兒童、又は捨てられたもの救濟者であり、同情者であるといつておいた。又本書は其目的の一部分を達するために著したのであるといつておいたが、然らば如何にして此の重大問題の解決をつけるかといへば、先づ根本問題について一言のべておかねばならぬ。それは前にものべたやうに人種改良問題である。此の人種改良問題は換言すれば低能者を少なくする、永遠の理想としては低能者を絕對になくするといふ事である。此の理想に反對するものは誰もなからう、國が治まらないといふのは低能者があるからである、又しても私慾の動機で戰爭をしやうと考えてゐる國は低能國である。自己の利益ばかりを計つて社會の事を思はない、世界の事が判からない、子孫の事が判からない、さう

眞の人屑

して又眞の自分といふものも判からない、斯ういふものが低能者である。斯ういふものが世の中になくならねば世の中は治まらない。色眼鏡でもかけた人は車夫や人夫を人間の屑のやうに思ふがさうではない、眞の人屑といふのはそんなものでないもつと注意して觀察せねばならぬ、少し話が横道へ這入つたがさて人種改良問題の根本問題といふのは、結婚問題である。瓜のつるには茄子はならぬといふやうに善種は善い子を產むといふのは眞理である。血族結婚が惡いといふのは、血が古くなるから惡いので善いもの同志の結婚ならば益々よくなるから、血族結婚必らずしも惡くないといふ事であると最近の學者に稱へられてゐるやうであるが、何も學者の說を聞くまでもない事であらうと思ふから、善種ならば血族結婚をするがよいと思ふけれども例外のある事は考へねばならぬ。余は日本に行はれる野合的の自由結婚と、不親切なる媒介結婚を排斥したい、野合結婚の惡いといふ事は論ずる迄もなく、敎育ある人の知る所であるが、媒介結婚の弊害を惡いといふのではない、只媒介者の道德をいふのである、自分は始終さう思つてゐる、結婚ばかりでない日本人が人を世話するとか媒介するとかいふ事は多く虛僞を以

結婚問題

人格的結婚

て堅めてある。無論眞面目なものもある。信實なものもあるが、多くは虛僞である。目前の義理だとか、姑息な人情とかいふやうな名の下に、よい加減な事をする。之れが日本に離婚や斯の問題より起る罪惡が行はれるのである。斯ういふ問題をどうかしなければ、矯風問題だとか、家庭の改良だとかいふ問題を出した所で無効である、大體日本人は虛言が巧であるやうに思はれる。此の日本人の虛言を矯正しなければ結婚問題ばかりでない、國家が危機に陷る日が來る。虛言好きの日本人を善導して行くには敎育でなければ出來ない、敎育も今日のやうな虛僞的敎育では何時になつても同樣であらうと思はれる。是は有爲の敎育者には大に反省して貰ひたい、讀者が若し結婚媒介を試みられるやうな事があるならば、眞面目にやつて貰はねばならぬ、若し眞面目に出來ないならば、絕對的にやらぬがよい、さうして結婚について余が此の問題に趣味を持つやうになつてからの主張は人格的結婚の唱導である。此の人格的の結婚は識者の間には既に行はれてゐるが、未だ小數である、現時は小數であるが、人間が進化するに從つてさうなつて行く、又さうならねば人間は進化しない。天下の敎育者殊に中等敎育、又は高等敎育に從事

してゐるものは、大に努力せねばならぬ。此頃は性慾教育が行はれてゐるが、余は此の性慾教育については經つた話を聞いた事もなし、又書物も讀んだ事がないから、善惡の批評は出來ぬが、若し人格的結婚と衝突するやうな事があるならば、それは考へてやらねばならぬ、ハイカラ先生は自分の虚名を得んがために、血氣にはやる青年をつらんために後始末のつかぬやうな事をするものが隨分あるやうであるから話すものも聞くものも大に注意せねばならぬ。兎に角よい種は善い實を結ぶといふ一例をあげて見やう、ガルトンが其著「遺傳的天才」に於いて攻究した拔群人は合計九百七十七であるが、其中絶群と呼ぶを得る人が四百十五人で、此拔群人は相互に親族關係になつて居るものが多く、九百七十七人を三百の家族に包括して仕舞ふ事が出來る、卽平均一家から數代間に三人强の拔群人を出してをるのであるから是れは偶然に出たとしては餘り數が多過ぎる、矢張り遺傳により優良なる稟質を得たものと見ねばならぬ、殊に一の拔群人と他の拔群人とが血統上甚親密なる關係を有して居るは著しき事實である。多數の人を一括して云ふと、祖父の數は父の數の二倍である、又ガルトンの實際調べた統計によると、孫(男)の數は子(男)の數の凡そ二倍である、然るに偉人は祖父に偉人を有するよりも父に偉人を有する方が多いといつてゐるが、それは遺傳に加ふるに、教育と感化があるからである、百家族中の最も卓絶せる偉人の親族が矢張り偉人である割合は左の通りであると。

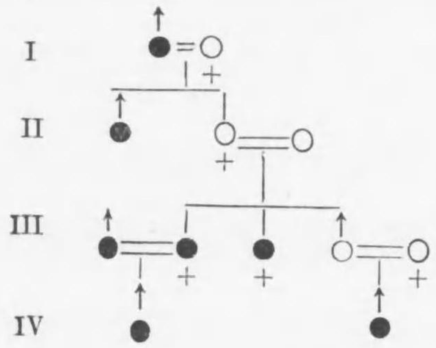
諸種の偉人

一次系	父	31 %
	兄弟	27 %
	男子	48 %
二次系	祖父	8 %
	叔伯父	5 %
	甥	5 %
	孫	7 %
	曾祖父	1 %
	祖父の兄弟	1 %
	從兄弟	2 %
	甥の子	1 %
	曾孫	%

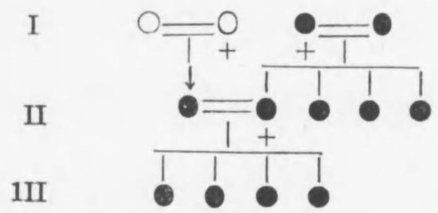
卽ち偉人は親の性質を稟け偉人の子は又偉人の性質を稟くる事が親族中の他の者の性質を稟くるより餘程多い事になつて居る、親子孫と云ふ直系親族間に稟質の遺傳が最も强く行はるゝのであるから、一般に見て優良稟質は代々相傳するものと見る事が出來るといふのであるが、是は信賴してよからうと思ふ。

次に劣等の例をあげて見るならば、「聾啞の遺傳といふものは大に注意すべきものである、ウエサム氏の「家族及國民」と稱する書中にムース氏の調査した系圖が載せてある、系圖は左に掲載する如きものので、黑圈は聾啞を示し白圈は通常人を示すのである。

聾啞系圖其一



聾啞系圖其二



精神的不具者系圖

以上は參考までに記載した譯であるが、聾啞同志の結婚でも普通の子供が出來てゐるのであるから、惡い種必らずしも惡い實を結ぶに限つた事はないのであるがされど君子は危きに立寄らずといふ警句があるやうに惡い種に當らないやうにせねばならぬ。それは前にもいつたやうに人格的結婚さへすれば自分にも氣持がよい、又不完全な子供が出來た所で恥づるに及ばぬ。けれども一時の感情的の

異常兒の原因

結婚や財産とか、名譽とかいふものについて結婚して面白くない子供を造つたならば、どれだけ面目ないてあらう、恥かしいてあらう中には此の恥を知らないものもあらうが、若しそんな者があるならば親も子も教育せねばならぬのであるけれども例外が多い理屈通りには行かない、理窟通りに行かないから人種改良問題が學者が机上で空論をするやうには行かないのである。故に吾々は根本問題として論ずるが却々筆や口で論ずるやうには行かないのである。尙學校で捨てられる子供の原因を一二のべて讀者の反省を促しておきたいと思ふが、其第一は酒である。酒は百藥の長だといふが、飲みやうによつてはさうかも知れない、又さう考へて飲むならばさうてあらう。けれども世間の人は酒に飲まれる人が多い、此の酒に飲まれるといふ人が、學校で捨てられるやうな子供を作るのである。余が經驗してゐる子供でも十人が九人までは大酒家である。さうして大酒家は多くは道德が健全でない又業務でも統一が取れてゐない成程金を作る事はするかも知れぬが、其金がどうも善用されない、それで酒を藥に飲む人ならばよいが、飲まれる人には絶對的に禁酒せねばならぬ。讀者にしてさういふ酒に飲まれる人を見られたならば、禁酒を勸めて貰ひたい、一人に禁酒を勸め會得して實行し得たならばどれ程有利な事業か判からぬ。又當人がどれだけ悅び感謝するか判からない。さうして不良な子供を作らないといふのであるから、一人に禁酒を勸めるのには大事業である。余は或る大酒家に禁酒を勸め成功したが、本人の悅びは大したものである。又大酒が惡いといふ一人の告白談を擧げて見ると、斯ういふ事をいつたものがある、「先生大酒の惡いといはれる事は先生の御話の通りである、私の主人は大酒家ですが、澤山な子供が出來ましても育ちません又低能兒も出來て死にましたものもありますが、唯一人の子供が育つてをりますばかりです」と此の通りである。酒害の事を一々記述するならば大したものであるから參考までに二三をのべて見るのであるが、一千八百六十二年に、佛國が露國より敗を取りし時、疲勞せし隊と然らざる隊とあつて後之を研究したのに、疲勞せし隊は平素より酒を飲みし兵士で、疲勞しない隊は酒を飲まない兵士である事を發見したさうである。又酒を飲む兵士は寒氣に抗抵する力少なく、往々病にかゝるさうである。又クリミヤ戰爭の際酒を飲んだ兵も戰場に於ては飲めないものとして平素から其習慣を

附けて居つたのに、或市街地へ入りし時自由に酒を飲むことが出來るやうになつたので、俄に病兵を増したさうである。又獨逸の或鐵道技師は工夫を二組に分ち甲には酒を與へ乙には與へずして甲乙同時間内同一の作業に報ぜしめたのに、酒を與へた組は飲めば渇し渇しては又飲んだ、爲めに身體が疲勞して其時間内に作業を終はる事が出來なかつた、さうであるが、之れに反して酒を與へない組は見事に其課程を終へた上に他の作業まで手傳つたさうである。此の通りに日常の業務にまで酒の害は及ぶのであるから、酒を藥として飲む人は差支もなからうが、それでない人は禁酒會員になつて貰ひたい。少くとも教育者は禁酒會員であつて欲しい、酒を飲まなくとも交際は出來る、酒を飲まなくつても學校の經營には當たれる、酒で仕事するのは劣等である、少しても靈的修養の味を覺えたものは、食物で仕事をしたり酒で人を釣らうとは思はないであらうと思ふ。先づこれ位で留めておいて、我國禁酒論者の主稱者醫學博士片山氏の酒害の眞相中から、酒が不健全なる子供を造るといふ表を轉載して、此の項を終はる事にする。

各十の酒客及中等飲酒家族に於ける承繼者に關する統計（デンメ氏調査）

小兒の種別	十の家族酒客小兒五十七	十の家族中等小兒六十一
生後直ちに生活衰弱に依て死す	一二	三
初月に痙攣（中等家酒家には腸加答兒にて死す）	一三	二
白痴	二五＝四三・八％	五＝八〇・二％
畸形（生來）	六＝一〇・五％	—
發育不全（倭小）	五＝八・七％	二＝三・％
童年期に癲癇となる	五＝八・七％	—
（內アルコール濫用）	五＝八・七％	—
舞蹈病に罹る	（二）	—
武蘭埜に耽けて遂に白痴となる	一＝一・八％	二＝三・三％
精神發育遲し	（一）	％
肉體に異狀なし	—	二＝三・三％
肉體及精神に異狀なし	二二＝三八・八％	五四＝八八・五％
	一〇＝一七・五％	五〇＝八一・九％

五十の酒客家族（父母共に酒客）

		（一八七）の承繼者に對する％	（一三五）の生存者に對する％	（五四）の大人に對する％
死産	一三（一三九）五二	七二〇・八		
早産	五一	二九・三	三七・七	
痙攣	三四	一八・六	二五・二	六三・〇
酒客	七七	四一・二	五七・〇	
變質及低能	二〇	一〇・七	一五・〇	
悖徳及狀罪	三〇	一六・〇	二二・二	
癲癇及ヒステリー	二四	一二・八	一七・七	四四・四
精神病				

以上によつて飲酒が如何に不健全なる兒童を產出するかゞ明かになるであらうと思ふ。尙其他梅毒不品行等が異常兒を產み出すかを諸氏の研究表により明かにしておかう、此の表については日本でも一二はないではないが、まだ是だといふやうなものが出來てゐない、外人の手によつて出來たものでも疑はしいものがある。さうして又一つの原因によつて異常兒が出來るといふ譯のものでない、余が

小數の研究によつても原因などいふものは容易ならぬ複雜なものであると思はれる。故に酒必らずしも異常兒を作るに限らない、又低能者必らずしも異常兒を作らないので、實に不思議な事が多い、されども最も有力なものは遺傳であらうと思はれる。故に異常兒を作らないやうにしやうと思ふならば人類全體がえらくならねば根絶する事は出來ぬ。されども人間の自然性として善き子孫を繁殖させやうと思はないものはない、而して其心のある人のために左表が何かの參考になりはしないかと思ふ。

ビベル氏白癡原因表

甲　生來性白癡

	男	女	合計	百分比例
一、兩親又は近親の精神病	二九	一四	四三	二〇％
二、兩親の結核	二四	九	三三	一五％
三、父の大酒	一五	一二	二七	一五％
四、不明	一三	七	二〇	九％
			二一五	

	男	女	合計	百分比例
五、祖父母の結核	一〇	八	一八	八%
六、梅毒	九	六	一五	七%
七、兩親其他痙攣を有せしもの	六	四	一〇	四%
八、妊娠中母の苦慮	七	三	一〇	四%
九、兩親祖父母の智力足らざるもの	九	一	一〇	四%
一〇、血族結婚	六	三	九	四%
一一、早產	四	二	六	三%
一二、妊娠中母の墜落	三	三	六	三%
一三、同恐怖	二	一	三	一%
一四、同疾病	二	一	三	一%
一五、母の子宮病	二	一	三	一%
一六、父母の聾啞	二	一	二	一%
乙　後天性白癡	一	—	一	一%
			七五	

一、猩紅熱實布垤里　一六　六　二二　二九%
二、外傷(轉落)　一一　四　一五　二〇%
三、ヒラチス　六　四　一〇　一三%
四、麻疹　三　六　九　一三%
五、腦質炎　五　一　六　八%
六、難產　五　一　六　八%
七、濕氣ある住宅　一　一　一　一%
八、鉗彼產　一　一　一　一%
九、腎水腫　一　一　一　一%
一〇、神經性熱　一　一　一　一%
一一、頭部外傷　一　一　一　一%
一三、日射病　一　一　一　一%
一三、不明　一　一　一　一%

以上に列記したるものは白痴の原因であるが、低能兒は之れに程度の低きもの、盲

完全無缺な兒童ありや

啞兒の如き病原の種類を異にしたものと見てよいのである。何れにしても異常兒と研究し救濟するには、以上諸種の原因を救濟する事が根本的救濟である。

四　治療的救濟

前章に於いて根本的治療策を述べておいたが、さて異常兒の原因が遺傳にあるから善種の選擇にかゝつてそれで直ちに人種を改善して行く事が出來やうか、斯う質問するならば理窟上出來ると答へねばならぬ。されども複雜なる人間はさう學者が机上で論ずるやうには行くものでない、斷じて行くものでない。さうして完全だとか、缺點がないとか、思ふて居る學者は果して理想的の人格者であらうか、又小學校の先生達が少し異常のあるものを見て直ちに低能兒だとか、劣等兒だとかいふが其いふ教員たちが果して理想の人格を具へてゐるであらうか、完全無缺な人格者といふものは今の世には得難い、又完全無缺な兒童も少ないのである。自分は時々萬物の靈長たる人間が何ぜもつと早くえらい者にならないであらうかと思ふ事がある。斯ういふ風に考えて見ると、酒は惡い梅毒は惡い、無論惡い、惡いから人間の生命を知つてゐるものゝ近づくべきものでない、されどそれだけで

智力ある異常兒

人類は改善されぬ。又結婚を人格的にした所で子孫といふものは出來るお釋迦様の子にても低能者があつたやうなもので、讀者には低能兒がなくても、其親戚とかにないとも限らぬ、又孫には出來るかも知れぬ、よく教育者が自分はいつかどの聖人君子のやうに又自分の子が理想的に教育が出來てゐるやうに思つて、人の子の缺陷に同情もないものがあるが、精査して見るとそんなものでないと思ふ事がある。文部省や內務省が調査する異常兒は三十萬か四十萬かも知れないけれども實際はさうでない、又異常兒童は少くても、異常大人は國民の七八分までさうである。故に根本的救濟策を講ずると共に、異常兒を救濟する方法を講じなければ何時になつても世は泰平にならない。國家は善き人格者の結合團體にはならない。三十萬の異常兒が三分の一結婚するとし、一人が三人の低能兒を產み出すとすれば、矢張り三十萬の異常者となつて來る。又本書には餘りいはない積りであるけれども、相當智力のある異常兒がある。之れが容易ならぬ大問題を起すものである。故にどうしても異常兒救濟策を講じなくてはならぬ。而して此の異常兒を救濟するについて第一に考ふべき事は、彼等を治療するといふ事である。之

れ最近に生れ出てたる教育病理學治療學のある所以てある。今後の教育者は此の兩學問の素養がなくては兒童の本性を知る事が出來ないのてあるから、十分に調べて貰ひたい、教育治療學は小數の劣等兒や低能兒や白痴に必要なばかりてなくて、普通兒に必要が多いのてある。

余は此頃斯ういふ經驗をした。其は或る小學校の相當な成績の女兒を家庭の都合て預かる事にしたが、通知簿を見ると大抵な學科は甲の評語が記入してある、それて余の考ては此の女兒に相當の教育をして、特殊教育に從事させやうかと思つて、被是試驗をして見た、女兒は尋常三年てあるので、先づ三年の程度て算術の試驗をして見た所が案外出來ない、それて余が異常兒てあるとして教育してゐる尋常二年のものと同樣に試驗して見た所が之亦案外て尋常三年の上等の成績のものが低能兒てある尋常二年の程度てあるものより低度てあるとは意外てある。それから種々試驗をして見たが、聽力が非常に弱い、懷中時計を耳に付けても音がきこえない、之れてよく教育が出來たと思ふて、談話なり唱歌なり讀本の讀方なりについて調べて見ると、甚だしき誤謬があるそれは〳〵驚く程てある。故に余は學校ては席を前の方にして貰つたかといふとイーエといつてゐる、余は隨分不行屆てあると思ふた。併し此の女兒の學校長は眞面目な人てある、一人の子供てあるけれども斯ういふ事を等閑に附しておく人ではない、全く一の過失てあるが、それても成績が上等てあるには驚かざるを得ないのてある。次に一人の女兒を之も境遇のために余が預かつて教育して見た子供てあるが、之れ亦小學校ては相當の成績てある、實際を調べて見ると非常な嘘いひてある。夫れに伴ふ種々なる缺陷を有してゐる。是は一二の例てあるが小學校の成績は時々當にならぬものがある。甲の學校と乙の學校と比較すると、乙の學校は全部成績不良兒てある事があるかも知れぬ。さうかと思ふと非常に評判のよい學校て、校長も其筋から選賞されたといふやうな所の學校が多く身體虛弱てあつたりする事があつて、一向當にならぬ。斯ういふ風に奇觀を呈するといふのは、まだ眞の教育の意味が了解されてないのてある。眞の教育の意味はもつと兒童の本質といふものがよく判かつて來なければなるまいかと思ふ。兒童の本質を知るには治療教育學の力を藉らねばならぬのてある。此の治療教育學が普及されたならば普通兒と異常兒の區

教育亡國論

別が明かになつて來る筈である、又普通兒と認めらるゝものでも多少治療教育學的力をからねばならぬのである。從來の教育が世間に疑はれて極端な論者は教育亡國論を稱へるものがある、されども其は教育が惡いのでない、教育者が惡いのである。教育の方法がまだ盡せないのである、我々は從來の教育を皮相の教育といひたい、最早いふのも古い事であるけれども、形式の教育といひたい、其著しき事は兒童といふものがまだ判つてない、殊に兒童の種々なる缺陷を有してをるといふ事が判つてない、よく調査したならば同じ兒童は一人もない筈である。嚴密にいへば皆異常兒である筈である。それを一つ教育の型に入れやうなどはもつての外の事である。併し從來はさうであつた、どうしてそれに美事な教育の結果を見る事が出來やう、誰であつたか教育の目的は上手に嘘をつく人間を作るのだなどといつたものがあつたやうに思ふ。さうして又さういふ愚說を受け入れる教育者も少なくはなかつたのである。そんな事でどうして教育の權威が保たれようどうして眞面目な人間が造れやう、教育學者に治療教育をせねばならぬではないか。されど日本もさう何時迄も野蠻ではない、日本の教育者もさう愚論には耳を

學校教師は醫師をもかねたい

傾けないのである。故に今後の教育者や父母達は兒童の表面を知ると共に、裏面をも知つて貰ひたい。常體を知ると共に、異常兒をも知つて貰ひたい。健康體をいと思ふ。此の意味に於いて學校教師は先生であると同時に、醫者であつて貰ひたい。長所が見える如くに、短所も氣づいて貰ひたい。無論込入つた病人は醫師が治療すべき筈であるが、少しの病氣位は治療する力と德とがあつて欲しい。大體病は氣からといふやうに兒童の病氣も多くはさうであるから、少々の病氣位は治療する力を養はねばならぬ。大體智育といひ德育といふものは、身心の基礎が出來なければ其目的を達する事は出來ない。今日感化院にいつて見ると、身體や精神が智育や德育を受入れられるやうになつてゐない。それを無理やりに手工だとか、農業だとかいふてやつた所で、眞の不良少年を感化する事は出來ない。身體や精神に異常のあるものを監獄に入れて懲らして見た所で、ないより增し位である。其證據には感化事業を奬勵するやうになつてから、不良少年は激增するといふてはないか、監獄は罪人を養成する所であるといふてはないか、それは其筈である彼等を見るに同情を以て見ないからである。

彼等は弱者である、病者である異常者である、それを一般人と同樣に見て而かも劣等視するから、善くなれやう筈がない、まして理想の低い人の教育機關に於いて、どうして改過遷善の實があがらう。余は之を思ふ毎に小學校教員の責任の重い事を感ずる、其は小學校が基礎教育となるからである。無論孤兒や不良少年は小學校で教育すべきものでないかといはれるかも知れぬ、又實際はさうであるが、孤兒や不良少年はどうして出來るか、養育院に行かねばならぬやうなものはどうして出來るかといへば、本人が異常者であるか、產だものが異常者であるものが多いと見れば差支ない。故に異常兒童を矯正治療する事は大なる仕事である、故に前述したやうに、小學校教員は此の力の德を養成して貰ひたい。

校醫の改良

次には學校醫の改良進歩である。他ては知らぬが京都市などでは學校醫は年に一二回の身體檢査を御役目にする位であつて、治療の實が上がらない。されど近年は餘程反省するやうになつたが、學校醫は治療教育學上の意味に於いて重要である。學校醫の改良は教育改善の有力なる一法である。治療教育は學校醫の改善が第一歩であると思ふ。さうして學校醫について余の望みたい所は深くなくとも廣くあつて欲しい、精神科も知れば、內科も出來る、耳鼻咽喉科も出來れば、眼科にも精通してゐる人を欲しい。故に大都會に於いては、專門の學校醫が欲しい。さうして朝から夕まで學校兒童の事に當るといふやうにしたい、さすれば京都市の如き都會ならば適當の學校醫を置いて、兒童教育のために盡して貰ふ事が出來る。斯うならないとほんとうの治療教育は行はれない。さて此の希望は都會では出來るが郡部ではどうするかといふ問題であるが、郡部といへども醫學校出身の醫師のない所はないであらうから、少し學校教師と醫師が連絡してやつたならば、不可能ではなからうと思はれる。要するに今一段と此の邊の進歩を希望する所以である。さうでないと僅な手入れによつて進む事の出來るものを治療的智識と腕がないために、肝要な教育時期を徒らに有害に過させねばならぬ。是は本人や兩親の不幸は之より、國家のためには非常な不利益であつて、人道のためには容易ならぬ事柄である。さうして此の治療的救濟が出來たならば教育の一進歩である。大阪に居る某外人が自分の子供が俄に不良少年になつたので、どうしたのだらうと思ふて種々心配した上で、醫師に見せたら、咽喉に障礙があるといふ事

をきいて、直ちに治療をうけさせたら元の通りの順良な子供になつたと話してをりましたが、かゝる例は澤山ある。余も十八ヶ年小學校にゐまして隨分困つた子供を受持つて困つたが、今から考へて見るとあゝいふ子供には教育治療を施さねばならぬものであつたといふ事を氣付く事が多い。さういふ樣に學校教育に從事してゐられる方には、必らず二人や三人は自分も困られ他の兒童も困らせ、又家庭では兩親はじめ家族一同に迷惑をかけるものがある事を經驗してゐられるであらうと思ふ。それには必ず治療すべき事のあるのに注意して貰ひたい。

醫師の力と教師の力

五　教育的救濟

前章に於いて異常兒を救濟するには、治療が必要である治療教育が此の第一歩であるといつておいたが。其治療教育といふのは、醫師の力に學校教育が加はつて始めて奏効するのである。故に異常兒を根本的に救濟し向上させて行くには、教育の力が這入らなくては駄目である。醫師の力は何處迄も治療で行かなくてはならぬ。教育者の力は教育でなければならぬ。瀧の川學園長石井先生が歐米の白痴教育は醫師の勢力が多く加はるために、眞の白痴教育が出來てゐないといはれたが、余が教育しつゝある程度の子供についてもさういふ感じがある。けれども余は餘り醫師の力を多く藉るといふ事は面白くないと思ふ。此頃醫科大學の方から余に此の兒童を教育の力にて治療せよといはれる事があるが、教育は隨分甚だしい病人でも治療し、精神界の向上を計る事が出來るものであるけれども醫者の力によるか教師の力によるか判からないやうな兒童を、教育する事は特殊の教育でなければ其目的を達する事は出來ない。出來ないけれども心がけにより同情によりて如何樣にでも出來やうと思ふ。それは前章に於いても繰返しては記述しておいた通りに、教師に此の治療教育的の修養があつて欲しい。今小學校の先生方が異常兒に對して如何なる態度でゐられるといふ事を考へて見るに、大正二年二月に教育學術界に、東京の宮城露香氏が、小說低能兒といふのを掲載されたが、低能兒を預つてゐる余には興味を持つて見た。讀者中には最早掲載するに及ばぬ事だと思はれるかも知れぬが、著者の文才なき本書に、一異彩を放ち得る事と思ひ轉載する事にした。

小說　低能兒

東京　宮城露香

一

土間の莚の上に藁を叩いてゐた母のお銀は、今登校の仕度をして自分の前に立つた我子の宗松を見て、心から嬉しい可愛い情が湧いたので、いきなり起つて宗松を抱き上げた。

「おゝお前も大層大きくなつたゞ、早う學問してえらああい人になつて呉んろよ」

とそつと下ろしたまゝ幾度も頬ずりした、

「さうら茲に辨當こしらへて置いたゞから、早う學校へ行かにあ遲くなるだよ」

小さな辨當包を鞄の紐に結はひ附けて、後から押すやうにして送り出した。

「道草をせずに早く行くだよ」

と幾度も繰返して宗松の後姿を暫時飽かず熱心に見詰めてゐた。

宗松は別に何の感じも無いやうに、のろい歩みを移して五歩行つては振り返り十歩行つては振り返り乍ら、たら〳〵坂を下りて往來へ出た。時に五六人の元

氣の佳い兒童が何か聲高に面白く笑ひ合つてやつて來た、そして一人がめさとく宗松を見つけた、

「やあい　ババの宗　ババの宗」

とどなつた、他の五人も亦宗松を見つけたそして同じく、

「ババの宗ー　ババの宗ー」

と調子を合した。宗松の汚い藁葺の家が山の岨に今にも頽れさうに建つてあるので、誰れいふとなく恁んな呼び方をするのであつた。宗松は矢張感じが無かつた、ニコニコと笑ひながら、大きな口の厚い唇から、涎を流して皆んなを待合せてゐるのであつた。

六人の一行が行き着いた、宗松は其一行と同伴になつて登校の途に就いた。

「宗やお前幾年だい」

一人が宗松に近寄つて恁う訊いた、

「おらあこんだけ」

左手の掌を開き右手の指二本を添へて友の方へ示した。

「やあい七歳だと言つてらあ　宗やお前は十歳だい十歳て尋常一年だ」
と他を顧みて大きな聲て笑つた。すると一人が
「宗やお前のとつつあ幾歳だい」
とからこうと前と同じやうに左手の掌に右手の指二本を添へて見せた。
「おーい矢張り七歳だとい　七歳の親に七歳の子だ　親も子も同じ歳だい」
と言つて六人の者が又哄と笑つた。
母のお銀は我家の前に立ち止まつて、一行の樣子を見てゐた。我子の宗松をまん中に挾んで叩く眞似や突く手振が手に取るやうに見え、時々大聲に笑ふのも、自分の子が虐められてゐるのてないかと獨りて氣をもんてゐた。道を左に一行の姿が杉林に隱れて了ふまて瞬きもせずにみつめてゐた。北越の二月の空はどよりと曇つてやがて雪になりさうな氣配、一昨日迄一尺近くも積つてゐた、雪も昨日一日の晴天て大方は消え、往來は稍乾きかゝつてゐるものゝ何分學校所在地の宮森新村迄は十町餘りの距離、ぬかつた所て轉びはせぬか、今日の寒さに風邪ても引かぬかと毎日の事ながら、宗松の身の上が氣遣はれて學校へ通はせるのが心もとないやうにも思つた。「百性の子に學問は要らぬ」ととつゝあが言つてゐたが、それても時世が變つて來た學問をすれば出世も出來る、端書や手紙の一本も書けるやうになれば、村てもひけは取らぬ、一人前以上だ役場方から「お前の子は學問をさせぬ方が好いだらう」と話もあつたが、あれても精出して學問したら、偉い學者になるだらう」とお銀は心配の中にも我が子の學校へ通ふのを自分乍ら感心して嬉しさを堪へることが出來なかつた。

二

小使部屋て始業の鈴がけたゝましく鳴つた、今まて飛んだり跳ねたり騷ぎ廻つてゐた兒童は、一齊に校前に列を作つた。やがて六學年を先途に受持の訓導が引率して、それ〳〵教室へ這入つた。
尋常一學年は一番後の順になつてゐる、列を組んてゐる中も先生の眼を掠めて隣りのものと押し合つたり、後の列のものと突き合つたり、無邪氣にあどけなく騷いてゐる大澤といふ女教師は、彼方を叱り、此方を叱りながらも、流石にその罪の無い態度に時々手の甲を口に押當てゝ笑ひ出す。

「先生々々田上さんはまだあんなところに遊んでをります」
と一人の兒童が忠義顔に指した。
「やあい田上―宗や宗や」
と一人が頓狂な聲を張り上げる　皆一度に笑ひ出した。
「誰ですか　宗や〳〵と言つちやいけません　田上さんと言ふのですよ」
女教師は笑ひ乍らこう言つて宗松を呼びに行つた。
宗松はずつと列を離れた後方に地面に穴を掘り、其周圍へ木の屑や石礫を並べて獨りでニタニタ笑つて夢中になつてゐた。
「田上さん　田上さん」
女教師は其後の方から身體を抱き起すやうにして、續けさまにこう呼んだ宗松は續いて振りかへり乍ら。
「ウーム」と口重く答へた
「ウームなんぞ言つちやいけませんハイとおつしやい」
「ハアイ」

「さあ授業が始まつたからお出なさい　そんな惡戯をしてゐちやいけません」
と手を取つて連れて來た宗松は尋一の年長者で身長も一番大きい、彼は列の眞先に立ち手を振つて教室へ這入るのであつた。
教壇に立つた女教師の眼には、田上宗松は低能兒として殆んど教授や訓練の範圍外であつた。多くの兒童が能く命令のまゝに讀んだり書いたりしてゐる時に、宗松は勝手に席を立つたり、教室を出入りすることが甚だしく教授の妨害になるといふので元來の氣短かさが時に呶鳴りつけて泣かすことも度々あつた。校長の山室や首席の富木などが彼れだけは、特別何か特種の方法もあるだらう、餘り泣かせないやうに恐怖の心を抱かしめないやうに、苦心して教育して見るのも教育者として興味のあることだらうと協議してゐたことも久しい以前からであつた。時には放課後彼一人を職員室へ呼び入れて、彼の心理作用をも研究して見た。或は特種の教育もやつて見た。然しそれらは悉く徒勞であつた。何等の効果もなかつた。田上は依然として吳下の舊阿蒙で、鈍つた瞳の光りは夢を見てゐるやう、涎をたらす事も、入學當時と異なる所が無かつた。曾て小さ

な瀬戸の火鉢、

「火を入れる茶碗」

と奇抜な答に職員一同の腹をかゝへしめたことや十露盤を見て、

「それあぢき(小豆)」

と破天荒の命名を敢てし、到底も駄目だと匙を投げしめて二年を經過した。今日受持の女教師をして果は肝癪玉を破裂せしめ

「室外へ出てゐらつしやい」

と撮み出され大聲あげて泣いてゐるのが、一種の哀れな――悲慘な印象を與へたことも幾度かあつた。

終業の鈴が鳴つて兒童はドヤ〳〵と校外へ出た。

職員室へ歸つた大澤は先づ教科書とチョーク箱とを机の上へ投げ出して、ゲタリと椅子に大きな腰を下した。

「本統にあの田上には困つて了ひますわ、ねい校長さん今度は斷然除籍して頂きたいが如何でせう？」

とそつけなく言ひ放つた。校長は富木を顧みて「富木さんどうしませう」と相談する

「可愛さうですが……全く可愛さうてずね、然し授業の妨害になるとなれば就學免除の手續きを取るより方法がありません」

と哨然として其言葉に同情が籠つてゐた。篠田といふ訓導がさうしたら田上の親が又可愛さうですねとつけ加へた。

三

宗松は入學以來一學年で三度原級に止まつてゐる。彼の同輩が尋常三學年に進んでゐるのに彼はそんな階級なんぞの考は皆無で、勿論辨當を持つて學校へ通ふことが何の爲め？といふことも解からない。

「さあ〳〵早う學校へ行くだよ」

と母のお銀に家から送り出されて

「今日はこれでお終業ですから家へお歸りなさい」

といふ先生の言葉とに無意識に動かされてゐるだけである。

石の上にも三年といふのに宗松は此の三年間に記憶したことは先生にお辭儀をすること、鈴がなつたら列に入ること、田上と呼ばれて「ハイ」と答へることゝ言ふ單純な五六の個條に過ぎなかつた。入學三年目にも低能兒として村役場へ交渉して就學免除の手續を施さうとしたが、彼の父親は兎に角母親のお銀は、

「家の宗はみんな馬鹿てもねえだからどうぞ學問を仕込んで呉れさつせい」

と役場吏員と學校職員とへ五錢ばかりの鹽煎餅を持つて賴みに來たことは、當時の一笑柄として今も傳へられてゐる。

役場の方からは只「可愛さうだから此儘にして置いたら何うです」といひ富木訓導からは「低能兒として特殊の研究をしたら如何ですか」といふ發議があり、校長はそんなに邪魔にならねば彼して置かう」と三方の別々の意見が終結を一にしたので、遂其儘に通學を許してゐたのであつた。

彼の學籍表を繰つて見ると備考欄に「父母共に無學にして常識なし寧ろ痴呆者か」と過激な文句を附記してある。成績欄には何等の書入れがない。斯くて彼三年間を通つて玆に再び就學免除取扱といふ動議が持上つて來た。

田舍の學校に有り勝の特にこうした山家の學校では普通に思はれてゐる。大澤女教師は廊下に子守をしてゐる婢を呼び入れ、負ぶつてゐる乳呑兒を下ろして抱き上げた。そして全職員の前を平氣に、兩腕を押し開き、大きな乳房を出して、子供に吸はせる

「お痩せになつたやうですねえ」

と若い女教師が子供の顏をのぞき込んで、こういふと。

「えゝお乳が足りないものですからむづかつて仕樣がありません」

と答へる。

「營養不足で低能兒になつちや大變ですよ」

と例の篠田が口を入れると。

「まさかに」と輕蔑んだ笑を洩した。

と急に思ひ出したやうに、

「あの田上だけはもう煩さくて仕樣がありませんから……」

と校長に迫つた。

「其のうちにどうにか爲ませう」
と曖昧に答へた。校長は後の硝子戸越しに空模樣を凝と見てゐたが、
「また雪ですネ降らないうちに歸りませう」とつぶやいて歸り仕度をする。田上の問題はそれきりになつた。
大澤は子供を乳房から離して、子守に負はせた。富木は默して明日の準備にとゝ頻りに參考書を讀み耽つてゐた。
時計は四時を打つたばかりだが短かい冬の日脚の九分は西に傾いた。雪氣を催してゐる空は灰色に寒さは一しきり加つて來た。

四

山の岨の宗松の家では、土間に隣つた六疊の室は矢張一樣に汚い莚を敷詰めてある。一方の隈へ偏よつて大きな爐を切り釣下げられた自在には、鍋が懸つてゐる。お銀夫婦と宗松は、爐を取り圍んで盛に榾を燃やして暖をとつてゐる。
「のう爺つあ宗やも此頃あめつきり大なつて來たてねえかよ」
お銀は宗松の頭を撫でながら夫の顔を見上げてこういつた、

「ウム力も大分ついたらうさかい早う百姓教へた方がえい」
「百姓もさうだが學問は尙ほ大切ぢやぞえ」
「學問がなくてもおらのやうに百姓がうめえやうなら今日樣が樂に過せるだ」
「手紙の一本も書けるやうになつたらえらいもんだよのう爺つあお前にや矢張り書けねえだよ」
「われだつて同一なこんだ」
「おらあお前女ぢやぞえ男は學問を仕込むのが偉あいのぢやと先生樣が言つたどよのう宗や」
と宗松へ話が移つた。
「ウム」
宗松は不得要領にうなづく、そして何處を見るとなく茫然としてゐる。
「宗や　宗や」
お銀の聲が稍大きかつたので、宗松は彈かれたやうで無意識に、
「ハイ」

と返事したお銀にはこの返事の「ハイ」が、曾て聞いたことのない上品な言葉だと思つた。そして我子の口からこんな美しい言葉の出ることが、何とも言ひやうの無い嬉し味を感じた。そして學校へ通はしめてゐることが無益でなかつたと思ふと、今にも學問をして偉い立派な村の學校の先生のやうになるんだらうと一途に思ひ込むのであつた。

「爺つああんな　えい言葉覺え來たゞよ」

親爺もつい話に釣り込まれた、そして自分の家に珍らしい「ハイ」といふ一言が何かかう一躍して高い階級の人になつたかのやうに、そして我が子を學校へ出してゐることが、一種の誇りのやうな感じが湧くのであつた。

「ウム役場のもんがお前の子は學問さしては駄目ぢやぞと言ひくさつたがなあ、これお銀やこれなら駄目のこともねえだよ」

夫婦のものは非常に喜んだ。そして

「宗やわれえらい事覺えて來たゞ」

と盛に賞めるのであつた。宗松には賞められるが了解ので嬉しかつた。そして時ならぬ時にも「ハイ」「ハイ」を連發した。夫婦はそれでも無性に悦ばしかつた。そして未だ乳離したばかりのやうに思つてゐる。宗松が此頃ではちよい〳〵用足しにも間に合ふやうになつたのを、人並々の發育のやうに思つて、勿論自分の子は決して馬鹿でないと信じ切つてゐたのであつた。

「宗や明日も學校へ行くかよ」

「ウム」

お銀は「ハイ」といふ美しい響きを聞きたかつたのだが宗松は忘れたやうに斯う答へた。

「アレお前今のを忘れたゞかのう宗や」

「お母あ何あに」とけろりとしてゐた

「お前忘れたゞか」と親爺を口を添へた

「それ〳〵今のを……「ハイ」といふだが宗や宗や」

「ウム ハイ」

宗松は慌てゝ斯く答へて母の顔を見上げた。

「ハイを忘れてなん無えだよ」

夫婦は幾度もこう繰り返して教へた。然しそれも宗松には厭になつたらしい。つと立つて薄暗い次の間へ這入つて、尋常一學年の讀本を持つて來た。そして親子が三人で書中の挿畫を見て、猫だ馬だと頁を繰り返してゐるのであつた。

屋外は非常にしづかになつた、音といふ凡ての音が絶えて、聞えぬ夕方から風につれて雪が少しチラッイたが、もう風が止んだ、夜の音のないのが何れ雪が積つてゐるのだらう。

遺傳を受けた低能兒の小説、否實際談とも思はれる此の趣味ある佳作、余の盡し得ざる所を痒ゆき所に手の屆いたる感がある。さうして内容に表はれたる教師の態度も之れ以上小學校では盡しやうがない筈である。女教師も常識の婦人として特別の取扱を依頼する譯には行かぬ。又父親に斯の子の教育を望むは尚更不可能である。然らば此の宗松はどうしたらよいか、隨分難問題である。理窟では解決が出來ぬ。余は學校の先生にも氣の毒に思ふ、又他の兒童にも氣の毒に思ふ、親や子には一層氣の毒に思ふ。どうしても何かの方法を講じなくてはならぬ。

冷やかな理窟の問題でなくて溫い涙のある方法でなくてはならぬと思ふ。余が此の子供を見たならば、余に吳れろといふより道はないが、親はくれないだらう、さすればどうするか、斯ういふ問題は何れの學校でも二人や三人は必らずあるのであるが、どうするか小學校では仕方がない。斯の宗松を小學校で教育せよといふのは無理である、無理でも兒童があるからはどうにかせねばならぬ、是は教育問題であつて、救濟問題である、本書は此の種の兒童についても何かを講じて見たい積りであるが、讀者に滿足を與へる事が出來るかどうか。

本論

異常兒はどうして判るてせうか

一　父母の見方

緒論に於いて異常兒教育の必要や原因やを述べ、又國家や學校教師はどういうやうに見、且取扱つてゐるかの大體を述べておきましたが、さて愈々然らば異常兒とはどういふものであるかといふ事を判別する必要が起つて來た。故に玆一二章に於いて此の問題につき獨逸・エーナのトリューペル氏教育院で使つてゐる調査表により、余が實驗上斯ういふ事ならば誰にても、何所でも行はれやうと思ふものを記述して見やうと思ふ。余の經驗によると、異常兒であるかどうかといふ事は、產れたら直ちに判かるではなからうか否胎生中に判かるではなからうかとも思はれる。然らば其微妙なる見方はどうしてするか。

1　該兒童は醉中に受胎せしものと想像すべき理由ありや

斯ういふ事を考へて見るがよい

2　兩親の中の一人が該兒童出產前に酒精を濫用せしことありや

3　兩親の中の一人が該兒童出產前に、精神病又は神經病麻痺狂の如きに罹りしことあるか

斯ういふ事項は異常兒の遺傳をなすものである。

4　生殖時に於ける父の狀態は如何なりしや

生計の困難や苦悶又は窮乏があつたか、或は贅澤奢侈の生活をしたか、不良なる道德的或は身體的特性若しくは慣習を有してゐたか。

身體及び精神の病的狀態、或は精神の異常現象を有してゐたか。

黴毒に感染した事はないか、

何か放恣の生活をしたか、

夫婦は和合してゐたか、

5　受胎の時又は妊孕の間、母に上記の事項のいづれが存在せしか

其他異常の狀態があつたか、打撲、墜落等によりての身體震盪、恐怖、苦悶、心痛、苦慮、疾病、或は興奮性飲料の濫用不眠に惱みしか、頭痛又は鬱憂精神異常狀態に惱ん

だか。

6　娩產は如何に臨過せしか、

娩產の時期は正當であつたか、早きに失したか、

娩產は重かつたか輕かつたか、

娩產は自然的であつたか、又は器械の應用を要したか、

陣痛の持續は如何、

麻醉藥を應用したか、

小兒の位置は正規であつたか、

以上のやうな事によつても異常兒に產れてゐるかどうかを想像して見る事が出來る。

7　娩產に際しての兒童の狀態

强力の呼吸をしたか、又假死狀態であつたか、もし假死狀態であつたならば、異常兒と見ねばならぬ。娩產中又は其直後に痙攣等を起したか、身體は强健であつたか、羸弱であつたか、皮膚は蒼白であつたか、赤色であつたか、又は青色卒中性であつたか、此の邊の事を明かにするために、東京小兒科院長の小松といふ方が左の通りいつてゐられる。

○生れながらにして健康なる特徵

生兒の健康なるものは、產れながらにして其特徵が明瞭に備つて居ります。第一泣聲から大きく、皮膚の色は赤味をさして、脂肪や筋肉が緊滿して居ます。又爪でも頭髮でも、生々して居ます。そうして體重も男兒ならば七百八十匁より八百十匁位迄、女兒ならば稍男兒より目方が少なく、七百五十五匁內外です。身長も男兒なら曲尺一尺六寸二分、女兒ならば一尺五寸八分內外です。更に頭部と胸廓の周圍の長さを量ると、生兒は必らず頭部勝ちのもので、胸圍の長さよりも頭部周圍の長さの方が勝つて居ます。即ち頭部の周圍が一尺九分位なら、胸部の周圍は一尺二分位のもので、是れは男女孰れも左程大なる差はないが、それでも女兒の方が二三分位短いのが普通です。併し成育するに從つて頭部より胸圍の方が長くなるのです。故に生後一ヶ年の後半期より二年に及んでも、尙未だ頭部勝ちであつたら何か身體に故障のある事と心得專門醫の診斷を受け

るやうになさい。

と之れはお醫者樣の行き屆いた注意であるから、讀者の中に又は讀者の知らるゝ中に斯ういふ嬰兒があつたならば、さういふやうにして貰ひたい。身長とか體重とかいふ事は、母親の樣子や場所や時代によつて違ふから、標準の重さ長さはないと譯であるが、大體の標準は定めがつくので、今茲に紹介したやうなものを標準にして差支はないのである。

8　營　養

第一回の營養攝取は何時であつたか、

母親が授乳したか、何時頃まで授乳したか、

乳母を傭ふたか、

人工營養かそれならば何を用ひたか、

乳母を傭ふた場合にあつて乳母は不健康であるとの疑があつたか、殊に黴毒肺病又は結核の疑があつたか、

或は乳母の性格が不良であつたか、

人工營養の場合にあつて不良牛乳を用ひた事はないか、

胃腸加答兒、吐瀉、赤痢、チブス等に罹つたか等の事はよく注意して考えて見るがよい。大體何事でも不自然は異常の元である、母親にして自然の乳を飲ます事が出來ないならば、其は既に異常の種まきである。されどそれが必らずしも特殊の教育をせねばならぬとも限らない、否親の乳でも害あるものは飲ます事は出來ない。

9　兒童の養護は如何の狀態であつたか

三ツ子の魂百までといふ事があるが、學齡前の兒童が、

寢臺及び住居の如何により、

衣服により、

貧困の裡に養育しられたか、

或は贅澤三昧に養育せられたか、

等の生活狀態が中庸を失すると異常兒を造る原因をなす事があるから、大に注意を拂はねばならぬ。

10　營養狀態は如何か

體重、

身長、

皮膚の色は常に健全にして筋肉は堅實であるか、

又は皮色蒼白にして筋肉は軟弱なりしか、佝僂病、萎黃病等の如き營養障碍が起つたか、

體重の增加は、生後五ヶ月にして、生時の二倍、一ヶ年で生時の三倍、四五年で生時體重の五倍、十三年で生時體重の十倍。

身長は五歲に於て、生時身長の二倍、十歲に於て生時身長の二倍半といふことである。

11　兒童が其他に罹つた病氣は如何、何時これに罹りしか其不良結果は如何

麻疹、猩紅熱、實布垤里、痘瘡、發疹、糖尿病、腎肝、膀胱の病、耳鼻咽喉の病、呼吸器病、小兒麻痺等に罹りし事はないか。

12　齒牙發生は何時始まつたか

第一齒は何時發生したか、

爾他の齒牙は如何、

發齒障碍を呈したか、

齒牙はすべて發生したか、咀嚼不能であつたか、

齒牙の疾病に罹つたか、

齒牙の發生は、小兒發育の鑑定に必要なもので、第一第二期生齒の二期に於て發生する。

第一生齒　男女兒共に平均七ヶ月に始まり、二十四乃至三十ヶ月に終る。第一期生齒は總數二十にして、之れを乳齒といふので、第二期生齒は六七歲に始まり、三十歲にして完成するのである。發生順序は乳齒に同じく、之を永久齒といつて、總數三十二、永久齒發生と共に乳齒は生齒の順序に脫落する。左に齒牙の名稱發生の順序、(算用數字)及び年齡(月數—羅馬數字)を圖で示す。

13　種痘は何回施せしか何時施せしか種痘後變常を呈したか、

14　運動の發育該兒童は何時始めて起ちしか

腹位にてか、

背位にてか、

何時始めて起座せしか、

何時始めて匍匐したか、

何時獨りて立つたか、

何時獨りて歩んだか、

何時第一の握摑運動をしたか、

握摑運動爾後如何に發達したか、

何時自分にて着衣する事を覺えたか、

何時顏や手を洗ふ事を覺えたか、

前兩者共に何時から自分にてこれを行ひ得たか、

何時獨りて飲食する事が出來るやうになつたか、

箸を手にし得たるのは何時頃からであるか、

咀嚼を注意して十分にするやうになつたのは、何時頃か、

運動につき何か堪能のものあるか、

15　遊戯慾は如何に發達したか

指手足の運動にて遊戯を始めしは何時か、

其方法はどうか、

他の物品を以て遊戯を始めた時は如何か、

如何の遊戯を後には選んだか、

余に生後一年五ヶ月の女兒あり、指先きの遊戯など却々に複雜な事が出來るものである。

16　摸倣(突歌ひ話擧動)の第一番は何なりしか

第一番とは誰も記憶し、又記錄し難い事であるが、前の女兒滿一歳にして、雀の遊戯の摸倣をなした、是は複雜なる摸倣といつてよからう。

17　感覺の發達はどうか

溫覺、觸覺、痛覺、嗅覺、味覺については何か注意せられたか、又聽覺については何時頃より耳をソバダテたか、何時頃より音響の地點を定める事が出來たか、どういふ音響に興味を有したか、

何時歌をまねたか

聽神障碍をもつてゐるか

18　言語の發達について觀察した事は如何

調語を始めしは何時か、

言葉のわかるやうになつたのは何時頃か、

言葉のわかる樣になつたのは、自然の練習によるか又は直接の模倣によつたか

やさしき言葉をまねるやうになつたのは何時か、

言葉に意味を附すのに至つたのは何時か、

思考及び意思を言葉の上に表はすに至つたのは何時か、

文章的の言葉をなすに至つたのは何時に始つたか、

形體的の言葉は何時始めて發したか、何か人の名前を正しく用ふるに至つたのは何時か、

發音の正しくなつたのは何時か、全き文章を話すに至つたのは何時か

お話をするやうになつたのは何時か、

六ヶ敷音をば何時頃より話すやうになつたか、

言語の理解は如何に發達したか、

個々の言葉を理解したのは何時か、

命令するやうになつたのは何時か、

19　視神の異常を呈したか

若し視神異常があつたとすれば、其異常は何時どうであつたか、

該兒童は何時事物を觀察するに至つたか、

各生活期中にて如何の觀察が愉快であつたか、

20　色を區別するのは何時に始つたか

言葉によつて色を指定するに至つたのは何時か、

色の區別と命名を學びたる順序はどうか、

嬰兒の感覺

21　形體神の發育はどうか

圖畫、彫像、物品等に就て興味又は愉快を覺えたのは何等か、

如何の幾何學的圖畫を區別し得るか、

少なくとも以上の如き事項について普通であるか、異常兒であるかを見別ける事が必要である。以上の各事項について詳細に述べるならば是れのみでも一小冊にはなる譯であるから、一二の注意を附記した譯であるが、今感覺並に歩行について一二記入しておきたいと思ふ。感覺ついては日本の兒童學者高島平三郎氏の兒童心理講話の一節を記載する事にしやう。

生れた時の嬰兒には無論感覺があります。氣分に感ずることも明に認められる樣になります。然らば生れると直ぐに刺戟するものは何であるかといふに、一番先きに光線が眼を刺戟します。併し乍らたとひ光線が眼に觸れても生れた計りでは餘り感じがない、暫らく經つてから僅かに暗いとか、明るいとか云ふ辨別が附いて來るのであります。夫れは子供に依つていろ〳〵と違つて居ります。けれども大概一週間から二週間位の間には十分に、明暗の區別をする事が出來るやうになります。夫れから又生れて五六月の間は皆近眼であつて、且つ色が解らないのであります。一體眼の感覺には光りの感覺と色の感覺との二つがありまして、光の方は早く感ずる樣になるのでありますが、色の方は餘程晩いのであります。本當に色の辨別をするやうになるのは、少くとも滿二年の後であります。次には聽覺であります。これは又視覺よりも晩く發達するのであります。時によると三週間位も音に對する感じのないことがあります。併し三週間を過ぎてもまた感じのないものは、耳に異狀があるのですから、醫者に見せなくてはいけない。一週間二週間の間は子供の寢て居る近所で大きな音をさせても、耳の感覺からは醒ます事は出來ないのです。即ち生れ立ては音に對する反應がないのであります。學者のいろ〳〵の試驗で、初生兒の耳は音に感じないといふ事が知れたのであります。何故耳の發達が一番晩いかといふに耳は非常に機關の複雜なものでありますから出生後までも外界の刺戟に應ずる樣に內部の變化が起らぬのであります。併し生れて間もない子供が、がたんと戸の音がした爲に眼をさます樣なことがあります。これは音に感ずる

證據ではないかといふお疑がありませうが、それは耳が感ずるのではなく、皮膚全體に空氣の振動が影響するのであります。それからは嗅覺即ち鼻の感覺は、耳や眼に比べると割合に早く現はれ大概一週間以内に物の香臭に對する反應を認めることが出來ます。

と大體斯ういふ樣な各感覺は表はれて來るものであるから、是等の表方によつて異常兒であるか、普通兒であるかゞ明かになります。

行歩については三島博士の調査によると、本邦小兒の行歩を初めること最も早いもの、男は生後七ヶ月で、女は八ヶ月で最も遲いもの、男は二十六ヶ月で女は二十四ヶ月でこれ以後に初まる者の如きは常體でないといふことである。さうして之を平均するときは最初の行歩を試むるは、男女共に生後十二ヶ月(十三ヶ月目)で所謂、第一の誕生頃が常例だといふことである。而して行歩と共に言語が明かになりかけのるであるから、此の邊は子を持つ親の大に注意を拂はねばならぬ所である。

二　學校教師の調べ方

普通兒であるか異常兒であるかといふ事を、父兄の見方と教師の見方を殊更らしく區別する譯ではないが、我國の如き家庭の教育といふ事について考えて見るならば、餘り多くの事を望む譯に行かぬ。故に多くは學校教師の方について調べる必要があらうと思ふから、入學前の事をも學校教師の觀察事項としてよく調べる必要があらうと思ふから左に列記する。

1　計數神の發達は如何

自己の近傍に存する物品の增加せると減却せるとに著目するに至つたのは何時か、

單數と複數とを區別するに至つたは何時か、

物品の一二三四箇等を區別するに至つたは何時か、

一より十までの數字を記憶するに至つたは何時か、

十個の物品を實際に計算するに至つたは何時か、

一度に幾何の物品を一覽し得るか、

計算の方法は如何なるものを得意とするか、

2　時間觀念の發達はどうか

「昨日、今日、明日等、晝夜、春夏秋冬、分秒日週月等短時長時等何時より始まりしか、

3　倫理觀念及び宗教觀念の成立に就ての觀察は如何

余は倫理觀念とか宗教覺念は滿一ヶ年にもなれば相常の端緒が表はれて來るのではないかと思はれる。

故に親たり人の師たりするものは、注意せねばならぬ事と思ふ。

4　記憶の領域は如何

周圍のものはどうか、

色は―形は―數及び日は―快樂遊戯は―經驗の事項は、―偶然の事情は、―御伽話小說等は、

始めて續話をしたのは何等か、

記憶乏しき物は何か、

5　想像の發達はどうか

上記の場合に想像を浮べて話したか、

6　思考作用の發達はどうか

7　容易に疲勞を覺ゆるか

如何なる事項で疲勞を來たしたか、

8　情緒の刺戟性衰弱を徵したか

啼泣し易きか、

興奮し易きか、

不安―短氣なるか。

憤怒―恐怖―苦悶―驚愕―心配し易きか、

9　情緒及び意思の發達に於て別に注目すべき事項あるか

兩親に對しての愛情柔順及び協同はどうか、

兄弟姉妹に對しては、

外國人に對しては、

動物に對しては、

人形及び其他無生物に對しては、

或はこれ等の事物に對して嫌惡せるが吝嗇なるか否か
左記の事項に就きて特殊の點あるか
孝順信義に就て、
不從順、强情、執拗、
信實正義について、
不信實及び虛言を爲すか
篤實であるか、
竊盜癖なきか、
整頓及び清潔であるか。
放心であるか、
注意はどうであるか、
喧嘩好きか、
善事をなすを喜ぶか
前にもいつたやうに三ッ子の癖百までゝ、人が善い人になるか惡いものになるか

は、六七歲で明かになるから、是等の事項については一層の注意を要する。
10　宗教的感情はどうか
神についてはどういふやうに考へてゐるか、
佛といふ事はどういふやうに考へてゐるか、
事物の成立はどう說明するか、
罪惡については如何に說明するか、
11　特殊の習慣があるか何時より始まつたか
習慣にも種々ありて口癖、手癖、足癖といふやうに種々なる百癖もあるから、十分の注意を要する。
12　どういふ仕事を學んだか
上手に其仕事をするか、
好みて如何なる仕事をするか、
好まざる仕事は何か、
13　幼稚園に這入つたか

其の成績は如何、

兒童に目立ちて認められたのは何か、

14　其他

學校教師によつて調べて貰ひたい事は、左の通りである。

一　教師の見したる最大美點、

二　教師の見たる最大缺點、

三　修身科に興味を有するや、

四　道德的概念成立するか、

五　道德的觀念と其行爲は如何に連結するや、

六　數の觀念は正確なりや其程度、

七　數の系列は成立せるや其程度、

八　十以下の數に於いて分解綜合は自由なるか、

九　數字は正しく記し得るや、

一〇　數量の觀念は明かなりや、

一一　心算及び筆算如何なる程度までなし得るや、

一二　事實算は如何なる程度に於いて理解し得るや、

一三　或時は正當なる理解をなし或時は全然理解力を缺く事なきや、

一四　朗讀は正確にして活氣ありや、

一五　正確なる概括力ありや

一六　文字の記憶は正確なるか、

一七　思想の發表は正確なりや、

一八　既習の文字を活用する能ありや、

一九　綴方に於て誤字はなきか、

二〇　書方に於て筆力に活氣ありや、

二一　書方に於て字の排列は正しきや、

二二　綴方に於て內容の統一ありや、

二三　音樂を好むや、

二四　歌詩を記憶するや、

二五　手工を好むや、
二六　體操には活氣あるか又永續し得るや、
二七　直觀教授に興味を有するや、
二八　如何なる學科を好み如何なる學科を厭ふや、
二九　事物を觀察する力如何、
三〇　遊戯を好むや如何なる遊戯を好むや、
三一　教授に注意せしや、
三二　教場にての姿勢はどうか、
三三　休憩時間に孤獨の遊はせざりしや、
三四　虫などを怖れざりしや、
三五　教師をおそれざりしや、
三六　體操をおそれざりしや、
三七　時々泣きて歸宅せし等の事はないか
三八　如何なる友人と遊びしや、

三九　金錢の浪費はせざりしや、
四〇　兒童間に於て喧嘩口論はせざりしや、
四一　昇校の途中道草のため缺席せし等の事はなかりしや
四二　携帶品を忘れて昇校せし等の事はなかりしや、
四三　動物を虐待せざりしや、
四四　破壞的の性癖はなきや、
四五　病氣のため時々缺席せる事ありや、
四六　授業時間中便所に行く癖はなきか、
四七　帶を正しく結び得るや、
四八　鼻汁を出しをらざりしや
四九　食事振りは普通なりや、
五〇　入浴は獨りにてなし得るや、
五一　四肢の末梢部は冷却するや又非常に暑からざるか、
五二　平時口を開き居るか、

五三　下駄等をはくに困難を感ぜずや、
五四　右利なるや左利なるや、
五五　自ら衣服を着け得るや、
五六　自ら顏を洗ひ得るや。
五七　午睡をなし得るや、
五八　疼痛を感ずる度は普通と認むるや
五九　原因なくして笑ひ又泣く事なきや
六〇　衣服の撰擇に心を用ふるや、
六一　使をなし得るや、
六二　殊に興味を感ずる業務ありや、
六三　殊に好んで使用する器具器械ありや、
六四　遺尿の癖なきや、
六五　火を弄ぶ事なきや、
六六　危險に對して無頓着なるや、
六七　夜は熟眠するや、

以上の如き事項について調査をして見て、餘り變態でないならば、普通兒と見て、多くの異常事項を見出し得るならば異常兒と見るべきものであらうと思ふ。

三　醫師の觀察

普通兒であるか異常兒であるかは、身心の發育狀想が普通であるか異常を呈してゐるかといふ事によつて決定するのであるから、要は身心の狀態如何を觀察する事である。然らば此の異常か正常かを何によつて定めるか、其は病氣があるかないかといふ事は、第一の觀察事項である。これは前にも種々述べたやうに、教育治療學の起つた所以である。故に嚴密に一兒童が普通兒であるか、異常兒であるかを觀察するには少なくとも精神病學、內科、眼科、耳鼻咽喉科、小兒科等の各科に於いて觀察する必要がある。現に余が目下教育しつゝある兒童は京都醫科大學の各科に於いて診察して貰つてゐる。病氣を治療し、又診斷するのは、醫師の範圍である。無論教育家が十分に研究する事は肝要な事であるが、責任を以て事をなすのは醫師の範圍は、醫師に託さねばならぬと思ふ。而して其觀察すべき處は、前にも

述べた譯であるが、重複すれども今一應記載するならば左の通りである。

一　遺傳性疾病
二　發作性疾病
三　發育
四　頭部
五　口咽
六　胸部
七　腹部
八　生殖器
九　毛髮
一〇　眼
一一　耳
一二　鼻
一三　皮色
一四　胸廓全圍
一五　胸廓擴張
一六　活量
一七　脊梁
一八　會陰
一九　四肢
二〇　皮膚
二一　握力
二二　體溫
二三　呼吸
二四　脈搏

等について一通り調べる必要があらうと思ふ。

四　余の見方

茲に余の見方といふ一章をおいて一通りの愚見を述べて見たいと思ふが別に珍

らしい見方はない、又あらう筈がない、又假りにあるにした所で特別な見方はないのである。只余が從來の實驗により又一二の讀書によつて、斯ういふやうに見た方がよからうと思ふ事を記述する事にしたのである。

そこで普通兒であるか異常兒であるかといふ事は人により職業により、學者によつて各其見解が違ふ筈である。それは讀者が種々なる書物によつて見らるゝ通りである。此は自然の勢であつて所變はれば品變はるといふやうに、各其見解が違ふのが當然である。此の意味に於いて余の異常兒の見方も多少、其趣を異にしてゐるものがある。

正常兒と異常兒

そこで異常兒といふものは何物であらうかといふ事を考へて見るならば、是は何か他に對象とするものがなくてはならぬ。其對象物は即ち正常兒である。故に正常兒に對して異常兒がある譯である。然らば正常兒とは何か、之れ亦困難である。正常兒とは何か容易に解釋のつきかねる問題である。されども餘り理窟をいはずに氣樂に考へて見るならば、正常兒とは普通の子供といふ事であり、異常兒とは非普通兒であるといふ事にならう。斯う考へて見てもどこが普通でどこが異常であるかを考へて見ると、殆ど無意味である。彼も子供である此も子供である。其を何が普通で何が異常であらうか、彼も人の子ならば、此も人の子である、何が普通であつて何が異常であらうか、よく考へて見るならば劣等兒だとか、低能兒だとか異常兒だとか、何とかいふが、果してどれが眞理であつて、どれが非眞理であらうか、それからそれへと質問したくなるが、よい加減な所で理窟をやめるとして、一言にしていひつくすならば異常兒とは普通兒に對象して變つた子供といふ事になる。さうすると變はらない子供が何所にありませうか、十人十色といふが一萬人は一萬色であつて、同樣の子供は一人もない筈であるさうすると正常兒とは何か、普通兒とは何か其標準を定めなくてはならぬ。而して其標準も兒童といふ人格者よりも、學校といふ教育機關によつて定めて見たい。これ迄にも時々調べたやうに、國民教育を受けるために、公私の小學校で教育を受ける事の出來る資格のあるもの、之を總稱して普通兒といひたい、而してもしそれ、之れを學術的に定義するならば、心身の發育狀態年齡相應にて其時代と境遇に適應し得るものを普通兒といふ、斯ういふやうに定義するならば心身の發育狀態が年齡とは不似

普通兒の定義

優等生及天才

合てある、例へば年はまだ十歳内外てあるのに、顏容は壯年のやうてある、又時代は大正時代に育つてゐるのに、何百年も昔の事をよく知つてゐたり、又は豫言者見たやうな事をいつて見たりして恰も狂人てはないかと思はれるやうなものは異常兒てある。又海岸に行つたならば其樣に精神狀態が向く、山間に這入れば又土地の風光によつて精神狀態が變つて行くといふやうに、何所にいつてもよく順應して行く事の出來る者か普通兒である。故に小學校で劣等生だとか落第生だとか又は低能兒だとかいはれるやうな者は普通兒のやうによく順應して行く事が出來ないのてある。又此の比較的劣等なの者てなくて、優等生又は天才といはれるやうな者も異常兒てある。天下に事をなすものは異常兒の成長した者てある。平々凡々の普通兒は大人物も出なければ、又劣等人間になるものも少ないのてある。故に國家に有用なる人物を養成しやうと思ふならば、どうしても異常兒の保護と教育をしなければならぬ。話の序だから天才の事を一言述べて見ると、此の天才といふ者については隨分古くから研究されてゐるが近世に至つてはバスカルの如きは「異常の叡智は異常の狂氣に近いといひ」、ヌヂデロオは「余は想像す欝憂なる氣分を有する是等の人々は、必ずや其間歇的に來りて或は狂的、或は神的なる觀念となるべき神性的洞察を以て一に有機體系の定期性錯亂に歸せしめしなるべし、此時や實に渠等が神樂を附與せる人間の自然なる狀態と見做せる、無感覺より來る心的騷擾の爲め斯る昏睡より覺て起つや渠等は神性なる者が下降して其身中に宿りたりと信ずるなり、吁何ぞ夫れ狂氣と天才との相似たること斯の如く甚だしきや、善若しくは惡に名高き者は皆多少此の徵候を有せざるはなし、世は渠等を入監せしむるか、鎖繫するか、若しくは渠等に紀念碑を建つるかにあり」といふてをりますが、余が多年小學校に奉職してゐる間に斯ういふ感を切にした事があつた。其は小學校教員は天才兒に體罰を與へるか賞與するかてあつた。彼等の將來を考へて適當の處置の取れる人は容易にはなかつた。全體に於いて天才兒又は天才者に對しては余は超常識を以て言ひ表はしたいと思ふ。彼等天才兒や天才者は平々凡々てはない、先見の明もあれば、世を達觀する能力も備えてゐる。故に常識家のいふ事が小さくて、低くて、近くて齒痒ひのてある。其結果常識家は狂氣の沙汰と見られるのてあるが、彼等には精神の統一が整然としてゐるのてあ

る。平々凡々の教育家には自己擔任の天才者が不良少年に見える、又兩親には親に似ぬ天才兒が出來てゐても親顔をして天才を夭折して仕舞ふ事がある。是は教育家にも親にも注意して貰ひたい。而して茲に一言のこしておきたきは、天才兒的の異常については教育といふよりも保護といふ事が肝要であらうと思ふ。

天才の保護

扨これから愈々學校で捨てられる異常兒について余の見方を述べたいと思ふが、余が此の問題を記述するについて、前掲の教育上より見たる兒童の分類について説明したいと思ふ。

兒童の分類

第一　分類の起因

余は世間にいふ低能兒教育を專門にしてゐるものであるから、此の低能兒といふものが如何なるものであるかを明かにしたい爲に斯ういふ問題に趣味を持つやうになつたのである。

第二　分類の必要

然らば何故に斯ういふ表が必要であらうか、其は

イ　低能兒は普通兒であるか特殊兒童であるかを鑑別したいために

である。どうも斯ういふ事は別に特更らしく調べる迄もない事であるが、苟も人格問題であるから出來るだけの事は調査しなければならぬ。

ロ　低能兒はどういふ長所と短所を有するかを知らん爲に

此の長所と短所を見出さなければ、教育する事は出來ません。一の長所は兒童教育の手がかりである。何が出來なくても唱歌が出來るならば、それから教育の端緒が開ける。すべての事は出來なくても、食慾があるならばそれから教育の見込みがつけられるのである。食慾の長所は茲に書き出す程の事ではないけれども、

ハ　此の長所をのばし短所を治療矯正するに容易なるために

教育といふ仕事は兒童の長所をのばして、短所を治療矯正するのであるから、此の方法は如何にすべきかといふ事になれば、兒童が如何なるものであるかを知らねばならぬのである。

以上の如き必要によつて分類したのであるが、此の分類を爲すに當つて余は條件をつけてゐる。

イ　人格の尊重を出發點とする

教育學者は何といつても教育實際家は兒童の人格を尊重しなければならぬ。さうでないと教育家の仕事が物品扱になる、隨つて劣等兒などいふ名をつけねばならぬ。今だにさういふ名をつけてある書物が出る、名はどうでもよいといふものゝ孤兒院が露骨に何々孤兒院と標榜して天下に同情者を求むるものと、別に孤兒院などいはずに、隱れたる慈善をなしてゐるのと孰れが好いかといへば、見方にもよるが眞の慈善的精神の表はれてゐるのは、コッソリとした方が美しい。教育でも其通り餘り名の表はれるものには眞の仕事が出來てゐない、東京や大阪や京都などの有名な學校よりも田舍の學校に眞の教育家があり、眞の教育が行はれてゐるかもしれないやうなものである。此の原因は何でもない都會の教育は名利のために行はれるし田舍の教育は教育のために教育が行はれるからである。茲に獨り人格尊重の實が上つてゐる。斯ういふやうなもので、兒童を分類しても之れが第一の出發點にならねばならぬとも思ふのである。

ロ　系統がある

余の分類したものには系統がある、無論他の人の分類が無系統だといふのではないが、吾々實際家から見れば甚だ不便である。例へばドモア氏の分類について批評して見るならば、甚だ錯雜してゐるやうに思はれる。故に同氏の表を掲げて讀者の御判斷にまかせる。

- 異常兒
  - 甲　言語に故障あるもの
  - 乙　聾啞
  - 丙　盲
  - 丁　低能
    - 教育上の見地よりして
      - 受動的
      - 頑固的
    - 醫療上の見地よりして
      - 第一種の低能
      - 第二種の低能
      - 第三種の低能

次に富士川氏などの分類は

- 精神低格
  - 持續的精神病的低格
    - 性來的持續的精神低格
    - 後天的持續的精神低格
  - 一時的精神低格
    - 抑鬱的のもの……錯亂性のもの
    - 爽快的のもの……癲癇性のもの
    - 刺戟性及苦悶性のもの……中毒性のもの
    - 精神虛脫……追想の誤謬

精神薄弱
- 白痴（精神發育の最も不良のもの發育の程度は赤兒又は二三才位に相當するもの）
- 癡愚（日常の用をたすだけの言葉はあるが言語動作不充分、殊にある種の觀念など著しく惡いもの）
- 魯鈍＝普通より愚かなもの

其他笠原道夫氏の體質の異常、精神の異常の二分類。榊氏の低能兒精神病體質者、輕痴者、白痴者と五分類法など、皆佳きものであるが、系統があるかどうか無論以上の分類者は醫學專門の方であるから、斯道に於いては系統を有するかも知れないが、教育實際家は今少し範圍を廣く分類しかい。

ハ　實際的である

我々は實際的のものを望む、机上の空論は誤りが多い書物の受け賣りは實際家には不便である。余が研究表は多年實際に調べたものである、普通兒の教育についても異常兒の教育についても實際に調べたのである、さうして又教育實際家に一目瞭然たる積りである、

ニ　學術的である

教育學は非常に範圍が廣い、故に斯の種の分類には少なくとも教育學、兒童學、心理學、生理學、解剖學、倫理學、地理學、人類學等を調べた上て分類した積りてある。

ホ　教育的てある

教育的てあるといふのは兒童を教授、訓練、養護して行く上に、便利よく分類されねばならぬ。之れが吾々教育者の特權てある。それて教育者が異常兒を見た時に治療を要する必要があるならば、何科に依頼したらよい位の見込はつけなくてはならぬのてある。精神異常のものを不良少年と見違へたり、難聽者と語聾との區別位は知れなくてはならぬのてある。

第三　分類の實際

先づ一團數百の兒童を教育眼を以て觀察するならば、千差萬別て同樣のものは一人もない。されど社會生活に慣れしめると經濟上の問題等よりして、團體教育の必要が起る。而して此の團體教育をなすに當りて、團體をなすには同種のものを集めねばならぬ。盲者は盲者啞者は啞者、精神病者は精神病者と類を以て集めね

ばならぬ、茲に分類の必要が起つて來るのである。茲に於いて余は普通兒と變態兒とに別ける、普通兒といふのは前に定義しておいた通り、小學校で五十人なり七十人なりの一團となつて教育の受けられるものである。變態兒とは白痴、精神病、病兒、缺官兒、不良少年である。尙もつと判りやすくいふならば、白痴兒といふのは前にのべた白痴であつて、日本でいへば東京瀧の川學園に收容されてゐるものである。精神病兒とは兒童の狂者である、病兒といふのは多く肉體的の病者をいひ缺官兒とは不具者の事で、盲啞兒をいふのである。不良少年とは惡人の型ある小兒をいふので、例へばまだ學齡に滿たざるに不良少年の如き行爲のあるもので感化院にゐる或る種類のものである。次には變態兒でもない、又普通童でもない、中間狀態のものを見出す事が出來る。之れが低能兒といはれるものであつて、文部省などが全國に十三萬はあるといふ見込みをつけてゐるものであるが、余の立場は精神上の低能といふばかりでなしに、前五種類のものが悉く中間狀態のものがある。例へば精神病學の方で精神病者とはいはれないが、さりとて普通の精神狀態でないものがある。斯ういふやうに中間狀態のものが種々ある。故に世間にいふ低能兒といふものを、余は中間兒と總稱してゐる。而して其中間兒を又五種類に分類して。

一、は能力遲鈍性の中間兒といつてゐるが、此の種類のものを一言にしていふならば、心的作用が遲鈍であるといふ事に歸着するのである。それで算術などをさせて見ると、容易には判からないけれども辛棒して教育すれば幾らか其効果が表はれて來るのである。

二、は精神異常性の中間兒といふが、之れは著しい特徵を上げて見るならば、千變萬化といふやうであつて、何をしても一定の調子が取れないのである。昨日は善い事をするかと思ふと、今日は惡い事をする。學科などでも昨日はよかつたが今日は一向出來ないといふやうな工合である。さうして能力遲鈍なものであるならば、別に醫者にどうといふ事を仕て貰ふ譯には行かぬが、精神異常性のものは、精神病學者によつて醫的治療をうけさせる事もあるのである。

三、は身體虛弱性の中間兒といふのであるが、これは腺病質であるとか、肺が弱いとか、消化器に申分があるとかいふやうに、治療上からいへば內科に屬してゐて、此頃

日本にても森林學校など一二設けられて(夏季)兒童の健康を保護されるやうになつたが、此の種類に屬するものである。

四は機關障碍性の中間兒といふが、之れは吃音者とか難聽者とか半盲者などをいふのであつて、盲唖であるならば缺官であるが茲にいふのは障碍の程度にあるものをいふのである。

五は心性不良性の中間兒といふのであるが、是は種々なる惡事を働くに妙を得てゐるものであつて、道德上種々なる缺點あるものをいふのである。

以上の如く中間兒を五種類に分類するが、然らば是等各種の者にして純然たるものはあるかどうか其は余をしていはしめるならば、一人もないといつてよからうと思ふ。例へば一の不良少年を取つてよく調べて見ると、無論彼は心性不良であらうが、さて感覺器官をよく調べて見るならば、耳も惡い、目も惡いといふやうな事があり、又精神狀態身體狀況を調べて見るならば、兩者に病狀があり、又能力も低いといふやうな事を發見する故に、此の五種類は決して分離すべきものでなくて密接の關係を有してゐるのである。

余がモンテッソリー氏考案の教具欽板について實驗した結果を記載して見ると。

	能力遲鈍兒	精神異常兒	身體虛弱兒	器官障碍兒	心性不良兒
第一回	一も正しく出來ず四十五秒を要す	一も正しく出來ず五分間	三個不正二分廿五秒	皆正一分二十二秒	三十秒
第二回	印形一個正二分間	皆正三分間	皆正二分	全一分二十秒	二十五秒
第三回	花形一個不正三分間	全一分間	全一分	○四十秒	二十秒
第四回	皆正四分間	全二分四十秒	全一分五秒	全四十五秒	十八秒
第五回	全十分間	全一分廿五秒	全四十秒	全三十五秒	十七秒
第六回	全六分間	全四十五秒	全三十六秒	全三十秒	二十秒
第七回	全二分五十三秒	全一分廿八秒	全三十五秒	全四十秒	十七秒
第八回	全三分廿二秒	全三十一秒	全三十三秒	全二十八秒	十七秒
第九回	全二分廿六秒	全一分十二秒	全四十秒	全四十秒	五十秒
第十回	全一分五秒	全一分廿秒	全三十秒	全二十秒	十七秒

此の表はつまらないものであるが、精神異常性のものが如何に回數を重ねても調

子がそろはないかゞ明かになるであらう。

次には普通兒の中に成績不良兒といふものがある、之れは余の立場からは中間にて各種缺陷の程度が低いのであつて異常兒と見ればよい。

最後には所謂天才といふもの、之を異常兒といひたい。いはなくても異常兒に相違ないのであるがどうかすると天才兒を普通兒と思つて教育を誤る事があるからどうしても異常兒と見なければならぬ、尙以上說明した事を表示して明かにしやう。

- 兒童
  - 普通兒
    - 甲種（健全なる天才）
    - 乙種（多數の普通兒）
    - 丙種（准異常兒）成績不良兒
  - 異常兒
    - 甲種
      - 天才兒
      - 俊才兒
    - 乙種……中間兒
      - 能力遲鈍性
      - 精神異常性
      - 身體虛弱性
      - 機關障碍性
    - 丙種……變態兒
      - 白痴兒
      - 病兒
      - 不具兒
      - 不良兒

以上の如くに區別しておきたいと思ふ。而して本書に於いて多く記述したいと思ふのは、成績不良兒と中間兒とである。普通兒の教育は續々と研究して向上しつゝある。又變態兒についても相當の方法が講ぜられつゝある。然るに成績不良兒と中間兒は學校で捨てられてゐる狀態である。幾十萬の成績不良兒や中間兒は捨てられてゐるのである。而して尙此章を終はるに當りて肝要なる問題は如何にして鑑別するかといふ事であるが、各章にのべたやうに種々なる仕方があるが、余は小學校ではどうしても教育出來ないと認定されたるものとしたい。所謂小學校で捨てられたといふ事になるのである。

どうしたら救濟が出來ませう

一　家庭での救濟法

親が子を救濟する

前章に於いて異常兒に種々ある事を述べ、さうして又異常兒の中でも天才兒は教育すべきものでなくて保護すべきものである事をのべ、變態兒の白痴とか病兒とか不具兒とか不良少年には相當の教育機關もあるに、余の所謂中間兒と成績不良兒は何れの學校よりも捨てられてゐる。是は日本の教育の進歩しないのと、人道問題の幼稚な譯である。されども文部省も兒童數の調査をするやうな機運に向つたし、内務省なども可なり心配してゐるのである。けれども吾々は文部省が斯ういつたから、内務省がどうしたからといふ事とは餘り關係のない事である。文部省がどういつても内務省が何をいつても、我々の言行に無頓著であつても構はない。幾十萬の成績不良兒や中間兒のために出來得るだけの救濟法を講じたいのが畢生の事業であるからである。是は天の使命であるからであるといつた所で、余が今後二十年三十年此の世に生存して一心不亂に救濟した所で、百人とも救濟出來ない否拾人も、一人も出來ないのである。故に出來ない事をしてゐるよりも、出來る方法を講じなければならぬ。其第一は親が子を救濟する此の方法を取る事である。之れに越したものはない、之れ以上の方法はない、余は數年間此の種

積極的方法

一、睡眠

兒童と寢食起臥を共にして感じた事はかゝる兒童を衷心救濟するには學校では出來ない事を感じた。之れは余の感想ばかりでない、歐米の補助學校とか白痴學校とかいふものゝ批評もさうである。幾百の兒童を收容したものより數人を收容したものがよいといつてゐるさうだが、余は此の意味を實驗しつゝある。どうしても家族的でなければならぬ、尙家族的よりも家族がよい。故に余は家庭で救濟する事を第一とするのである。さうしてなるべくは學齡に入るまでに十分の方法を講じる必要がある。異常兒の徵候は前編に於いて論じたやうに、生後直ちに種々なる徵候を表はすのであるから、各種の方法を講じなければならぬが一小冊子の詳細に盡し能はぬ所であるから、積極的方法と消極的方法と斯う二大別して論じて見たいと思ふ。

積極的の方法

一、睡眠　積極的方法の第一として睡眠といふ事を考へて見たい。例外はあるけれども寢る子は達者なといふやうに、睡眠の過不足がないやうにしてやるといふ事は肝要な事である。然らばどれ位就眠させたらよいかといふ事は、獨斷的に定

寢冷をさせぬ事　睡眠中の姿勢

める譯に行かぬから、一二學者の調査されたものを記載しておかう。

健康な初生兒は殆んど終日眠つて居つて其眠つて居るときは、母體内に居たときの樣な態度をとるものであつて、下肢を曲げて腹部に近づけ、上肢は強く屈げ、拳は顎或は頰のあたりへ近づけて居るものであつて、時には此の態度を變へるのであつて、哺乳更衣等の場合に短時間覺醒するばかりであつて、睡眠の全時間は約二十時間に達し成長と共に此長き睡眠時間は漸次減少し、學齡前即ち二歲乃至五六歲に至れば十二乃至十五時間、學齡期にありては、九時乃至十一時間であるといふ事であるから、なるべく長時間就眠せしむるがよい。尙睡眠中に注意すべき事は、寢冷をさせぬ事と睡眠中の姿勢を矯正する事である。人間の善いものであるか惡いものであるか、知識のあるものであるかないものであるか病氣があるか無いかといふやうな事が、睡眠中の姿勢や顏容で明かに判かる。樂天家であるか厭世家であるかといふやうな事も判かる。殊に女兒などは玆に書くに及ばぬ、寢行儀といふものは大事なもので、まだ何等惡習慣のつかぬ幼少の時から、訓練しておいたら餘り見苦しいものにはならない筈である。世の親達はよく〳〵注意して貰ひたひ。

次に寢冷については餘り大事にしすぎて、却つて寢冷をさせて、それから下痢や風邪にかゝらせるのであるから、なるべく小さな時から腹卷などをきせぬやうにする事が肝要であらうと思ひます。併し理窟と實際とは並行しないものですから、十分に我子のために反省して盲目な愛には溺れないやうにしたいものである。

二、食物　化學的食養會

二、食物　食物については、我々肉體の根本であり滋養である。而して健全なる身體には健全なる精神が宿るのであるから、大に力を盡さねばならぬ事である。殊に異常兒教育と食物との關係は、一層注意を拂ふべき問題なのである。此の重大問題について化學的に研究されて既に多くの會員を以て組織されてゐるものがある。それは讀者も知らるゝ通り、東京市下谷區北稻荷町三十二番地なる化學的食養會である。斯會の祖師は故陸軍藥劑監石塚左玄氏であつて明治廿九年には化學的食養長壽論といふ著書があり、明治卅一年には食物養生法といふがあり、又明治四十三年には角地藤太郎氏の化學的食養の調和といふのがある。何れも吾々が一々首肯する事が出來るのみならず、必らず實行して價値のあるものである。

食量

食量と異常兒

余は余の身體保護の三大事件の一として日々實行し、又余が教育せんとする異常兒には此によつて食物の手加減をしたいと思ふてゐる。

扨余が異常兒教育上食物について實驗上論じて見たいと思ふのは、食物の量と性質と取り方である。量については多く食べさせるか、少く食べさせるといふ事であるが、是は一定すべきものであつた又規則的にすべきものでない。其理由は身體の弱いものもあれば強いものもある、又運動の激烈なものもあれば貧血質もありといふ風に之亦區々町々である。之れが化學的食養の調和のある所以である。併し學齢前の幼兒や學齢期の兒童には親たるものが相當の量を定めてやるのがよいと思ふ。余が經驗によると、食量の定まらない不調和なのは異常兒の特徴の一だと思ふ。而かも此の特徴は親が作つたものであるやうに思はれる。阿呆の三杯汁とか、人屑は水を飲むとかいふが其は事實である。大人でもさうだ何をいつても飲み食ひの事をいふものがある、教育者などでも食はなければ仕事が出來ないやうに思つてゐるものがある。基督信者が相談會や時々の集會をするのに相談が濟む迄はお茶も出さないといふやうな事は他の會合には少ない、斯ういふ事はよく考へて貰ひたい。瀧の川學園の白痴兒や家庭學校の不良少年などになると、一回十三椀位食べるといふ事であるが、余は此の事について考へて見るに、下等な人間は消化器などが他の器官よりも丈夫に出來てゐるのではないかと思はれる。併し大食しても大食に伴ふだけの活動をするならば合點の行く話であるが、白痴は動かないで食ひ、不良少年は働かないで食ふのであるから不思議である。面目ない話である。感化院や孤兒院などでさも得意げに飽食主義だなどいつて天下に自慢する人もないではないが、斯ういう事を稱へる、人はパンのみが生命であるかの樣に誤解されてゐるのがお氣の毒である。然らば此の食量問題をどう解決すればよいかといふ問題になつて來るが、其は少くとも年齢、體質運動の强弱、天候地理狀態、病氣の有無等によつて手加減をする事が肝要であらうと思ふ。牛飲馬食は嚴禁して貰たい、酒池肉林より偉人や德者が出やうとは夢にも思はれない。

食物の性質

次に性質について述べて見るならば、世の親達は斯ういふ事をいふ、私の子はお肴より食べませんとか、お菓子は洋菓子より食べませんとか、一かどの御自慢顔で、而して其子供は異常兒。さうかと思ふと私の子供は、鹽物やお漬物や、胡麻鹽て

なければ食事はいたしませんと、之れ亦癇高い異常兒。甲も乙も食養の調和を缺いたもので、何れも餘り感服しない御話、否こんな事も一種の原因で、異常兒とは同情に堪へぬ譯です。或る白痴に近い子供で、お菓子は衞生ボーロ一種より食べない、副食物は魚と野菜の煮附二三種より食べない、それだからといふ譯ではないが、石段の上り下りが出來ないのであつたが、一年もすると何でも食べる又石段を上り下りするに物を持たず昇降する事が出來るやうになつた。又鮮魚の副食でなければ食事をしないものもある。さういふやうな子供は身體がよく太つて壯健だかといふとさうでない、却つて顏色青くやせほそつてゐる。面白いのは家庭に歸ると痞せる、學園に來ると肥え太る不思議である、斯ういふ事は考へると化學的食養會の主張が眞理がある。余が化學的食養會を知つたのは、昨年の此頃で約一年の經驗であるが、食養會は約二十年の經驗をして由程の事實を集めてをる。四年前に瀧の川學園で玄米スープを用ふるやうになつてから、園兒の病人が少くなつたといふ話をきいたが、甚だ面白い實驗である。斯ういふ著者も非常に弱い身體で、幼年時代學齡時代虛弱を以て送つたものであるが、身體保護のためには各種の事を試みたが、食養會の事を早く知れば非常な强健體になるであつたらうに遲れながら實驗してゐるが、大に力强く感ずる。詳細は化學的食養長壽論、其他二書について調べて貰ひたいが、二三だけを述べておく、是は學校の先生方には十分研究して貰ひたいと思ふ。所が

上士聞道。勤而行之。　中士聞道。若存若亡。　下士聞道。大笑之。

之れは老子にある句だが、ハイカラガリタイ日本人には古い事や日本固有の事は御氣に入らないのであるが、之れは人の事でない自分の事である、我身の事である我子孫の事である、余と讀者諸君とは決して他人ではない、同じ國民の仲間である、同人類中の友人である、天下の異常兒は親の責任を負ふべき問題ではあるが、國を知り、世界を知り人類を知りたるものゝ對岸の火災視すべき問題でない、我身の事と思ふて考ふべき事であらうと思ふ。食養會の事につきては、石塚氏の食物養生法の序文を掲げて石塚氏の斯道に盡されし事を明かにし、又疑ふ人のために參考に供したいと思ふ。

凡そ食物の人に於けるや猶ほ君相の國に於ける夫婦の家に於けるが如く一日

一夜も其主宰を享けざることなかる可し。若し君相にして團體の善を得ず夫婦にして、齊家の美を得ざれば、國國たらず、家家たらざると等しく、人類にして人類の食物を得ず、食物にして食物の本分を得ず、食養にして食養の權衡を得ざれば、人其人にあらず、食其食にあらず、養其養にあらずして、我海國の風土季候に職業行務に適當す可き人體とならざるは勿論、萬物の靈長たる人心を享有し得ざるなり。況んや植物性の食品を主食する動物は、始終他の動物を殘殺する酷薄の資性を有せず、植物食に動物食を混じて雜食する動物は、臨時他の動物を殘殺する酷薄の資性を具へ動物性の食品を主食する動物は始終他の動物を殘殺する酷薄の資性を具ふるが如く、人に於ても亦然る所にして、食淨則身固淨心亦淨也食雜則身固雜心亦雜也と嘗に言ひ得るのみならず、無我無心の兒を養育し之をして誘導しつゝ處女有爲の發心を奮起せしむるに於てをや。故に曰く食は本なり、心は末なりと、即ち食の心に於けるは聖人者流の養身法にして心の食に於けるは小人者流の養性法なればなり、果して然らば食は心の有形的原因にして心は食の無形的結果となるも、若し夫れ心を以て人事上の大標準と爲すに於ては即ち心の食となりて食の心にあらざるなり。然りと雖も人事は食外なり、食外の人事は人事の食にして、不食の聖人君子出るなくんば恐くは天然の理性に缺くる所を生じて終に自然の道義に害ふ所なきを保すべからず。況や幾千年間を經過せしも齒牙の形狀に變ずる所なきに、人類は眼と口との養ひを第一として、體と心との養ひを第二とする世の趨勢なるに於てをや、然らば則ち食物は人生の體育保生と能力發生との養道に於て至大至要の大關係あるは固より論を俟ざるなり。蓋し古今東西の有識者は人生の食物を論及して、食育食養の本分を極めんと或は理想的に蔬食を貴重して菜多肉少の食政法となし、或は肉食を勸奬して肉多菜少の衛生法と爲すのみならず、近今は鋭意熱心に食饌その物は硬軟多少と消化吸收の難易と遲速と體育運動の適否强弱とを斷定して、人體の健病と體力の强弱とを解說するや、評論細悉殆んど餘蘊なしと雖も、世諺に云ひ、鐔津文集には世之君子者不窺深理不究遠は事造形者易見物在理者難觀と云ひ、其淺近之事與物而不同乃輙非之といふが如く、體不考其善天下功益之驗徒以接其淺近之事與物而不同乃輙非之といふが如く、顧みて其行ふ所爲す所を千思萬考するに、尙ほ未だ世界各國殊に我海國は地形

天候に準ず可き一定の標準と進路とを求むる所なきも、若しや形而下心に趨りて人體の肥瘦と體力の强弱とを標的とし以て食物の肉尊菜卑に於ける體育の運動奬勵に於ける德育の食物以外に於ける其欲する所其好む所に從ひ各自が嚴しく之を實行して軀幹長大なる智才兼備の無病健康人を養成せんと欲するも爭てか各國殊に我國の天地に和合す可き形向上心の賢才偉人を輩出する階梯となるを理んや。是れ則ち人生に適したる天然の食物は有機無機の兩質に配合の宜きを得たるものなるに輓近は唯其有機界の燃燒質を重んじて無機界の不燃質を得んじ以て之を度外視するより學理的に實行する食養の食物に身體に其配合の權衡を失ふて啻に人生の體育保生に能力發生に不良なる所を生ずるのみならず、此內憂に乘じ外患の襲ふ所となりて發する疾病あれば亦之に有機界より製出せる頓挫的の藥劑を以て無機性質を有する良能的の藥劑に顧みる所殆んど之無きが如く、從て終始食物に身體に不平均の配合たる結果をして隱潛的に常有せしむるより如此き形而下に趨る現今の情勢なるにはあらざるか。茲に其一例を揭げんに吾人の知るが如く、玄米を搗白して無機界の不燃質を減損すれば飯と爲し其味をして甘からしむるも其不足せる不燃質を賠償せんには、他の豆類野菜類より補給すれば敢て食養保生の道に平準權衡を失はざる所となるに、却て之を擯斥し以て眼に口に美觀妙味なる那篤倫鹽富有の動物性食品を多食するに於ては亦又身體に其配合の不平均を生ずる所となり、若し此內憂に外患相投じて發する熱性病あれば歐人が事實に於て解熱の效あるを認知せる加里鹽の解熱劑を投與す可きものなるに、其解熱する理由が不明なりとして惡人の如く啻に之を賞用せざるのみならず、藥劑書の解熱劑には多くは加里鹽の化合物を列載すること少なきが如くなるも、解熱劑の必要は固より治病上に無んばあらざるものなるが故に亞人の反對に歐人は其無機界の加里鹽に代ゆるに有機界より撰取する燃燒質の頓挫的解熱劑を盛んに賞用するに至れりと雖も、身體の不平均は尙ほ依然として那篤倫鹽多き加里鹽少なき不權衡の配合を保有するにあらずや。願ふて爰に至れば有機無機の兩質に於ける大過不及なき中庸は得難しと雖も、食養保生の食物に身體に療病に於て最も然る所以の情況あるを覺知するに至るべし。況んや那篤倫鹽なる食鹽は食物の

消化を促し胃液の分泌を増すも其理は證示するを得ずと明載しあるも、亦加里鹽が解熱に效ある其理の不明なると其趣に於ては殆んど同一なるに於てをや。是を以て本書は加里鹽と那篤倫鹽との化學的性質效力及結果を論述せしものにして、其二者に夫婦亞爾加里鹽の名稱を下し以て各人が能知する所の事實例證に徵し務めて理解し易く解說せしものなれば、即ち我國の地形天候に男女幼老弱に職業の繁閑勞逸に適應すべき食物撰擇の調理配合と無病健康との食養攝生に參考す可き學理的平易の事實談にして之を實行すれば必ずや身體をして軀幹長大に始終安全に智優才勝に記憶良秀に精神爽快に享有せしむるを以て本論の主眼とす。（下略）

余は故石塚氏を知らざれば同氏の著書と其の化學的食養會の事跡が大に見るべきものある事に於いて有力の主張なる事を信賴し、又異常兒の多くが食養の間違ひが一大原因をなし居るに氣附いたから、爰に食養會の本源なる石塚氏の著書の趣意を明かにしたいと思つて、茲に序文を掲げた譯である。此の流を汲みて著はされたる角地氏の化學的食養の調和の中に、產前產後の養生といふ章に左の如き事が書いてあるが、信賴すべき事柄であるから左に記載しやう。

產前產後の養生

第一　飯七分副食物の三分の正食正養を守り、田舍みそ汁、福神漬、玄米スープ、海草類、精進あげ、胡麻、胡桃、つぶし餡のぼた餅等を食すれば乳澤山で產輕く背高からず低からず耳朶大きく顎正しく三十二相備つた世にも稀れなる赤ん坊が小さく生れて大きく育つものである。子供が一人生るれば、母親の齒が一枚なくなるといふ程だから昆布のひじき、若布、荒布、澤庵漬を食して、骨成分を補ふがよい。されど魚類の多食水菓子類、菓子、砂糖、こしあん物、じやが芋、きんとん、生卵、肉類等は宜しくない。殊にボッタースの多い牛乳を多量に飲用する時は、西洋婦人に多くある骨盤の屈曲症や、難產等が增加して、腦膜炎的の白ん坊が、大きく生れて小さく育つ樣になるのじや。

牛乳のんで漬物嫌ふて肉すかば
ヒヨロ高くして顏は小さし

古人も易を知らざれば醫に非ずといはれ、易經には頤貞しければ吉なりとあり。

石塚先生は穀を食するものは顆が正しいといはれた。凡そ胎兒は妊婦の食物次第で如何樣にもなるものだから、能々注意すべきは勿論であるが、尙又

妊婦の心理作用が、胎兒の腦髓容貌等に及ぼす影響も亦馬鹿にはならぬ。烈女傳には婦人子を妊めば寢に側たず、座すに邊らず、立つに蹕たちせず、邪味を食せず、割目正しからざれば食せず席正しからざれば座せず、目に邪色を視ず、耳に淫聲を聽かず、夜は則ち瞽をして詩を誦し、正事を道はしむ。斯の如くすれば則ち生るゝ子、形容端正にして才智人に過ぐとあるが、實に胎兒の善良なるは妊婦の心理作用の善良に因る事多く、妊婦の心理作用の善良なるは、夫たる者の善良なる慰安と待遇僞りなき親切と同情とに因る事が多い。之に反して夫たる者妊婦たる者が、不平、不良、不安、不善なる時は其胎兒に及ぼす惡影響も亦甚しい。

予の近くに住める某紳士は、結婚式を行つてから未だ一年も經過せざるに、はや懷胎の喜びに接したが、茲に一つの憂ふべき問題が發生した、それは胎兒が骨盤端位になる事で、其都度熟練と親切で有名な某産婆の手を煩はして復舊したのである。併し此原因が子宮の異狀か若くは臍帶の短いものとすれば、容易に復舊するものでないが、斯の如く容易に復舊するのみならず、既に三回までも骨盤端位となりしは、いかにも合點がゆかぬ、是には何か秘密の事情が伏在するには非ざるかと、疑問が生じたから、段々探索の歩を進めた、處が抑も此新夫婦たるや、始めは其情交鴛鴦の如く、人も羨む程なりしに、いかなる天魔のみいりしにや、夫の品行ガラリと變り、夜遊び外泊度重つたので、それを憂ふる妊婦は獨り家に在て、人しれず涙の袖を搾りつゝありしが、胎兒の骨盤端位はいつも夫の外泊せし時に限る事を發見した。某はコリヤ此儘にては捨ておけぬと、其始末を說明し眞心こめて忠告せしに、幸にも心やさしき某紳士は忽ち前非を後悔して、其忠告を快諾し、且つ感謝の意を表する樣になつた。不思議にも骨盤端位の患は夫切なくなり、其後公用のため外泊する事あるも、既に夫の確信した妊婦は少しも煩悶せざるが故に、胎兒に惡影響を及ぼす事もなく、時節到來して、玉の如き男の子を安産した。

某そばやの亭主は、放蕩の爲め相應の資産を目茶々々にして、家政困難に陷りし爲め其妻は大きな腹をかゝへながら、數多の子女の養育と家政維持の必要上

毎日未明より夜半に至るまで煩悶しつゝ立働きしかば、時到りて顔面位の分娩をした。

農夫が妻の妊娠中、灌漑用水の水口を切りし爲めそれが胎兒に及ぼして、兎口の子を生みし實例は、靜岡縣下に少なくない。尤も其地方では水口をきれば兎唇の子が生れるといふ古來の傳說があるから、催眠術の自己暗示の作用なるべしと思はれる。又妻が惡阻に苦む其期間丈け、妻と同樣の惡阻に苦む夫もあるといふ事じや。

夫が窃盗罪を犯して入獄中あとに殘りし妊婦は、生活に苦んで日夜よからぬ事のみに思を焦せし爲め、それが胎兒に及ぼして、其子が生長して六才になつた時、奸惡なる手段を以て、東京金龍山淺草寺のお賽錢を盗み取つた實例がある。即ち古き竹筒の竹の先へ鳥もちをつけて、お賽錢箱の上にね轉びながらお賽錢を取ては袂へ入れたのである。元來其子供は薄ぼんやりとした性質なりしも、不思議にも窃盗的智能丈は發育がよかつた。親の因果が子に報たのじや。

一年の計は穀を植ゆるにあり、十年の計は樹を植ゆるにあり、百年の計は人を造るにあり、而も人を造るは重に九ヶ月間の胎育胎教にあるが就中受胎する時の一刹那が最も大切じや。されど何れの時何れの處に於て受胎するかは神ならぬ身の知る由もなければ、畢竟平常のよき行ひとよき心掛が即ち胎育胎教の始めにして、教育の淵源も亦實に爰に存するのである。幸にわれ人共に斯の如き細心注意を以て、教育を施すの妙域に達する事を得ば、必ずや心身堅固の子孫を造る事容易にして、人種の改良も敢て憂ふるに足らずや。

人間の惱細胞は約三億個にして、一日の消耗は五百萬個であるから、六十日間で三億個の全部が新陳代謝する勘定じや。若し味噌屋が味噌を造ること下手なれば、其みそたるやまずいに相違ない。親が腐みそを造る事下手なれば、其子たるやコンマ以下のヤクザ者となるに相違ないから、惡き子供ができたとても子供のみを責むる譯にはゆくまい。家業に忠實なる農夫は種籾を一粒撰とし、燻炭肥料を施す等萬事注意が行屆く故に、稻株の發育もよく收穫米も多いのであるが、最初何の吟味もせず注意をも爲さずして、而も粃の出穗を悔るは、既に遲かつた由良之助であるから胎育、胎教の極めて大切なる事は吳々も記憶して

おきたいものである。斯の如く飲食物の選擇といひ精神狀態の注意といひ、毫末の落度もなかつたので、何の障もなく穩に產氣が附てきたと思召せ、扨

お產はドウスル？西洋式か日本式か動物は凡て直立の儘出產するもので、人間ばかりが寢てお產を爲すは不自然であるから、西洋式の寢る方法よりも、日本式の座する法がよい。難產は西洋に多く日本に少ない、產褥熱も其通り、死產も其通り、小兒の死亡率も亦復其通りじや、夫にも拘はらず優りたる日本式を捨てゝ、劣りたる西洋式を眞似るとは抑も何事じや、明治維新の際日光廟を破壞せんとした、ハイカラ說よりもより以上のハイカラじや、產後は腹が弛緩して上部より下部へ血液が下る故、一は腦貧血を防がん爲め、一は身體の平均を保たんが爲に堅く腹帶を締めてねるがよい、身體の位置が一方に偏すると、子宮も亦一方に偏する虞があるから、三四日間は安靜にして、仰向にねるがよい。其後は靜に橫にねるもよいが、右と左とをチョイ〳〵轉換して、平均を失はぬ樣に注意すれば自然と腹に力が入つて、便通もよい又頭部を稍低くしてねれば、腦貧血を起す憂もない。婦人の病氣は大抵產後の不注意に原因するものが多いから、自他の爲め子孫の爲め、十二分の御用心が肝要じや。

產後の副食物としては野菜の皮はだを取らずに、鹽からく煮たる物や鹽氣のつよき澤庵漬みそ漬、餅入みそ汁等を食すれば速に子宮を收縮して、身體を平常の通りに復舊する事が早い。肥立のわるい人は牛蒡を鹽からく煮て食すると、大に宜しい若し、又

乳不足の場合は第一胡麻鹽、金平牛蒡、そぎ牛蒡と川魚の鹹みそ汁、又は雪花菜のみそ汁に鰻の蒲燒を入れたる物、若くは鰻の天ぷら、鯉のみそ汁がよい。脚氣水腫は卸生姜に日本酒をまぜて、一日數回外用し、小豆と昆布の煮合鹽、鮭のこぶまき等を食するがよい。又からす麥と柚子の種を煎じて飲むも宜しい。植物性の油が不足すれば眼病となり、梅干生卵が過ぎれば痼癖持となり、肉食すぎれば近眼となり、鹽氣過れば皮膚病となる。乳兒の大便の黃金色なるは、鹽氣と飽氣即ちナトロン鹽とカリ鹽の調和よく、色の青きは鹽氣不足の證據なれば、此際母親が鹽氣の强き物を食すれば、青色變じて忽ち黃金色の健康便となるのである。乳兒の病氣は大抵母親の食物に原因するものなれば、異身同體と心得て、細

心注意が肝要じや、昔釋尊が阿難尊者目蓮尊者に、乳養のお經をお說きなされしはの誠に御尤千萬あり難い次第である。

正味一・一パーセントの繁殖力ある我日本民族は、產前產後の養生をば、婦人のみに放任せず、男子も其責任を分擔して、共に〳〵注意を爲し、以て心身堅固の後繼者を養成することは、第一天地に對する報恩にして、亦吾人の一大名譽である。

子寶を得んと思はば黑豆を鹽煮として、(砂糖を少々入れてよし)毎日チョイチョイ食するがよい。又鹽、小豆餅、鹽のつよき野菜の油煮等、凡て鹽からき物をドシ〳〵食して毎日入浴を爲し。鹽氣の新陳代謝を烈しくするがよい。若しあま鹽にて油物を食すれば、腦元わるく食進まず、下痢の虞もあるから、鹽加減を忘れてはならぬ。但し男性と女性の別るゝのも、鹽加減が重なる原因である、高原地の加里鹽的なる西藏國に男子多くして、一妻多夫の行はるも那篤倫鹽的なる鹽湖地のアメリカのソールトレーキ洲に、女子多くして、一夫多妻のモルモン宗の行はるゝも上流社會に女子多くして、中流以下に男子多く生るゝも、又軍人の尉官時代に男子多くして、佐官時代に女子多く生るゝも、滿更偶然てはないじや。

以上角地氏の所說正常兒を造らうと思ふ人には、大に參考とする價値がある。尙同書に左の事がいつてある。

學齡時代の食養

近き將來に於て良妻賢母となり大國民となるべき學齡者は、務めて飯多く副食物を少くせよ。お辨當には海苔卷か、胡麻鹽の握り飯が最も宜しい。常に澤庵漬、福神漬、鹽炒豌豆、鹽煎餅、田舍汁粉等を食すれば筋骨の發育を助けて記憶力を增す効が夥しい。牛乳、食麭、菓子、砂糖、水菓子類を多食すれば貧血を來して神經衰弱となり、不成績を免れぬ。若し强て過度の勉學を爲せば、鹽氣と油氣を消耗すること愈甚だしく、遂に修業證と弔詞とを交換するの不幸に立至り、後悔臍をかむも何の甲斐もなし、是れ豈に本人の不幸のみならんや、實に國家の一大不幸である。

あの子やたらにビスケット
食べるどうりて成績びすけつと

競走を爲すに當りては、前以て胡麻鹽澤山の握り飯を食するがよい、鹽を多量

に攝取すれば、疾走して鹽出し即ち發汗しても容易に疲れない。尤も生卵に生醤油を澤山かけて飲むもよい。若し食ばん餡ばん、菓子、林檎、密柑、サイダーを食すれば、意外の失敗を招虞がある、論より證據實驗して双鹽の眞理を知るがよい。

余が二十五ヶ年間兒童教育をして來た間に於いて、異常兒の多くが食養の誤りが最大なる原因をなしつゝある事を知る事が出來たのは、欣喜の至りに堪えない譯である。石塚氏は四季折々の食養歌に、

春にがみ夏は酢のもの秋からみ、
冬はあぶらと合點して喰へ

と面白く記憶して實行して可なりである。

食養善惡表

善の部

無砂糖搗米　澤庵漬　赤飯に胡麻鹽　胡麻汁
飯七分副食物三分　味噌漬　小豆めし　胡麻合
副食物は野菜多く　生姜漬　握りめし　蓮根牛蒡鳥肉油炒
肉卵魚少々　佃煮　櫻めし　筍鰊昆布油いり
野菜皮剝ず鹽辛く　胡麻鹽　油めし　小豆昆布煮合
味噌汁　鐵華味噌　いなりずし　里芋練煮合
玄米貳割まぜの飯　胡麻味噌　ごもくずし　豌豆ごまめ煮合
梅干　七味みそ　玄米煎餅　大根卸に
油揚ひじき蒟蒻　味噌汁に餅と生姜　鹽炒豌豆　天ぷら
の煮合　おろし　つぶし鹽あん　精進揚
油揚ねぎ牛蒡煮合　お雜煮　玄米スープ　鹽鮭
大豆鰊煮合　さつま汁　双鹽効脾胃　そば
大豆荒布煮合　湯豆腐　梅干生姜番茶　燒油あげ
蓮根と小豆と鹽の田樂　醤油に番茶　めざし
いとこ煮　胡桃豆腐　よせなべ　鰹ぶし
儀助煮　田舍汁粉　けんちん蒸　がんもどき
鰊と茄子のべたに餅　玄米めし　うなぎ

ぞう煮　玄米團子　釜めし　卵やき
鹽鮭のから汁　金平午蒡　餡かけ豆腐　疊いわし
鹽鮭の頭や骨　煮豆　七味香煎粉　數の子
の昆布まき　八杯豆腐　野菜のたゝあげ　蠣の味噌煮
茄子のしぎやき　蓮の木の芽合　但動物少々交ぜ
すり芋に卵醬油　いかの五目蒸　干魚の油やき
からの油いり　おは　ぎ　豆腐の鯲鍋

○双鹽効脾胃は石塚先生の創製にして加里鹽と那篤倫の調和を得たるものなり

○天ぷらの衣は玄米粉一升生卵三個酒一合の割合を宜しとす

惡の部

混砂米　パンミルク
副食物多食　ビスケットじやが芋ジヤム
肉スープ菓子　さつま芋珈琲
牛乳　こしあん物　きんとん　其他果物類
豆乳　りんご　介虫類　肉類生魚の多食

斯う表を轉載して見ると、何だか西洋料理に反對のやうに見えるが、食養會の主張は感情的に出來たものでない、余は別に食養會に依賴されて斯道の鼓吹をやるのではない、効果があり眞理と認むるものを紹介するのであるから、詳細は著書について研究され、東京市下谷區北稲荷町三十二番地化學的食養會について調べて貰ひたい。尙誤解のないやうに双鹽病院長の岡部剛雄氏が、昨年十一月十二日京都府立第一高等女學校に於て講演されたものが、食養雜誌第七卷第四號に出てゐるから轉載しやう。

化學的食養法

岡部剛雄

すべての動物は生存する爲に食物をとらなければならぬ。人は齒の構造やその他の消化器官の構造も、穀食するに適してゐる。穀物中でも玄米が一番よいのである。

玄米は加里と那篤倫との配合が、人體にかなふ樣に出來てゐる。それだから玄米ばかりたべて居ればよいはずであるが、さうすると日本中の米の產額だけでは足らぬ、そこで副食物として野菜や、魚類を食べるやうになつたのである。此頃は米はしらげて白米にしてたべるが、さうすると玄米の纖維分と脂肪分とがなくなるのである、野菜のみをたべると不消化だから、鹽の必要が起つて來るのである。

さて日本は此頃西洋風が入つてきて、魚や肉の鹽氣をすくなくあまくしてたべるようになつた。野菜なんかたくさんたべるのは下品なやうにおもひ大事な纖維分のある皮をむいて中のかすばかりをたべて、上品がつて居る。從つて體はよくふとつてゐて氣力のないものになり、本來の精神である忠孝の念もわすれやうとするのである。

むかしから菜へうつりばしをしてはいかぬ、阿呆の三杯汁などいふのはみな飯七分の割合にたべなければならぬといふことを敎しへたのである。

田舍の人の體格がよく、都會の人のそれに反するのは皆食物の結果である。今日は副食物本位で食事に馳走さへあればよろこぶが、併し野菜物さへ食へばろよしいのである。菜は皮をむく事のできぬものでたとへ如何なる料理人でも菜の皮をむく人はない。副食物には野菜を食ふから、菜の物といふが、菜の物は野菜七分に魚肉三分を加味して食へば、決して毒にはならぬ。魚は那篤倫で、野菜は加里鹽の方である。故陰陽合して毒にはならない。魚肉には毒がある、から、昔から魚ばかりは出さない、山海の珍味といつて山のものをよく配合して出す。作り身をしても身のみは出さぬ、鮪など油の多いものには、その毒消として大根を添へてだすのである。

かく食物はすべて陰陽即那篤倫鹽と加里鹽との配合が必要なので、人の身體を養ふにも魚肉と野菜と相まつて其生命を全ふし得るのである。一體日本人は米食をしてゐるから、基礎が立つて、今日の繁榮を來したのである。かの獨佛戰爭の結果をみるに、元來佛國は美食する國で、一方獨逸人は粗食をしてゐる。そこで佛國は敗れて、金や土地を出して、和睦して。佛國には當時傳染病があつたため敗れたので、戰にまけたのではないといふ人もあるけれども、つまり獨逸は粗食して勝利をしたのである。其の他日露の戰爭も露國は大國の上に、軍事

上の準備も整頓してゐるのに、我國の如き小國が勝つたのは、日本人の死んでも國のためにつくす心があるためで、此の心は日本古來の食物によつて養はれて來たのである。反之肉食の露人は死してまで、國の爲につくす義務はないと云ふ、この愛國心缺乏の點でまけたのである。

フランスは今世界に於ける流行の根源地である、かの肉色の白粉など發明して吾日本にも流行して來た、この肉色を作ると云ふことは吾身の色艶を補ふためであつた。健全なる人の使用すべきものでない。

今世の中の人が往々學問のある女は困ると云ふが、その原因は歐洲の風が入つて來て、パンにバタなどをつけて食することを好み、香物などを厭ふが故に、從つて日本婦人固有の美を失つて、灰殼と字に書く通り吹けば飛ぶやうな人間になるからである。昔より美衣美食と云ふが實は反對で、美食美衣と云ふので美食すると美衣がきたくなるのである、かゝる事は學問した女ほど多く、然かも學生時代には學校の成績及品行なども、わるく他に嫁しても平和なる一家をなすといふ事は出來ず、遂には早死する事になるのである。之に反して粗食粗衣で

滿足すれば、身體はますます健康に如何なる大事件が起つても、少しも動ずる色なく、目的も貫徹する事が出來る。併し粗食がいゝといつて野菜ばかり食する時は、臨機應業の出來ない役に立たない人となり、又た肉ばかり食する時は口出しばかり上手になつて、自己の利益のみ計り、他人の善事をうらやむやうになる故に之を七分三分に調和して食する時は、完全なる人物となる事が出來るのである。

昔から京美人と云ふて世間にはやかましいが、今日のはあてにならぬ昔の中肉色白の美人は今は其の面かげがなくなつた何故昔はその樣に美しかつたといふに、桓武帝此地に都をお定めになつてより、肉食を御禁じになり、菜食をすゝめられたに原因する、又一方では鹽風のふかないにもよるのである。これらの原因からしてすがたかたちもうつくしく、言葉もいとやさしき京美人が出來たのである。

今日の女學生を見るに一種のいやな流行語がある、之はたしかに食物が原因するのである。即ち美衣美食をするからである。みなさんは將來一家を治め

る人となるのであるから、よく〳〵心に入れておかねばならぬ。

かの日露戰爭の折に戰死者の遺族を訪問すると、家によつて云ふことがちがふ、教育のある家へ行くと非常になげき、無學の農家などへ行くとその樣な樣子はなく、人間一度は死なずに居られない、たゞ死んだら誠につまらないが戰死となれば結構な葬式をして頂き、その上神にまでまつられて、誠に幸福であります と云ふて居ります。かやうに何も知らない百姓などは別に數へずとも、よくよく〳〵忠孝の道をわきまへ知つて居り、教育ある者は知りつゝも實行が出來ぬ、その實行の出來ぬと云ふは、美衣美食するからである。百姓の忠孝をよく知つて居るは、粗衣粗食してゐるからである。

齒は米のくづれた形である、齒の字を略すれば齒で口は齒のくぼみ其所に米が入る、止は上齒の形であつて、兩方で米をつぶすのである。それ故に人間は米を食はなければならん、皆樣も米を食べて鹽をお喫んなさい、皆さんがよい夫人となりたいならば、(異常兒の出來るのがいやならば)肉や魚を食べてはならぬ。肉や魚を御馳走といふ馳は馬でハシルである、肉や魚を食べると勞働する者は實力がなくなり、靜座して居れば心がうごく、いろ〳〵の事を考へて氣がまよふ、そしてそこらへ遊びあるき、走りまはる、その結果として新聞にのるやうになる。若しその心をヂット抑へておくと病氣になつて、とう〳〵此世にお別れしなければならん、禪宗の僧は肉や魚を食はずとも長生をする、かやうにするには米七分菜三分を食ふのである。

我々でも嫁を貰ふ時は先づ其家へ行つて家庭の有樣を見る、親に孝兄弟に仲よきものは夫に對しても貞操であるし、舅姑に對してもよくつかへる。昔は夫が外から歸つて來て不平があると家内にどなりつける、そうすると夫人はだまつてこらへてゐて夫にお斷りをいふと以後は氣をつけろですむ。主人も後で自分の惡い事に氣がつくのである。今の夫人は亭主が夜でもおそく歸るとぐう〳〵ねて居て、門口に歸つた音がすると、やう〳〵目をさまして夫にあなたにどんな權利があつて遲くかへるかとたゝみたゝいていふ。その時柔く出ると柔よく强を制すで夫は强くも出られぬ、かたい物とかたいものをかち合すとわれる、夫が强く出るとあやまる、これによつて圓滿な家庭が出來るのである。私

の近所に一人の不器量な娘があつた。元は然るべき人であつたが、おちぶれて娘も只小學校のみを卒業して、内て手内職をして居る。其時に一人の巡査がこの娘をほしがつた。それを私にどうしたらよかろうかと相談をしに來たのであの男はどうも道樂者でいけないと云ふたが、しきりに向ふから懇望する。娘もどんな家にでもゆくと云ふので仕方なく、とう〳〵やつた半年ばかりたつと男はいやになつて出したくなつた。そして始終夫は外で酒を呑んであばれてどなりつけて追出さうとするが、どうしても出て行かない、表から出して戸をしめると裏から又入つてくる、そして私は此家は死ぬまで出ませぬかくごで嫁入ました。それで出よといふなら此處て自殺をいたしますといふので主人もこまつて、それからは好きな酒もやめ、放蕩もやめ、まじめになり、嫁と仲よくして圓滿な家庭をつくつて、其中に子まで出來た。かうなつたのは全く食物のおかげである。其食物は所謂粗食て、魚は一月に一二度位しか食はなかつた、それて夫によくつかへ、夫が追出さうとするのは、何か自分に缺點があるのであろうと自省して、缺點を直して行く。その頃は女子大學もなし、小學校ばかしてあつたが、今日の高等教育を受けた人は、それ以上のはたらきがなければならぬ。然るにそんな樣子がないのは、これは教育がわるいのでなくて、食物がわるいのである。習つたよい事を惡く用ゐるのである。いくら忠孝の道を教へても、食物が惡いから仕方がない。いくら教師が骨析つても(もとがわるいから仕方がない。故にあなた方もよく食物に注意されて、人の模範ともなる事ができる。

今食べてわるい食物をあげて見ると、

一、肉及び魚類の多食、異常兒は之れが多い)肉や魚を食ふときには、野菜をそへて飯を食ふ、牛肉を食ふにはさつま汁にするがよい。

一、果物類

これは少しも食べなくてもよい、果物は陰に偏して居るから、加里鹽が非常に多い、今日の人はあまい物を食べて、鹽を多くとらなければならぬのに、果物をたべるからいけない。昔の人はよく知つてゐる、青梅をたべると腹がいたくなるから、鹽をつけてたべる、それて陰と陽とが和合してよいのである。果物には加里鹽があるから、これの毒けしとして食ふのである。それ

に今の人はかつて毒となる砂糖をつけて食ふ、智惠の無い話だ。

一、漉餡類

これは人間のからだを丈夫にする、成分をとつてしまつたのであるからわるい、もし食ふならッブあんにして、砂糖をそれに少し入れゝばよい。

一、甘藷馬鈴薯

是を食ふと女は横太りになる、一番肝要な縫針が下手になる、今一つの缺點は腹を立て物を誤解する、又何かしても敏活に行かぬ故是は食はぬがよい。

一、唐瓜

昔は病人の食物であつたが、今日は食ふと病人になる。昔の人は鹽が多くて病氣になつたものであるが、今の人は鹽氣がたらぬので病氣になるからである。昔はそれ故病氣見舞に果物を持つて行つてもよかつたが、今果物を持つて行くのは人殺しの手傳に行くのである。

一、パン、ビスケット、ジヤム、シナルコ

是は主に果物から出來たものであるから、今日のものは食つてはいけぬ。

パンビスケットは麥から出來たのである、麥は土計りて出來る、殊に秋から春にかけて出來て陰に偏して居る、故に麥を食ふ時には鹽をからくして食はねばならぬ。其麥から出來たパンは今あなたがたの鹽氣のたらぬからだに食つてはならぬ。胃肺のわるいものが、それを食するとなほ〳〵わるくなる。トラホーム脚氣にもよくない。

一、牛乳生玉子

今頃牛乳をのむと青白くなる。今頃のものは五年先て死んてもよいから色が白くなりたいといふ馬鹿が居る。日本でも千二百年程前には牛乳をのむ事が流行した事があつた。それは滿洲から入つたのである。その頃は鹽氣が多かつたからであらうけれど、其後止んでゐた。それに今日になつて又牛乳をのむやうになつた、朝他所へ行く時に、生玉子を飯にかけて食ふは消化を害するばかりてなく、ナトロン鹽が多くて陽に偏して居るからよくない。玉子を食ふ時には、菜や色々のものを入れて、茶碗蒸にするか、又は玉子やきにする時は、鹽と油を入れて生醬油をかけて食ふがよい。生玉

子は不可ない。朝早く外へ出る時には、匙含味噌のかういのに、油揚位いれてそれに餅一切れ入れてたべれば、一日中はたらくに少しもつかれない。

一、ソップ豆乳

ソップは牛肉を鶏肉かてこしらへたものてある。故に肉ソップはナトロン鹽の陽に偏する、その樣なものを食べるより其まゝたゝいた方がよい。豆乳も豆腐からこしらへたものてあるからいけぬ。魚や肉を食べても、野菜と煮合せればよい。昔のこしらへ方にしたがつてすれば間違ない。それに今の女學校の樣に何匁目などゝ計つてするのは役にたゝぬ。女學校女子大學などを卒業して居るものゝ家庭の食物はたべられないまるて病人の食てある。

之に反して食ふべきものは半搗米てある。半搗米を食べると初めは家内のものが不平をいふ。それは舌ざはりが惡いからてある。それを一ヶ月二ヶ月とたべさすと身體の具合がよい、たまに旅行して他のものを食べると身體のぐわいがわるくなる、それて半搗米のよい事がわかる。そして家にかへつて初めて、半搗米の有難味がわかるのてある。半搗米をたべると通じがよくなる。

月々に月經痛て困る人があるが、之は病氣てはない。日本人は滿十四ヶ年六ヶ月頃からあるが、普通てあるから、女學校に居るものはもうあるはずてある。それが年頃になつてもなかつたりいたんだりする人は、菜食をする時はすぐなほる。それは病氣てないからてある。其時にからだのいたむ人は後に子が出來ぬ、昔は三年たつて子がなければ出してもよかつた、今云ふた樣に菜食すればかやうな事はない。

當校寄宿舍生は半搗米だから、通じがよくあるてあろう、それて異常がある

ならば副食物が惡いかも知れぬ。油氣をたへず入れなければならぬ、菜食すれは顏が美しくなる、又心も美しくなる中に野菜がきらいだとか、又香の物がきらいだとかいふ人は肺病に罹り易い野菜物のきらいな人は神經過敏て、色が黑く先づ印度人と差がないのてある。

今參考までに食養的療法の二三をお話しするならば(下略)

食物の取り方

余の親戚に小兒科醫があるが、化學的食養會の有効なるを信じて、治療に試みたらと勸めたが、大に有効なるを認めて、會員になつてゐる。されど余は食養會の役員でもなし、又會員入會を勸める必要も認めない。只本會が教育上多大の貢獻ある事を信じ、又教育の目的と食養會の目的と一致する點もあるので、記述した譯であるから、先づ讀者から研究實驗されて、兒童に及ぼして貰ひたい。食物の性質については先づ筆を擱く事にして次には取り方について實驗した事などを一二書いて見たい。三度三度の食膳に上る副食物を一々考へて箸を取るものがある。之れは兒童ばかりでない、青年でも壯年でもさうである。是等の原因をよく調べて見ると、習慣から來たもの、性質から來たもの、病氣から來たものとに別けて見る事が出來る。さうして習慣から來たものは、家庭の誤りである。大體人は何でも食べるやうにありたいものであるが、どうもさうはいかぬものである。親たるものが少し注意すれば出來ぬ事はない。性質からといふのはどうも人によりて食物の好き不好きがあるやうであるけれども性質といふよりも習慣といつた方がよいと思はれる。

次に病的に好き不好きがある、或は子供などは鯉の味噌此が嫌いだといふ、或る子供は香物を一切も食べない、又酢の物を少しも食べない、鮮魚はいやだが、腐敗に傾いた魚ならば食べるといふやうな變なものもある。又少し變つた香があれば、それで食べないといふやうなものもあるが、兒童の好き不好きはどうにでもなる。それから取り方については、食養會などでは御飯三口に副食物一口といふやうにいつてあるが、さうすれば七分三分になるが、異常兒にそれを敎へる事は困難である。阿呆の三杯汁といふやうに御飯一椀食べて仕舞ふ間にお汁三杯のものもあれば、又御飯と副食と別々になる。例へば御飯を一椀食べて仕舞つてからお汁をヅーと一口に吸ふて仕舞ふ。又御飯を全く濟してから、副食物にかゝるといふやうなものがある。之をよく考へて見ると、其心理作用が解釋される。斯の種の異常兒には味覺が幼稚である、運動能力が遲鈍である。故に賞味する事が出來ない、咀嚼する事が出來ないのである。それで親達が魚より食べないといつて自慢をしてもお氣の毒には味が判らないのである。故に其異常兒が食物を取るに普通に出來るやうになつたならばそれは大なる進歩であるから、賞味する事と、咀嚼

食事と作法

する事を教へて貰ひたい。此の教育ばかりは苦痛である、思ひやりによつては慘酷にも思はれるが、決してさうでない、眞の親の愛は茲にある、至誠のこもれる教育家の親切は之れである。次には食事中に行儀作法を教へる事である。異常兒のあるものになると教師もない、親もない、兄弟もない、只自分が喰へばよい、甚だしいのになると人の器に盛つてあるのでもはさみに來る。それで長者も何もない、只口にすればよい、けれども爰が肝要で、先づお父さんからお母さんからといつて、お父さんやお母さんは、自分が喰つて子には喰はさずにおかぬ、否喰はなくても子には喰はせる。是を教へる余は異常兒の教育と食事位重大な問題はないと思ふ。子は母の鏡といふやうに、主人が獨り酒池肉林の贅澤を極めた所の子供と、主人も下女下男も同樣に取扱つてゐる所の兒童とは、異常兒ながらに品性の差が表はれてゐるやうに思はれるから、異常兒のゐる家庭では食事の清潔を切望する所以である。尙述べたい事もあれど殘しておく。

三、遊戯

余は睡眠と食物と遊戯は、兒童の三大生命であると思つてゐる。故に異常兒を正常兒にするには、普通の人にするには、此の三者を都合よく矯正指導して行く事が肝要だと思ふ。故に今茲に遊戯について少しのべておきたい。遊戯といふのは勢力の加剩から起る本能であるとか、又は事業をなすための準備だとかいふやうに學者は解釋してゐるやうであるがさう思はれる。それで學齡前の子供や、學齡期にある兒童が遊戯といふ事に趣味を持たないならば、其は餘程注意して觀察しなければならず、又遊戯を奬勵しなければならぬと思ふ。或る八歲になる兒童は遊戯に何等の趣味がない。故に玩具などは何一つ興味を以て見ないのだから、親も失望して何一つの玩具も買つて與へないといふのがあつたが、教育も手出しが出來ない。澤山にある笛のついた玩具など與へても吹く事が出來ない。併し之れが出來ないからといつて吹かさずにおいたらどうなるであらうか、年がいつたらといふ譯にも行かないから先づそんな所からやらせて見ると、可なりに進歩して行くものである。余に生後一年餘りの子供がありますが、手先きの遊戯、玩具相手の遊戯唱歌遊戯の模倣といふやうに、却々盛にやる。さうしては眠る、醒めては喰ふ、喰ふては遊ぶ、之れ三つが生後より學齡期に入るまでの生命である。故に若

惡戯

遊戯と玩具

し學齡前に遊戯がないならば、十分家庭ては注意して貰ひたい。さうして此の遊戯に家庭について特に注意して貰はなくてはならぬものは惡戯といふ事てある此の惡戯が滿一年餘りの子供が障子を破るとか何か氣に入らない事があるからといふのて、物をなげる事がある。さういふ事を惡戯として一々責めたならば、其子供の身心を萎縮させて仕舞ふ。彼等が障子を破ぶるとか、物を投げるとかいふのは、彼等の好奇心や、運動能力の試驗をしてゐるのてある。破れた障子穴からバアといつて、傅のものが相手になれば、どれだけ彼等の腦中には發明と愉快が感ぜられるてあらうか、彼等が力のあらんかぎり投げる其運動にはどれだけ、腕力の愉快が感ぜられるてあらうか、青年が運動會に賞與された時程の快感があるに相違ない。斯ういふ意味ある遊戯、或は運動を不滿なくやらせるには、學者が理窟づくねにした玩具よりも、自然の石ころや、木きれの方がよい。遊戯と玩具は大なる關係がある賣店にある玩具もだいぶん教育的でなつては來たがどうもまだ思ふやうなものが少ない。どう少いかといへば、一年の子供には一年の子供がよろこぶやうに出來てない、七歳の子供には七歳の子供がよろこぶやうに出來てない。どうも親が見てよろこぶやうな玩具が多い、されどだん〳〵進歩しつゝあるのはよろこぶべき事てある。兎に角生後七八ヶ月にもなれば何かの玩具て單純なる遊戯を始めなければ、家庭はよく注意して、專門家と相談せねばならぬ。さうして世の教育ある家庭には兒童學の研究をして貰ひたい、されど生もの知りは大怪我の本だから、よく〳〵注意して貰ひたい。

三ツ子の魂百まで

四、訓練　三つ子の魂百までと幾度もいふやうに、人が世出すると俄に偉いものになつたやうにいふけれども、さう俄になれるものてない。無論よいものは、善い遺傳をうけて來なければならぬが教育の力は遺傳を左右する、善い家に善い人の出來るのは遺傳と教育とが合併するのてある。種もよいし培養もよいといふ事になるのてある。故に異常兒てもよく訓練すれば、相當のばして行く事が出來るのてあるから、餘り失望せずに兩親や兄弟が模範になつて訓練したならば、必らず其効果はある。出來ないとしてやらないならば、何時になつても出來ぬ。出來ぬばかりてない、世に害毒を流すか、親や兄弟だけて濟めばよいが、親戚までもの顏汚しをくてくれる。異常兒は偉いものも出來るが、十中八九までは惡くなる、惡くな

るのも只居喰ひするだけてない、どういふものか惡い事は覺える。余が實驗した子供などと、余が幼少の時と比較すると話にならぬ利巧者がある。或る智識に於いては、今日にても我々の想像し得ぬ事を知つて居る。十歳になる女の子て一見すれば可愛子てあるが、顏のやうな子だと思ふと當が違ふ、利巧者てあつて、手に合はぬ。今の世渡り上手な政治家のやうなものてある。さういふものが最早十歳迄て定つて仕舞ふ、其異常兒はどうして出來るのてせうが、原胤昭さんが母と子といふ著書を書いて居られるが、其内の一節に左の通りの事が書いてあります。

讀者よ貴方に今すてに三四人の子供衆あらば、獨り靜に考へて見て下さい。其性質と見るべき彼の子供等の心意が三人が三人異なる狀態のある事を見出すてありませう。而して自己即ち產の父母が其子を受胎る頃より、三歳四歳に育てる迄の時代に於ける父母相互親愛の濃薄、心意の正邪、境遇の浮沈一家の盛衰などを細かに考へ出して之を對照して御覽なさい、他人には云ふを憚る事てすが、夫婦間には左樣だ左樣だ此の子果して彼の時代の寫眞だ、彼の子確に彼の時代の產物だと思ひ當る事實を認る事が出來るものてす、果して其處に思ひ當る事あつたなれば、その結果は獨り子供の罪にのみ冠らせては可哀相てはありませんか深く顧み思ふて改良の責をその父母も脊負ひ、善後策を考へて遣らねばいけません。

と斯ういふ事が書いてありますが、人の事てはないのてある、異常兒も之れてありませうか、どちらにしても子の事は先づ親が出來るだけの心配をなし、又自己を犧牲にしても相當の善後策は講じねばならぬのてある。それには今ものべました通り、親がよい手本を示して、好き訓練をせねばならぬと思ふのてある。

消極的方法

消極的方法といふのは異常兒にならないやうに防止するのてある。積極的方法は前にのべたやうに、奬勵するのてある、睡眠がよく出來るやうに、食物が正しく取れるやうに遊戯が盛に行はれるやうに、又よき訓練が出來るやうにとの希望をのべたのてある。消極的の方法は禁止する方法て、普通兒にはさうてなくても、異常兒には事によては嚴禁せねばならぬ事がある、其を少々のべて見たい。

一、社會の惡風より遠ざける事てある。社會がよいとか惡いとかいふのも見や

うによる事でもあるけれども、兒童のためには隨分よくない。先づ第一に目立つ事は落書である。余が今現に居る所は淨土宗の本山であつて、相當大きな堂もあれば、山内には七八ヶ寺の末寺もあるが、此の寺が四五年前に山内全部の壁の塗りかへをしたから、其時に余は時機恰も好してあるから、落書防止會を始めやうか、せめて此の山内だけにても實行が出來たら妙だからと、山内の役僧に言つた、それは結構だといつたから、余は多少の腹案を以て各寺院の僧達も相談して呉れといつた、所が却々さうまでやつて呉れない、妙なもので斯ういふ仕事は余の所だけやいく〳〵いふと、却て先きに落書しられるものであるから、止むなく其まゝになつたが京都には古寺が多いが、其壁などの落書は見られたものでない。黒住さんではないが、目にもろ〳〵の不淨を見ても心にもろ〳〵の不淨を見ずで居らねばならぬ斯ういふ所は普通兒でもさうであるが、異常兒には見せたくない。絶對的に見せたくない。次に俗歌である。だいぶん減じたけれども、異常兒でなくて、低能者が下らない俗歌を高い聲でうたつて呉れる、それが異常兒には妙に覺えられると見える、又勞働者がきくにきかれぬ歌をうたつて仕事をしてゐる。異常兒にはそんな場所が見せたくない、けれども彼等はそんな所ほど見たがる、親も兒童心理學の判からん人には、一向無頓着である。もつと害のあるのは、花見場所や、活動寫眞や芝居である。健全なる兒童には害は少ない、あつても暫らくて忘れるが、異常兒には困つた事には一旦這入つた事は容易に出ない。十年が間にうけた害は、專門家が三年かゝつても取れない。余の知れる小學校の相當の兒童で活動寫眞の味を覺えて、遂に不良少年になつて仕舞つて困つてゐるものがある。活動寫眞も普通兒は時に見せてもよいが、異常兒には全然不必要である。活動寫眞など見せなくても異常兒に適した趣味あるものがある。異常兒が田舍よりも都會に多く、都會も大都會に多いといふのは、社會狀態が單純であると複雜であるとによるのである。さうかといつて田舍にはないかといふと、田舍の無教育の家庭に育つた異常兒と來ては實に變なものである。故に田舍にしても、都會にしても、どうか此の社會の惡しき感化をうけないやうにして貰ひたい。余が預かつてゐる子供でも此の子に活動寫眞を見せなければ、余に託さなくても濟んだであらうにと思ふものがある。余はどうかして特殊教育所へ預けられるまでに、早く家庭で教育して貰

たいと思ふがために斯くいふのであります。或る日遠方から十二歳になる男子に四人の附添で來られて、今日大學の精神科で見て貰つたら之れは精神病でないから、白川學園で教育して貰へといはれたからよろしく賴みますといつて來たがどうも一時間ばかりは一大戰爭を演じたが、種々方法を講じた上余も我儘の結果だと思ひましたから、どうしても世話になれぬかといふから、入園手續をさせて、それでは入園したものとして、御家庭で教育しなさいといつて、本人に一二の訓戒をして歸らせたが、其後書面の往復で調べて見ると、全く別人になつておとなしくしてゐるといふ事である、不思議ではありませんか。精神患者と見られたものが、それで私は假りに成績不良兒や中間兒が三十萬あるとするならば、三分の一位は家庭で教育する事が出來やうと思ひます。

次には病氣に罹らせないといふ事であります、化學的食養會の主張の樣な實行が出來ますならば、殆ど無病で行けるのではないかと思ひますが、併し余もそこまでの實驗なく、又讀者にも始めての方には御了解が出來なからうと思ひますから

二三の病氣について醫學者のかゝれた著書により御注意したいひと思ひます。そこで異常兒殊に能力の遲鈍なものでは惱膜炎にかゝりましたものが澤山ありますから、第一に此の病氣について醫學士の笠原道夫君の書かれた、小兒惱膜炎及其療法といふのについて御參考までに、二三の事を轉載して他は斯の書物について御調べ下さい、又紹介するものはよい加減な事を書くのは、生兵法は大怪我の本であるから、專門家でないものが判かる範圍に於いて、それもあゝ腦膜炎にてもかゝつたのではなからうか早く醫者に見せねばならぬといふ所までの注意を書くだけにしておきたい。病氣についてはすべて其範圍を脫しないやうにしたい積りである。それで腦膜炎についても、一般症候學の或る部分だけを記載すに事にする、其文章も其儘を取る。

一　項部硬直

項部硬直ノ强弱ハソノ程度種々ナリ、輕症ノモノニアリテハ唯他動的ニ頭部ヲ前屈セシメントスル時ニ多少ノ抵抗及疼痛ヲ認ムルコトアリ。而シテ項部ヲ側方ニ動カスモ硬直ヲ認メズ、著シキ時ニハ前部ノ前屈及側方運動ニモ硬直ヲ

認ム、最モ著シキ患兒ハ頭部ヲ全ク後擲スルニ至ル。

項部硬直ハ常ニ項部疼痛ヲ伴フモノニシテ、著シキ時ニハ全ク昏睡狀態ニアルモ、項部硬直檢査ノ際ニ疼痛ノ爲メニ歪顏ヲナスコトアリ。

二、頭痛

頭痛ハ通常コレラ見ル症狀ニシテ、且ツ早期ニ現ハル、頭痛ノ占居部ハ、多クハ全頭部ニ汎發性ニシテ弱强種々ナリ。屢頭痛ハ嘔吐ヲ伴フ、且腦膜炎ニ見ル頭痛ハ、多クハ體溫上昇ニ關係セズ、多クハ諸種ノ五官刺戟トニヨリ激甚ナル傾アリ。

三、嘔吐

日常且ツ早期ニ見ル症狀ニシテ、所謂腦性嘔吐ヲナス。

四、眩暈

屢コレヲ認ム、殊ニ體運動(竪立、跪座等)ニ屢來タリ同時ニ惡心ヲ伴フ。

五、精神狀態ノ變化

初期ニアリテハ一般ニ精神興奮狀態、例之不安、不眠、譫語、幻覺等ヲナス。又一時性ノ噪暴又ハ憂鬱狀態ヲナシ。或ハ嗜眠無慾狀態ヲナシ、怒リ易ク不機嫌トナリ、平常ノ如ク嬉戯セズ、暗キ室ノ一隅ヲ求メテ跪座シ、又ハ呻吟大息スルコトアリ。

カヽル無慾狀態、又ハ嗜眠狀態ヨリシテ徐々ニ又ハ急ニ、昏睡又ハ昏睡狀態ニ陷ル時トシテハ病初ヨリシテ昏瞢若シクハ昏睡狀態トナルコトアリ、時トスレバ昏睡又ハ昏瞢狀態ヨリ一時性ニ覺醒スルコトアリ。

六、脈搏

初期ニアリテハ脈搏遲徐ヲナシ、末期ニ及ビテハ脈搏ハ促迫ス。尙病初ニアリテハ脈搏ハ一定時或ハ遲徐シ、或ハ促迫スルコトアリ、其他脈搏不規則及不同アリ。

七、榮養狀態

榮養障碍トシテハ急速ニ來タル羸瘦アリ。

八、熱

急性腦膜炎ハ日常熱ヲ伴フ、殊ニ化膿性腦膜炎ニアリテハ高熱アリテ多クハ惡寒(又ハ戰慄)ヲ伴フ、固有ノ熱型ナキモ、死前ニハ甚シキ高熱ヲ呈ス。コレニ反シ

前ニ虚脱ニ陥リ、體溫低下ヲナスコトアリ。

結核性腦膜炎ニアリテハ體溫上昇ハコレヲ化膿性腦膜炎ニ比シテ著シカラズ

死前ニ於テ著シキ高熱ヲ呈スルコトアリ。

九、便秘

屢便秘ヲナスヲ常トスレドモ、時トシテハ便秘下痢交々來タリ又哺乳兒腦膜炎ニアリテハ下痢ノ葬主タルコトアリ。

以上の症狀を見るに至りては事遲れた譯であるが、父母たちは葬式濟んで醫者話の愚を見ないやうにしたいものである。腦膜炎は死なずとも、腦のおかされやうによつては成績不良兒や中間兒位で濟まない事があるから、寸時の怠りもないやうに願ひたい。

次には傳染病にかゝらせないやうにする事であるが、此の傳染病も隨分數あるやうであるが殊に小兒傳染病について專門家の調べを聞いて見ると、

痘瘡、水痘、痲疹、風疹、實布的里、猩紅熱、百日咳、赤痢などのやうであるが、余の子供を實布的里にかゝらせた失敗談を記して讀者の參考に供したい。

日記を見ると本年(大正三年)四月十六日熱卅八度五分で滿一ヶ年二ヶ月の幼兒であるから、別に案じるには及ぶまいがどうも何時よりも樣子が違ふがと母親は氣はつかぬではないが、遂に手おくれして二十一日に園醫に見せた。さうすると之れは實布的里だから、一刻も早く入院させねばいかん早速手續をするからといふ事で、母の驚きは一通りでなかつた。手續もするやせんやで、直ちに大學醫院の小兒科へ入院させた。かゝる病氣にかゝらせることは意外であつた。考へて見るにどうも原因が判からない、何所から傳染したか判からない、發熱前に外出したけれどもさういふ病者は見ないどうした事だらうと思ふて居ると、園兒の九歳になる女兒が鼻に腫物が出來て、園醫に幾度見せても判からんので、他の耳鼻咽喉科に見せたさうすると之れは實布的里であるが、誰かお内に實布的里の人はなかつたかといふ問ひてあつたから、イヤ實は私の子がといふとさうですかと考へて、時に鼻の實布的里の前徴は何所で判かるでせうかと、尋ねると、鼻の周圍に腫物が出來ますといはれたので、尚余は續けてそれでは其前徴があつてから何時頃までに病勢が進むのですかときくと、種々ですが鼻のは隨分永くかゝるものですといつた

のてそれては此の子供が先きてすね――ときくと、醫師もさうらしいてすね――といつた。之れ亦府立醫院に入院させ、兩兒共早く全快して退院しましたが、私の子供の方は實布的里にかゝつた爲め、歩行が二三ヶ月遅れたやうてあります。爰て讀者に御參考までに記入したい事は九歳になる子供は、園の近傍からきてゐるのてすが此の子供は食物のために毛利の出來ない子て、家庭に歸ると必らず病氣を持つて歸るので、此の實布的里も二週間ばかり家庭に歸つてゐた時に、持つて歸つたものてあります。それて病は口よりといふ事があります通り、食養會のやうにしてゐれば、傳染病にもかゝらないかと思ひます。それから病氣ても鼻の病氣は耳鼻科に見せねばなりません、九歳の子供が鼻に腫物が出來た時には如才なく園醫には見せたが結核性のものだからといふやうな事て、思はぬ失敗をしましたが、此の實布的里が鼻に來る事は珍らしいさうてすから、內科の醫者に判かる筈がなく、又私も實布的里が鼻に來る事がある事は少しも知らなかつたので、思はぬ過失をした譯てあるが、それから實布的里について經驗のある人からきゝますとどうも洋食をする家庭に多いやうに思はれる事てあります。貧乏人に病人が少く上流の家庭に病人が多いといひますが、之れは美食が最大の原因だといふ事を斷言するのてあります。扨餘談をのべましたが、此實布的里は今日の血清注射が行はれるまでは隨分死んださうてありますが、何ぜ死ぬかと調べて見ますと、實布的里菌が人體につくとそれが咽頭の粘膜に附着し咽頭に義膜が出來爲に氣道が塞がれるから呼吸が困難になり遂に心臟を侵し神經を侵すといふやうになつて取りかへしのつかぬ事になるらしいてすが、親たる人はいふまてもない事てあるが、病氣は醫者に限るものてある事を忘れないやうにして貰ひたい。十二歳になる女の子て幼少の時實布的里にかゝつて利巧な生れ付が愚になつたのがある。子を澤山育てた人がいふには便通をよくし食物を節すれば育つといつてゐる、どうかして病氣にはかゝらせたくないものてある、澤山に子を育てた人は子供といふものは便通をよくさせて食物を節すれば獨りて育つといつてゐるが眞理てある。余が教育してゐる子供なども、痼疾てない以上は大概な病氣は入園一二月て全治して仕舞ふ、寢小便のやうなものても、全治する、さうして世間に種々なる流行病があつても食物に注意してゐる時には這入つて來ない。又這入つても大事には至ら

負傷

ぬ、實布的里をやつた時でも死んだものが澤山あつたやうだが、そこ迄行かずに全快した。之れを考へると化學的食養會の貢献は偉大なものである。

次の問題は負傷させないといふ事である余が實際經驗した子供でも學校へ行くまではさうでもなかつたが學校で頭部に大の怪我をしてから、目立つてよくないやうになつたといふのがある。故に怪我の仕舞で何處にどうしてゐてもするときにはするのだなどいつてゐると、生れもつかぬ異常兒にするからどうか寸時も油斷しないやうに注意して貰ひたい。

異常兒の三種

二、學校での救濟法

これから愈々異常兒教育の實際にうつらうと思ふが、學校で教育する異常兒が三つある事を今一度のべておきたい。其一は天才兒で其二は成績不良兒で、其三は中間兒である。而して此の中天才兒は保護すべきもので教育すべきものでないといつておいたから、本書の主眼とする所は成績不良兒と中間兒である。此の成績不良兒の研究については教育學といふやうな學術が輸入されてから我國で最も早くより行はれたのは明治廿九年四月に長野縣長野市後町尋常高等小學校で創業されたのが始めである。而して最近には明治四十一年秋頃から、東京高等師範學校附屬小學校第三部で補助級といふのが出來てゐる。中間兒教育については我が白川學園を以て最初のものではないかと思つてゐる。されども成績不良兒といひ中間兒といふのは、程度の問題で、全然違つたものではないけれども高等師範の補助級と、白川學園とはだいぶん相違がある。高等師範學校のものは成績不良兒の中でも能力の遲鈍なものに限られてあつて精神に異常があるとか、聽力が殆ど聾に近いとか不良少年に類したものとかの教育はまだ何等の施設がない。さうして高等師範のは通學であるが、白川學園のは寄宿させて家族的である。獨逸などで識者の間には補助學校について批評があるやうであるが、余はどうかして理想的のものにしたい考である。理想的のものとは學校的のものでなくて、家族的のものでなくてはならぬのである、されども白川學園の如きは特殊中の特殊なもので、小學校で白川學園でやつてゐるやうにして貰ひたいといふのは無理である。故に成績不良兒の事を甲種となし、中間兒の事を乙種として記述しやう。

甲種　成績不良兒教育法

甲種成績不良兒教育法

京都市の成績不良兒數

此の成績不良兒は、全國二萬六千有餘の小學校何れの學校もない所はなからう、小說田上のやうなのは無い學校があるにしても、算術が四點修身が三點平均點が六點にならない、併し止むを得ないから進級させてやらうといふやうなものが、五人や六人ない學校はない。余が京都六十二ヶ校の各尋常小學校について一々調べて見たのに、二千二百十四人といふ實數を知る事が出來た。其時の就學兒童が四萬三千餘であつたから、大略百分の五で、百人の內に五人の割合になつてゐるが、どこの學校でも此の數はあるものと見て差支なからうと思ふ。而して此の成績不良兒をどうするかといふ事は隨分苦心されてゐる。京都市何れの學校も種々樣々な方法が講じられてゐる。其の如く日本全國否、世界各國の大問題である。教育問題の大部分は之れである。それでどうもよい方法がない、遂に教育者の自暴自棄とでもいふやうな事になつて、そんな成績の惡いものに力を盡すよりも善いものに全力を盡すのが利益だなどいつて、まるきり花作りがいふやうな事を稱へるものが出來るやうになつた。東京附屬の小林君なども一時は失望してつまらぬ仕事にかゝつたなど自分も感じ、同僚間からも笑はれてゐた所が辛棒した甲斐があつたと見えて劣等兒教育の實際てふ著書が出た。是は斯の問題に趣味ある人が必らず一讀すべきものである。余もさう思ふ、こんな目に見えぬ仕事をしてと思つた事があり、又人からも君のやうなものがもつと目に立つ仕事をしたらといふものも隨分あつた。けれども目に立つものは誰でもする、人がやらないから行るのだと思つてゐたが、苦心は益々多い、けれども愉快である、苦心が積る程愉快である教育の眞理は斯ういふ所から見出す事が出來ると思つて、同趣味の人には誰にでも話した譯であるが、最近世界の教育界を動かしてゐるモンテッソリー女史の如きも、白痴教育や低能兒教育に從事して新開地を作つたやうであるが、女史の教育說などには別に新しい說も見出さないが、兎に角日本の教育者の中には又來た動物園に新來の客でもあるかのやうに、讀者諸君にはまさかさうでもなからうが。さて實際問題に入つてどうしたらよいか、多くの子供の中で五人の成績不良兒はどうしたらよいか、之れは五人の子持が一人の子屑に心配すると同樣で、どうしたらよいか、又諸君の五本の指の中一本負傷したらどうしられませう、石炭酸水で洗つて繃帶しておけば全治する位ならばそれでよいが、若し全身に害毒を及

ぼすといふやうな憂があつたらどうなさるか之れと同じやうに僅かに五人であるけれども、讀者が學校の先生であるならば、其五人の成績不良は其先生の缺陷であり、先生の病氣であり先生の負傷であり、先生の子供の子屑であり先生の五本の指の中の中毒である。然るに若しそれ之れを他人の子であるとして雲烟の過眼視するならば其先生は自己を知らない先生であると思ふ、人を知らない先生であると思ふ、人間の何物であるかを知らない人であると思ふ、宇宙觀も人生觀もない人であるといひたい著者も耻かしながら何も判からない東西も判からないものであるが、兎に角余が今日までの經驗によると成績不良兒などに注意を拂ふ人は、優良教育家である事を斷言する。

そこで然らば愈々此問題をどうするか、高等師範の如くに補助級を作るは、五十年百年の後はいざ知らず、今日は不可能である。若し出來ても三大都市に二三のものが出來る位である。故に補助學級をおかないで教育する工風を考へなければならぬと思ふ、然らば此問題は如何に解決をつけるか、余は左の問題を提供したい。

一、家庭との連絡の實をあげる事、

二、校醫の改善をなす事、

三、特別扱をなす事、

四、夏季休暇を利用する事、

五、學校で寄宿舍を設ける事、

先づ右のやうな事が都合よく出來れば、餘程よいと思ふから、此の各問題について愚見をのべておきたい。

家庭と連絡の實をあげる

一、家庭との連絡の實を擧げる事

此の問題についてはだいぶん昔から實行されてゐるが、異常兒のためにどれだけ利益があらうか甚だ疑はしい。余も種々なる經驗をもつてゐるが、學校で父兄會をやつても來てほしいやうなものは來ない、學校が別に注意をしなくてもよい內からは出て來る。又通知簿の必要な內では、通知簿が讀めないやうなものである。それで余が茲にいふ家庭との連絡といふのは、もつと深刻な同情ある連絡である。校長は其筋へのうけがよいためにするのでなく、受持教員は校長への顏立にするのでなくて教育家諸君が自分にさういふ異常兒があると思ふて、涙を以て彼是相

談するのである。それをやつて貰ひたいさうすると親達も教師に信頼して種々なる救濟策が發見しられやうし、又教師の方でも、思はぬ所に注意すべき點を見出す事が出來やうと思ふ。故に學校の先生も親達も共同一致して、成績不良兒のために今一層の御盡力を願ひたい。

二、學校醫の改善をなす事

學校醫の改善も人を改善する事は遠き將來の事でもあり、又經濟問題も伴ふ事であるから、先づ人より人の思想と腕の改善をしたいものである。又學校醫も醫者は仁術であるといふのであるからなるべく病人を作らないやうに希望するのであらうから、それは積極的に兒童の心身强健を計つておいたならば、餘程違つて來るであらう。余は天下の學校醫諸君に希望したい。其は積極的强健法である。

内務省衞生局の調査になると歐洲各國の醫師數並に人口壹萬人に對する醫者の割合を一見すれば、我が國民が如何に多病にして醫者を要求して居るかゞ判かる。

國名	醫師數	同歩合
獨逸	三三一五六人	五人五
佛蘭西	一七一五一人	四人四
墺太利	一二一九七人	四人四
匈牙利	五四八三人	二人八
伊太利	二一三五一人	六人四
瑞西	一九六七人	六人一
西班牙	一三一八二人	七人一
白耳義	三六七二人	五人四
和蘭	二三二二人	四人五
英蘭	一八五七五人	六人一
蘇格蘭	三二四一人	五人六
丁抹	一五五六人	六人四
諾威	一一七二人	五人三
瑞典	一三八二人	二人七
芬蘭	四〇九人	一人五

露西亞	不明	一人九
日本	三七〇七一人	七人四

以上の統計によると、日本位病人の多い國はない。隨つて病兒が多いといふ事も想像が出來る。之れは學校醫や先生方に、大に御反省を願ひたいと思ふ。

さうして都會では各專門醫があるから、どうなり都合がつくが、田舍にてはさうは行かぬ、故に郡部の校醫には一層此の邊の心がけを願ひたいと思ふ。

三、特別扱をなす事

特別扱についてはすべてが特別扱であるけれども茲に特にのべやうとするのは學科と治療と操行についてゞある。

學科について先づ成績不良兒に多數を占めてゐるものは、算術であるやうに思はれる。何故に成績不良兒が算術科に多いかといふ事は、教育家諸君が研究されて了解されてゐる通りに、抽象的學科にして思考を要するからである。所謂低能兒余のいふ能力遲鈍の類型に屬するものは抽象的な學科又は思考を要するものには不得手である。さうして又教科書や、教師の教授法や、教材の選擇が不味ならば成績不良兒の算術の成績をよくする事が出來ないのである。然らば如何にせば此の種の兒には、算術の能力を養成し得るかといへば、なるべくは實際的であつて具體的であつて欲しい。此の意味を說明するならば、實際的といふのは、三と五と加へるといふ事を教へるにしても、形式的に無意味な事をなさずに、少なくてもよいから、3＋5＝5＋3＝といふよりも、

一、太郎さん石を三ッ拾つてお出でなさい、

二、次郎さん石を五ッ拾つてお出でなさい、

三、太郎さんも次郎さんも其石を先生の机の上へ持つてゐらつしやい、

四、皆さん幾つになりました。

と斯ういふやうに教へるならば、興味もある、兒童の活動を盛にする事も出來る。

大體教育は兒童心身の活動を盛にしなければ進むものでない、此頃は動的教育などいふ學說や、實驗もあるが、斯の種の教育學說の起るも當然である。けれども又餘り動的動的いつて、どうてもよいになつては困る。兒童を反故にするやうなものであるから、少しは靜的を加味して貰ひたい、否動的でない、靜的が加はつて動的

が眞價を發揮するものであるから、此の邊の誤解のない事を希望する。イラヌ差出口をいつたが、モンテスソリー氏なども算術教授に教具を用ひて、教授してゐるやうてあるが、成績不良兒にはかゝる教具は用ひてもよいが、これ亦教具によりすぎても困るのであるから、中庸を失しぬやうにして貰ひたい。さうして教材の撰擇については最早我國教育者に忘れられてゐるてあらうが、余は近藤、富永、伊藤三氏合編の毎時配當算術教案を用ひて居るが、其第一學年用の中より五の教材を記載しやう。

第一時

五の精密なる教へ方第一歩及呼び方、

一、四の事を別に何と呼びますか字で書いてごらん

二、四つに一つ加へたものを何といふか

三、五つの事を別に何と言ひますか

四、〇を五つ書いてごらん

五、五から一に逆に數へてごらん

六、五から一つ取れば三つ取れば四つ取れば

七、一にいくつ加へて五つか二には……三には……四には……

第二時

五の精密なる數へ方第二歩及日本數字の教授

一、(棒或は線にて)三の字一つ二の字を一つ作つてごらん何本ですか

二、二の字を二つと一の字を一つ作つてごらん合せて何本ですか

三、五本出しなさい一の字が幾つ出來ますか

四、三角を作つて何本殘りますか

五、四角を作つてごらん殘りは何本か

六、一から五まて一つ二つて順に數へなさい逆に數へなさい

七、一、二、三、で順に數へなさい逆に數へなさい

八、(五の字の教授を了して)一より五まて書きなさい

九、それを順に讀みなさい逆に讀みなさい

第三時

五の精密なる數へ方第三歩又書方練習

一、手の指は幾本でしたか小指から順に數へてごらん

二、それから親指一本かくすと殘り何本ですか

三、小指と中指をかくせば殘り何本ですか

四、指を一本づゝ折ると何度で折りつくせますか

五、指を二本づゝ折ればいく度か

六、指を三本折れば殘りはいく本か

七、一より五まで書きてそれに○を附してごらん

八、（書きたるものを示しつゝ）五は三よりいくら多いか……二よりは……一よりは

第四時

續き

一、（棒或は線にて）五本出して四角を作つてごらん何本入りましたか後に何本殘りましたか

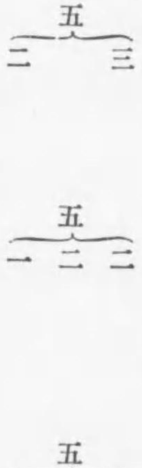
二、五本出して三の字を作つてごらん何本入りましたか後に何本殘りましたか

三、四角の線を以て三の字と二の字と二つに作りかへてごらん何本不足しますか

四、五角を作つてごらん何本入りましたかそれで二の字を作つてごらん幾つ出來ましたか殘りがありますか

五、五の字は何の字と何の字とで分けられますか

例



此の教科書を參考に教材を取つて行つたならば、實際に間に合ふ算術の頭が出來やうかと思はれる。此の教案の參考をすゝめると同時に、是非精讀して貰ひたいのは、佐々木吉三郎氏解說の數へ主義算術教授法眞髓である。新らしいものでないと御氣にゐらぬ日本の教育家には、こんな古いものはと御笑ひかも知れぬが、算

術教授にさう急激にどういふ事はない、寧ろ今頃の算術教授が機械的形式的で內容のないものゝやうに思はれる。機械的に大數の加減乘除が出來ても、實際生活に間に合はない算術教授は徒勞である。殊に成績不良兒にはさう大數を敎へる必要もなければ、又數學者になるのでもないから、日常平易な計算が出來ればよいのであるから、前もいつたやうに實際的具體的といふ事を主眼として敎授すべきものである。

次に國語について一言して見るならば、なるべく話方も、書方も、讀方もすべて統一してやらねばならぬ。是は別に論ずる迄もなく、敎科書がさうなつてゐるから蛇足であるが、一言しておく、而して統一は必要であるが、單調に流れないやうにせねばならぬ。又其目的は一つであつても、方法は簡明なる變化を要する。例へばハといふ一字を敎授するといふ事であれば、其時間にハを敎授する事に專心でなければならぬ、併し其方法については種々變化をつけて敎授せねばならぬ。余がかつて實驗した事をのべて見ると、殆んど白痴に近い子供、余の立場からは中間兒であつたが、片假名のハを敎授するに、木の葉から導いてハの文字ある事を敎へ、次に齒葉等により十分の發音の練習をなす事は普通兒の敎授法と少しも變はらないが、さて普通兒に於ける方法だけでは、不十分である。普通兒に一度の處を十回やつても、二十回敎授しても別に變化はない。故に種々なる方法を講じなければ容易には効果がない。それで余はあらゆる機會を利用して、ハの文字の印象を深からしめた。其一通りをのべると、先づ普通兒の如くに敎授しておいて、次には積木の練習をした。其時には積木を以てハの形に排列させる、次には石盤に向つてハの字を三つ書け、二つ書けといふ風に命じて書く事と讀む事は必らず連結させる又遊戯場に出ては小石を拾はしめて、ハ字形に排列させる、次には地上にハ字形の撒水させるといふ風にして始めてハ字を覺えたが、又其活用法については、一々實物について書かせるといふ風であつた、是は成績不良兒としての團體敎育を受くべき資格なき兒童であるから、別に參考とする程の價値はないが、要するに目的は單一で、方法は簡明な變化をつけなければならぬ。餘り敎授法の奴隷にならぬやうにせねばならぬ。換言すれば敎授法のために敎授するのでなくて、兒童のために敎授するといふ事である。

話方については成績不良兒の多くは言語の不明、語尾の曖昧、低聲等が多いから、是等の缺點について普通兒よりは一層の矯正教授をする必要がある。此の矯正教授を爲すに當りて、最も必要な事は殊更機會を設けて、大聲を發せざるを得ないやうに語尾を明瞭せざるを得ないやうになさしむるといふ事が必要である。故に話方教授には時々談話會などを催すもよく、又教師は絶えざる注意によりて、機會のある毎に臨機の方法を講じねばならぬ。決して普通兒の如く形式に重きをおいはて成効しないのである。尙言語に故障ある者は聽力の弱きために誤聽より發音などの亂れてをる者があるから、よく注意して置ねばならぬ。耳科專門家の調べによると、佐行と阿行はよく聽え、波行と良行は聽き取り難いとの事である。綴方については種々なる方面に於いて兒童の活用的練習と見てもよい。一言にていへば綴方の善惡は、兒童其者に於ける教育の結果如何の大部分を觀察する事が出來るのである。則ち其第一は兒童が正確なる文字を記する事が出來るか、記憶の强弱は如何なる程度にあるか、進んでは概括力概念等が成立してをるかといふ事柄等を知る事が出來る。其例をあげて見ると、讀本の中で或る一章を課した後に其課についての綴方を課して見る、而してそれが文字の誤りもなく、思想も整然として、規律あり統一があつたならば、其は上等の成績である。然るに成績不良兒になると、文章に規律統一がないのは固より誤字誤解を以て殆ど其文をなさないのみならず、何の事か譯の判からないものがある。而して其綴方によつて如何なる文字を記憶し、如何なる程度までの概括力が出來、はた又何程の思想が出來てをるかを考へて、其兒童に適した方法を取らねばならぬ。而して其教材はいふ迄もなく兒童の最も深く腦裏に印象されたものと認められるものを、選擇して自作せしむるに限る。訂正は個人的でなければならぬ、さうして誤字などあれば、一々訂正せねばならぬ。又誤字については其誤字の原因を調べて訂正せねばならぬ。而して綴方について注意すべき事は、文法に關する教授であるが、成績不良兒には文法上の事は徒勞に屬するから止めるがよいと思ふ。

書方は實用の方面からいへば餘り骨をおるべき教材でないかも知れぬが、我國の習字は成績不良兒のためには至極適當の教材である。第一墨をするといふ事からして兒童のためには清潔の德を養ふ事も出來、手指の筋肉の運動も出來、又心理

的には注意の練習も出來るのである。第二は紙面に向つて練習するときには目と手の練習を主として修身上の廉潔、勇氣清潔等の訓練的價値が認められる。殊に兒童の成績品について、一々點檢したならば如何に思ひ半にすぎる事が多いか又書風は其人の氣質を知るの一證となすに足るとは此頃心理學者間にも唱道されつゝあるのであるから、成績不良兒に於ては、一層此の科に興味を有して研究し、教授すべきものであるかゞ判かる。それで教授上二三の注意をのべて見ると、文字の大小であるが、是れは半紙一枚に四字を以て適當と思ふ。其理由は成績不良兒は多く手腕の筋肉運動が不十分である。故に大なる文字を以て腕の運動と共に練習させるのがよい、而して教授するには筆法を教へるよりも手を取つて教へたり、手本を摸寫させるがよい。併し是れは相當發達する迄の事であつて、相當に發達したならば、獨力で書かしめ教師は干渉の態度でをるがよいと思ふ。さうして文字の大小も尋常一年では四字、二年では六字、三年では八字といふ風に、漸次細字に導いてゆくのがよい。用筆も亦文字の大小に從つて、大より小に及ぼすがよい、又草紙はなるべく白紙がよい、止むを得なければ新聞紙を用ふるもよいが、反故をとぢこんだ草紙は全然廢さなければならぬ。

手工科は簡單なる物品を製作する能を得せしむるのと、勤勞を好む習慣を養成するといふのにあるのであるから實用的技能と道德的習慣を養成するといふことになるのであるが、我國に於いて手工科の加へられたのは、日尙淺きにあるから、十分の効果を認められるには至らないのである。けれども教授法にして十分の研究をしたならば、必らず所期の目的は達し得られるのである。殊に成績不良兒には此の手工科を中心にしてもよいではないかと思はれる。さうして又此の手工科によつて修身科なり國語科なりて教授した事を具體的に示し、又全然此の科のみて其目的を達し得られる事が少なくない。例へば栗といふ事について話したならば、粘土細工に栗を作らせて國語時間に教授した事の要領を話したり、質問したならば、如何に兒童は愉快に、其內容上の智識が頭惱にきざみつけらるゝかは、豫想の外である。又事物の正確であるとか、忍耐せねばならぬとか、節儉を守らねばならぬとかいふやうな事は、多くは說話では判かるものでない、もし假りに判つたとするも話を記憶するだけで實行するに限らぬ。故に正確といふ事ならば、切り